

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第254集

那珂遺跡4

—那珂遺跡群第23次調査の報告 その1—

1991

福岡市教育委員会

那珂遺跡4

—那珂遺跡群第23次調査の報告 その1—

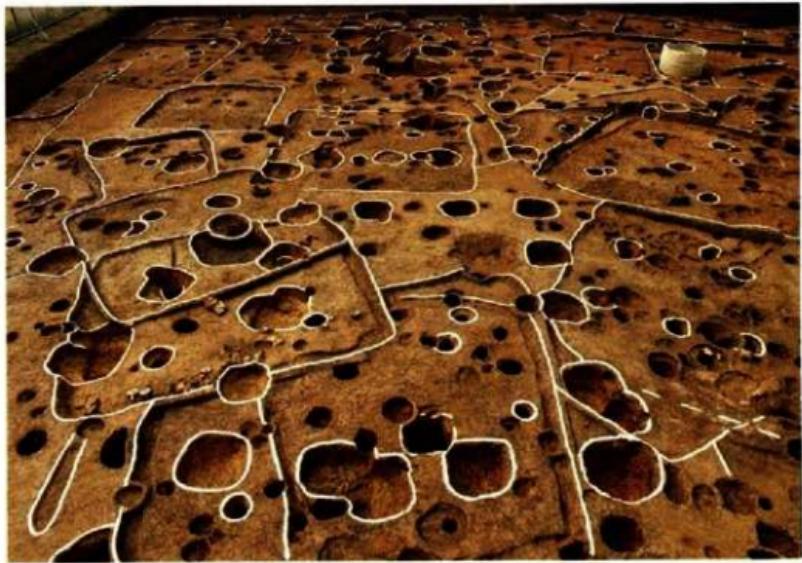


遺跡調査番号 8936

遺跡略号 NAK23

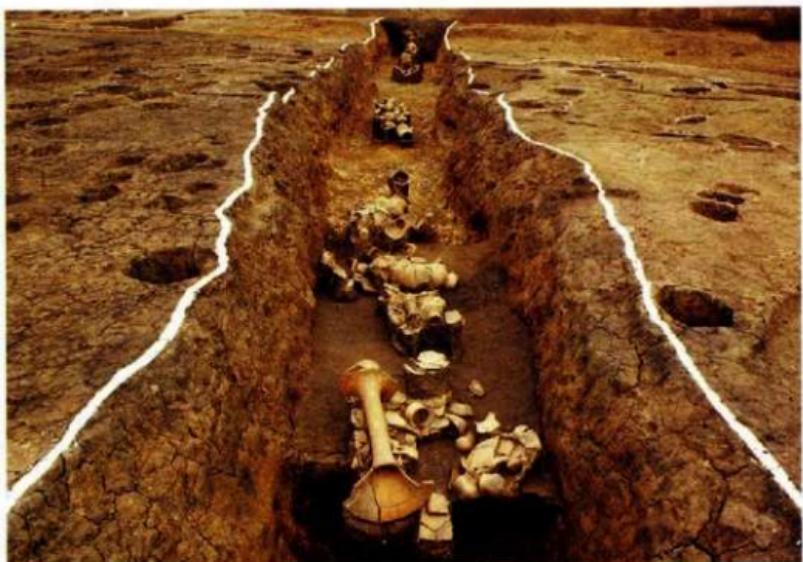
1991

福岡市教育委員会



(上) 第23次調査区全景(南から)

(下) SB 87・90・91出土状況(東から)



(上) SD 44遺物出土状況（西から）

(下) SD 44出土銅戈鉗型

序

福岡平野のほぼ中央部を南東から北西に伸びる広大な那珂台地には、先人達の残した文化遺産が数多く分布しています。都心部に近いこの地域は開発が活発に行なわれているところであります。社会資本の整備が急務となっています。

このたび、都市計画道路竹下駅前線道路新設に際して、那珂保育所移転が本格化し、移転先にあたる那珂遺跡群の一部を発掘調査いたしました。

調査の結果、弥生時代の環濠や銅戈の鋳型、古墳時代の集落跡、古墳時代終末の倉庫群、中世の集落跡など各時期の遺構・遺物が密度濃く発見されました。

本書は、これら発掘調査の成果のうち、第1分冊として古墳時代と中世の集落跡を中心に収録したものです。

本書が、埋蔵文化財に対する市民の方々のご理解、さらには学術研究上役立つことができれば幸甚に存じます。

最後になりましたが、発掘調査から整理に至るまで本市民生局、土地開発公社をはじめ、多くの方々のご理解とご協力を賜わりましたことに対し、心より感謝の意を表します。

平成3年1月10日

福岡市教育委員会

教育長 井口雄哉

例　　言

1. 本書は、民生局那珂保育所移転に伴い、土地開発公社の受託事業として福岡市教育委員会が1989（平成元）年7月10日から1990（平成2）年1月4日にかけて発掘調査を実施した、那珂遺跡群の第23次緊急発掘調査の報告書である。
2. 本書に収録した発掘調査の記録は、諸般の都合上、古墳時代の集落址と中世の集落址を中心としたものである。弥生時代の環濠、土壙、掘立柱建物、及び古墳時代終末期の倉庫群に関する報告は次年度に行う予定である。なお、巻頭図版及び巻末の図版には全調査に係るものを掲載している。
3. 遺構の呼称は記号化し、竪穴住居址→S C、掘立柱建物→S B、井戸址→S E、土壙→S K、溝→S D、用途不明遺構→S X、ピット→S Pとした。なお、遺構番号は種類に関係なく連番とした。ただし、S PはS Pだけで番号を付している。
4. 本書に使用した遺構図作成は、下村 智、荒牧宏行、上方高弘、大橋隆司、池田裕司が行なった。現場写真は、下村、荒牧、上方があたった。遺物実測図は荒牧が中心に行なった。また、整図は、横山邦継、松村道博、田中寿男、上方高弘、安野 良、竹原りえ、吉村知子、二牟禮香代子が行なった。遺物写真の撮影及び焼付は埋文センターの力武卓治氏にお願いした。
5. 本書で用いる遺構図の方位は全て磁北である。
6. 那珂遺跡群第23次調査に係る遺物・記録類（図面、写真、スライドなど）は、次年度報告終了後、福岡市埋蔵文化財センターで収蔵・管理される予定である。
7. 本書の執筆・編集は、下村、荒牧が行なった。

遺跡調査番号	8936	遺跡略号	N A K 23		
調査地地籍	博多区竹下五丁目270-1外			分布地図番号	038-A-3
開発面積	2,000m ²	調査対象面積	2,000m ²	調査実施面積	1,428m ²
調査期間	1989年7月10日～1990年1月4日	事前審査番号	1-1-3		

本文目次

序

Iはじめに	1
1 調査に至る経過	1
2 調査の組織	1
II遺跡の立地と環境	3
III調査の記録	5
1 墓穴住居址	6
2 土壌	43
3 井戸址	49
4 溝	50
5 遺構検出時出土遺物	53
IVおわりに	54

挿図目次

Fig. 1 那珂遺跡群位置図 (1/25,000)	2
Fig. 2 那珂遺跡群発掘調査地点位置図 (1/4,000)	4
Fig. 3 那珂23次調査区位置図 (1/1,000)	5
Fig. 4 那珂23次調査区遺構配置図 (1/200)	折込
Fig. 5 S C01遺構実測図 (1/60)	7
Fig. 6 S C01出土遺物実測図(1) (1/3)	8
Fig. 7 S C01出土遺物実測図(2) (1/4)	9
Fig. 8 S C03遺構実測図 (1/60)	10
Fig. 9 S C06遺構実測図 (1/60)	11
Fig. 10 S C08遺構実測図 (1/60)	11
Fig. 11 S C08出土遺物実測図 (1/3)	12
Fig. 12 S C07遺構実測図 (1/60)	12
Fig. 13 S C09遺構実測図 (1/60)	13
Fig. 14 S C09出土遺物実測図 (1/3)	13
Fig. 15 S C10遺構実測図 (1/60)	14
Fig. 16 S C10出土遺物実測図 (1/2, 1/3)	14
Fig. 17 S C20遺構実測図 (1/60)	15

Fig.18	S C 21遺構実測図 (1/60)	16
Fig.19	S C 22遺構実測図 (1/60)	17
Fig.20	S C 22出土遺物実測図(1) (1/3)	19
Fig.21	S C 22出土遺物実測図(2) (1/3)	20
Fig.22	S C 22出土遺物実測図(3) (1/4)	21
Fig.23	S C 26遺構実測図 (1/60)	22
Fig.24	S C 30遺構実測図 (1/60)	23
Fig.25	S C 30出土遺物実測図 (1/3)	23
Fig.26	S C 32遺構実測図 (1/60)	24
Fig.27	S C 32山上遺物実測図 (1/3)	25
Fig.28	S C 33遺構実測図 (1/60)	25
Fig.29	S C 33出土遺物実測図 (1/3)	25
Fig.30	S C 37遺構実測図 (1/60)	26
Fig.31	S C 37出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.32	S C 34・39出土遺物実測図 (1/3)	27
Fig.33	S C 39遺構実測図 (1/60)	28
Fig.34	S C 40遺構実測図 (1/60)	29
Fig.35	S C 45遺構実測図 (1/60)	30
Fig.36	S C 45山上遺物実測図(1) (1/3)	31
Fig.37	S C 45出土遺物実測図(2) (1/4)	32
Fig.38	S C 46遺構実測図 (1/60)	33
Fig.39	S C 47遺構実測図 (1/60)	34
Fig.40	S C 47山上遺物実測図 (1/3)	35
Fig.41	S C 58遺構実測図 (1/60)	35
Fig.42	S C 64遺構実測図 (1/60)	36
Fig.43	住居址出土遺物実測図(1) (1/1, 1/2)	38
Fig.44	住居址出土遺物実測図(2) (1/3)	39
Fig.45	柱穴出土遺物実測図(1) (1/3)	41
Fig.46	柱穴出土遺物実測図(2) (1/3)	42
Fig.47	S X 14遺構実測図 (1/40)	43
Fig.48	S X 15出土石製品実測図 (1/2)	43
Fig.49	S X 15出土青銅製器先実測図 (1/2)	43

Fig.50	S X 15遺構実測図 (1/40)	44
Fig.51	S K 17遺構実測図 (1/40)	45
Fig.52	S X 55出土遺物実測図 (1/3)	45
Fig.53	S K 24遺構実測図 (1/40)	46
Fig.54	S K 76遺構実測図 (1/40)	46
Fig.55	S K 94遺構実測図 (1/40)	46
Fig.56	S K 98遺構実測図 (1/40)	46
Fig.57	S K 95遺構実測図 (1/40)	47
Fig.58	S K 99遺構実測図 (1/40)	47
Fig.59	S K 113遺構実測図 (1/40)	48
Fig.60	S K 119出土遺物実測図 (1/3)	48
Fig.61	S E 23遺構実測図 (1/40)	49
Fig.62	S E 101遺構実測図 (1/40)	50
Fig.63	S E 101出土遺物実測図 (1/3)	50
Fig.64	S D 11出土遺物実測図(1) (1/3)	51
Fig.65	S D 11出土遺物実測図(2) (1/3)	51
Fig.66	S D 96出土遺物実測図 (1/3)	52
Fig.67	遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)	52

図 版 目 次

PL. 1	(1) 調査区西半部全景 (南から)	PL. 6	(1) S C 09出土状況 (東から)
	(2) 調査区西半部全景 (東から)		(2) S C 10出土状況 (西から)
PL. 2	(1) S C 01・S K 76出土状況 (北から)	PL. 7	(1) S C 20出土状況 (南から)
	(2) S C 01遺物出土状況 (東から)		(2) S C 21出土状況 (南から)
PL. 3	(1) S C 02出土状況 (東から)	PL. 8	(1) S C 22出土状況 (北から)
	(2) S C 03出土状況 (東から)		(2) S C 22遺物出土状況 (東から)
PL. 4	(1) S C 05出土状況 (南から)	PL. 9	(1) S C 25出土状況 (東から)
	(2) S C 06出土状況 (北から)		(2) S C 26・27・32出土状況 (西から)
PL. 5	(1) S C 07出土状況 (北から)	PL. 10	(1) S C 28・47・63出土状況 (東から)
	(2) S C 08出土状況 (南から)		(2) S C 29・30出土状況 (南から)

PL.11	(1) S C 33出土状況（南から） (2) S C 34出土状況（東から）	PL.27	(1) S K 12出土状況（西から） (2) S K 17出土状況（北から）
PL.12	(1) S C 37出土状況（東から） (2) S C 38・59・60出土状況（東から）	PL.28	(1) S K 98出土状況（北から） (2) S K 113出土状況（東から）
PL.13	(1) S C 39出土状況（東から） (2) S C 40出土状況（南から）	PL.29	(1) S D 11出土状況（北から） (2) S D 44土層堆積状況（東から）
PL.14	(1) S C 45出土状況（南から） (2) S C 46出土状況（南から）	PL.30	S D 44遺物出土状況（西から）
PL.15	(1) S C 58出土状況（北から） (2) S C 109出土状況（西から）	PL.31	(1) S D 44遺物出土状況（西から） (2) S D 44遺物出土状況（東から）
PL.16	(1) S B 57出土状況（南から） (2) 北側拡張部分 S B 57・S C 121・ 122・S K 119・120（南から）	PL.32	(1) S D 44遺物出土状況（南から） (2) S C 44遺物出土状況（西から）
PL.17	調査区南半部全景（東から）	PL.33	S D 89出土状況（南から）
PL.18	(1) 調査区全景（南から） (2) S B 87・90・91全景（東から）	PL.34	(1) S D 89・92・96出土状況（南から） (2) S D 89土層堆積状況（北から）
PL.19	(1) S B 87出土状況（南から） (2) S B 90出土状況（東から）	PL.35	(1) S X 14出土状況（東から） (2) S X 15出土状況（東から）
PL.20	(1) S B 91出土状況（北から） (2) S B 103出土状況（東から）	PL.36	出土遺物(1)
PL.21	(1) S E 23出土状況（東から） (2) S E 23井筒出土状況（東から）	PL.37	出土遺物(2)
PL.22	(1) S E 83出土状況（西から） (2) S E 83完掘状況（西から）	PL.38	出土遺物(3)
PL.23	(1) S E 101出土状況（南から） (2) S K 19出土状況（南から）	PL.39	出土遺物(4)
PL.24	(1) S K 119・120出土状況（西から） (2) S K 126出土状況（西から）	PL.40	出土遺物(5)
PL.25	(1) S K 66出土状況（南から） (2) S K 72出土状況（東から）		
PL.26	(1) S K 73出土状況（北から） (2) S K 95出土状況（西から）		

I はじめに

1 調査に至る経過

教育委員会埋蔵文化財課では、円滑な文化財行政を推進するため、本庁各局はもとより市域内の公共機関に対し、次年度の開発を伴う事業計画について照会を依頼しているところであるが、これに対し、1988（昭和63）年12月7日付で局生局社会部児童家庭課から、博多区竹下五丁目270-1外の地籍における市立那珂保育所移転解築工事の事業計画の回答があった。埋蔵文化財課では、事業計画地内は那珂遺跡群の範囲内であり、同遺跡群のこれまでの調査では弥生時代から中世にわたる良好な遺構・遺物が発見されていることなどから、事前に試掘調査が必要であると判断した。試掘調査は、担当部局と協議を行い、1989（平成元）年3月15日に実施した。試掘調査では、地表下-0.6～1mに遺物を多量に含む包含層があり、基盤の褐色ローム層には複雑に切り合った住居址、上棟、溝などの遺構が全面にわたって検出された。時期は出土遺物から6世紀～7世紀代であると判断された。そこで、遺跡の取り扱いについて担当部局と協議をかさね、工事によってやむなく破壊される遺構については事前に記録保存のための発掘調査を実施することになった。発掘届は平成元年6月13日付で福岡市土地開発公社理事長名で提出され、土地開発公社の受託事業として平成元年7月10日から調査を開始した。

2 調査の組織

調査委託：福岡市土地開発公社 理事長 吉田 寛

調査主体：福岡市教育委員会

調査総括：埋蔵文化財課長 柳田純孝 埋蔵文化財第1係長 飛高憲雄

調査庶務：埋蔵文化財第1係 松延好文

調査担当：小畠弘己（試掘調査） 埋蔵文化財第1係 下村 智 荒牧宏行

調査補助：池田裕司、大橋隆司、上方高弘、日野光嗣

調査作業：秋竹一磨、池上義雄、石松 晋、上野辰夫、小笠原浦太、大神嘉彦、大鶴一夫、大長正広、梶原弥寿広、鶴川 整、河野 勝、川浪亮一、熊本義徳、車田希範、小港信二、小森一正、島田真一、島野 晋、杉山至道、高田 茂、高浪信夫、辻 史彦、時松 基、徳永静雄、仲田忠孝、中村貴之、中島権次、野秋一也、橋本順一、広田熊雄、福田雄一、別府俊美、松井一美、松永武士、村上義友、百田秀之、山岡勇雄、山口徹郎、山部増人、吉住作美、稀田恵美子、今別府序子、岩瀬恵美子、江崎光子、川上すぎえ、川崎説子、加藤恭了、黒瀬千鶴、鶴ヒサ子、



Fig. 1 那珂遺跡群位置図 (1/25,000)

皆野シゲ、炭吉裕美子、田村妙子、舍川キチエ、長浦美美子、永利妙子、中野モト、永松トミ子、西野悦子、馬場イツ子、広田光子、二牟禮香代子、野中雅子、松井良子、松浦ウメノ、村上恵美子、村田トモヨ、安高久子、山村スミ子、山本后代、吉住クニ子、吉野幸子

整理作業：上方高弘、阿部国恵、池見恭子、片野ゆき子、小西千晶、山口英子、二牟禮香代子、田村妙子、田中聖子、安野 良、松尾紹世、竹原りえ、吉村知子、山本今日子

II 遺跡の立地と環境

那珂遺跡群第23次調査地点は、那珂遺跡群の南西部にあたり、那珂川を望む中位段丘上の先端部近くに位置する。標高は9.5mで、もと両鉄用地（社宅）であった。それ以前は桑畠であったという。調査地点の東側は台地部の中心になり、平坦部が続く。西側は徐々に高さを減じて那珂川の氾濫原に至る。南側は150m程台地部が続き、それより南側は低い地形となる。北側は台地部が続き、北100m地点には埴安神を祭った地祇神社が鎮座する。さらに東北方には昭和60年度の調査で三角縁神獣鏡を出土した那珂八幡古墳がある。

那珂遺跡群の位置する那珂台地は、南が春日丘陵に連なり、北方は標高5~6mの比恵の台地部へと続く。この台地上には、後期旧石器時代から中世までの遺跡が連続とみられ、とりわけ弥生時代から古代にかけての遺跡密度は非常に高い。

近年、那珂台地上の調査も増加し、1990（平成2）年度で31次の調査が行なわれている。200m東方の第20次調査では弥生時代の中期後半一末の大溝（環濠）が出土し、夥しい数の土器と共に中広銅戈の鋳型や青銅製齒先が出土している。溝内の土器は丹塗り磨研されたものが多く、大型の筒形器台が伴っていた。筒形器台は第21次調査でも出土している。第22次調査では、これまで窯跡からの出土しか確認されていなかった神ノ前タイプの初期瓦がまとまって出土している。那珂台地に初期瓦で葺いた建物が存在し、牛頭の窓で焼かれた初期瓦の供給先のひとつがこの那珂台地であったことが明らかになった。

また、北方の比恵遺跡では、昭和13年の環濠集落の調査以来これまで35次の調査を重ね、細形銅劍を副葬した豪棺墓地群（第6次）、古墳時代後期の大倉庫群（第8次）、南面する大形掘立柱建物（第13次）、弥生前期の貯蔵穴群（第30次）、弥生中期後半一末の木臼やヤシの実容器の出土（第33次）など重要な遺構、遺物が発見されている。東方には、初期水田農耕が明らかになった板付遺跡、奈良時代の稻寺の可能性を秘める高烟廐寺が存在する。南部は五十川や井尻の遺跡群、朝鮮系無文土器やゴホウラ製貝輪を副葬した豪棺墓の出土で知られる諸岡遺跡、生産遺跡としての三筑遺跡などが広がっている。那珂遺跡群の周辺には重要な遺跡が数多く分布している。

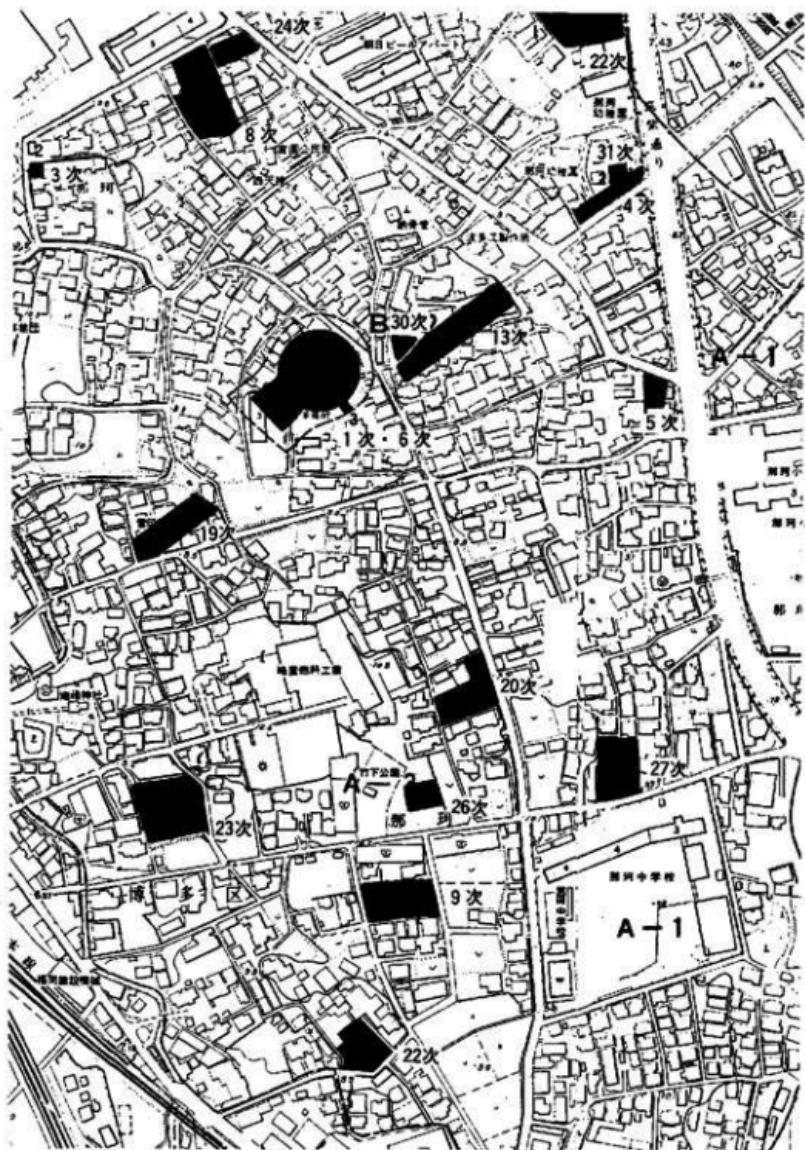


Fig. 2 那珂遺跡群発掘調査地点位置図 (1/4,000)

III 調査の記録

概要

第23次調査区は、遺跡群の西南部にあたり基盤層は褐色ローム層である。造構はこのローム層上面で検出できる。基本的な土層堆積は、地表から-0.3~0.4mが現代の整地層、-0.4

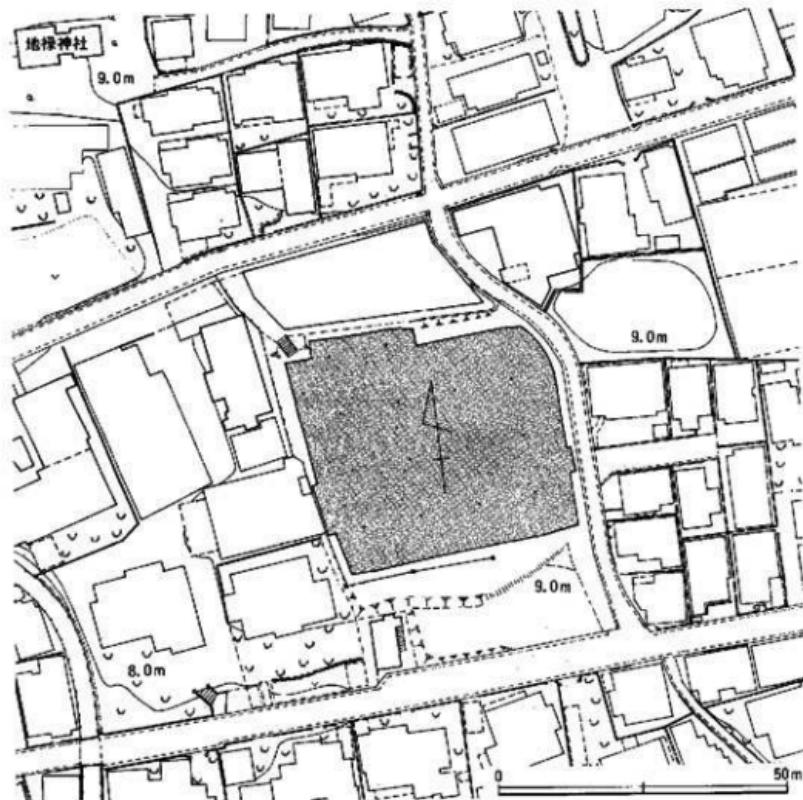


Fig. 3 那珂23次調査区位置図 (1/1,000)

-0.7mまでが暗茶褐色土、-0.6~1.0mまでが黒色土であり、遺物包含層となる。かなりの量の遺物を含み、一部は住居址等の遺構覆土になる可能性がある。黒色土の下は褐色ローム層になり、遺構が密度高く分布する。遺構覆土は、弥生時代が黒色土、古墳時代を中心とする遺構がやや茶味を帯びた黒色土、中世が暗茶褐色土となる。

検出遺構は、弥生時代に属するものが、竪穴住居址、掘立柱建物、土壙、井戸址、大溝（環濠か）などであり、古墳時代のものは、竪穴住居址、掘立柱建物、土壙、溝などである。掘立柱建物の中で古墳時代終末期に属するものは、3棟が桁を一直線に据えて配列されており注目される。中世の時期には、土壙、井戸址、溝などの遺構が検出されている。遺構総数は、弥生時代から中世まで含めて、竪穴住居址51軒、土壙29基（S X含む）、掘立柱建物8棟、井戸址4基、溝25条とピット1500穴以上がある。溝や用途不明土壙には竪穴住居址の残欠が含まれているものがあり、多数のピット群も含めてさらに整理が進展すれば遺構の数は増加するものと考えられる。今回の報告は上記遺構の中で、弥生時代の住居址、古墳時代の住居址及び溝、土壙、中世の溝、土壙、井戸址などを中心に行なうものである。

1 竪穴住居址

S C01 (Fig. 5 ~ 7, PL. 2 ~ 4) 調査区西側で検出した、やや長方形を呈する竪穴住居址である。長辺5.5m、短辺4.9m、深さ0.2mを測る。主柱は4本と考えられるが、西側2本は検出していない。東側の柱穴は径0.4m、深さ0.6mで、柱穴間隔は2.5mである。遺構の切り合い関係は、S C 22・64を切っており、S K 76も床面下から検出された。遺物は焼けた粘土塊とともに北側に集中して出土している。

遺物は比較的、多く出土した。1~3は手握土器である。1は口径5.9cm、器高6.1cmを測る。体部は球形を呈し、底部は丸底ぎみである。体部外面の下半には指頭痕が明瞭に残り、体部内面では、指を流したタテ方向のナデ痕が認められる。色は褐色を呈し、脆い。2も1と同様の器形を呈するが、口縁端部が内傾した平坦面を有す。外面には指頭痕が明瞭に残る。口径、器高ともに1より一まわり大きく、各5.9cm、4.1cmを測る。色は褐色を呈し、脆い。

3は1、2と器形、大きさともに明らかに異なる。平底からわずかに弧を描き直線的な体部につづく。口縁部は内傾し、外面の屈曲に不明瞭な棱がつく。体部外面に若干指頭痕がつき、内面にはタテ方向のナデ痕が残る。内底部にハケ目が認められる。口径8.8cm、器高4.9cmを測る。

4~10の境は5以下、同様の器形を呈するが、口縁部が内傾していくものと直立ぎみのものとの違いは認められる。4は口径10.2cm、器高7.1cmを測る。球形のプロポーションで、外面体部の上位にはタテハケ後ヨコ方向のナデ、下位にヨコ方向のハケを施す。内面はナデ調整で、わずかに指頭痕が認められる。5は口縁部が内傾しながら弯曲する類で、口縁部にヨコ方向の



FIG. 4. Shangqiu Zhouyi Museum (1/200)

ナデ、体部から底部にかけては細かいミガキが施されている。口径11.8cm、器高5.7cm、胴部最大径12.4cmを測る。6の体部は厚めで、口縁は直立していく。外底部に不整方向のハケ目がわずかに残る。7~10は器面が粗れで剥落し調整が不明である。

11は口径16.2cm、器高19.0cmを測る小形の壺である。胴部最大径はその中位にあり、底部は丸底を呈す。外面は器面が粗れ、調整不明であるが内面は口縁以下ヘラ削り、体部中位から底部にかけては

ナデ調整が認められる。13は瓶の完形品である。口縁は直立ぎみに立ち上り、その端部は平坦である。体部中位でゆるやかに底部にかけてすぼまる。取手は体部の中位とそれより少し上位に付く。外面は粗いタテハケ、内面はナデ調整を施す。口径20.9~21.7cm、器高21.1cm、底径8.0cmを測る。胎土は砂粒を多く含み、粗い。14は胴部があまり張らない長胴形の壺である。外面にタテ方向のハケがわずかに残る。内面はナデ調整と考えられるが、下半に砂粒の動きが認められ、ヘラナデが加えられた可能性がある。色は褐色ないし黒褐色を呈し、胎土に砂粒を多く含む。体部最大径26.5cm、体部高29.5cmを測る。15は体部最大径が、体部中位以下にくくるタイプである。復原口径15.1cm、器高30.0cm、体部最大径29.0cmを測る。底部は平底に近い緩やかなカーブを描く。体部はその下位に最大径をもつ指円形を呈す。最大径部付近の器厚は最も薄くなり、頸部にかけてはほぼ同じ厚みである。口縁部はその中位で、畳曲し外反していく。

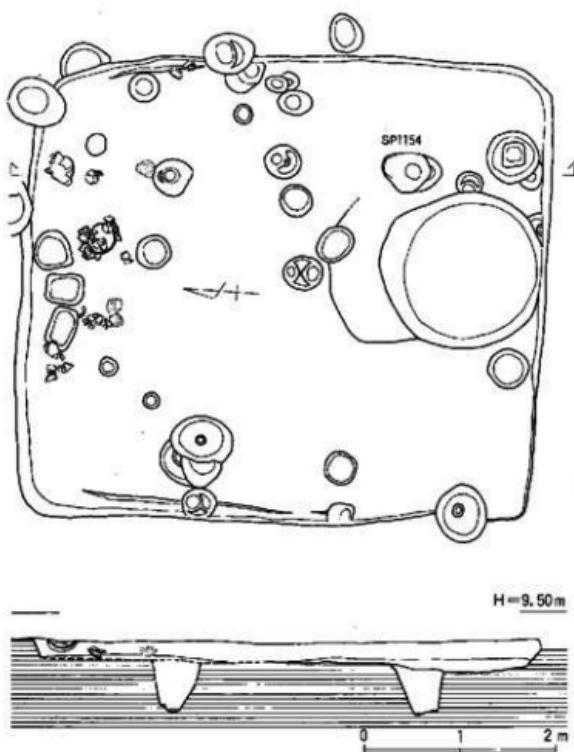


Fig. 5 SC01遺構実測図 (1/60)

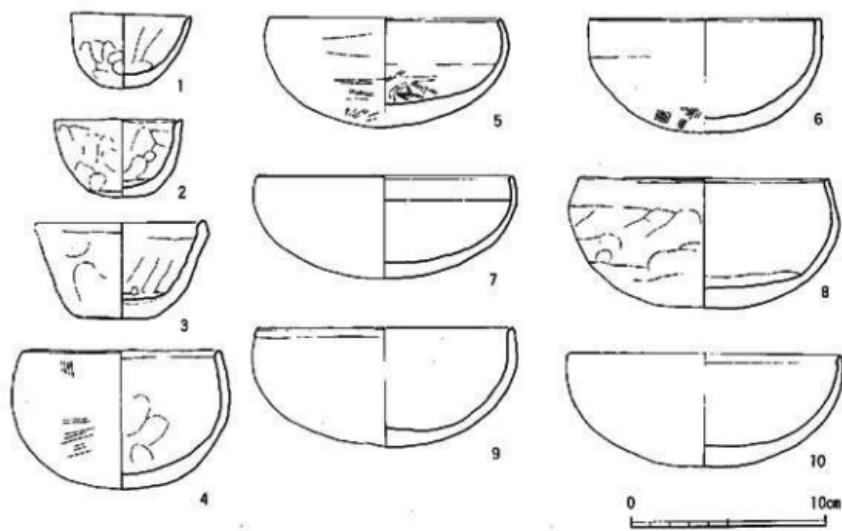


Fig. 6 S C01出土遺物実測図(1) (1/3)

三角形のものもある。また台形状のスカシ窓が刻まれると考えられる短脚の端部は2条の凹線を施して波状形を呈す。端部近くまで脚部にカキ目が施される。趾の口縁部片はその端部が若干外反し、端部内面に沈線状の段を有す。外面には波状文が施される。

外面は器面が粗れて調整不明であるが、内面は体部上位に横から斜め方向のナデ調整、中位から下位にかけてはタテ方向のナデ調整を施す。

他にこの住居跡からはビニール中袋で7袋分の遺物が出土した。この中、須恵器片が1袋分出土した。坏身は立ち上がりが長く、直立に近い。その端部は沈線状に窪む。高坏蓋片には径3.8cmの中心が大きく窪むつまみが付く。高坏脚部は短脚で端部が肥厚し、断面、橢円形状のものを含む。他に細身で、その端部が外方と下方に延びた断面

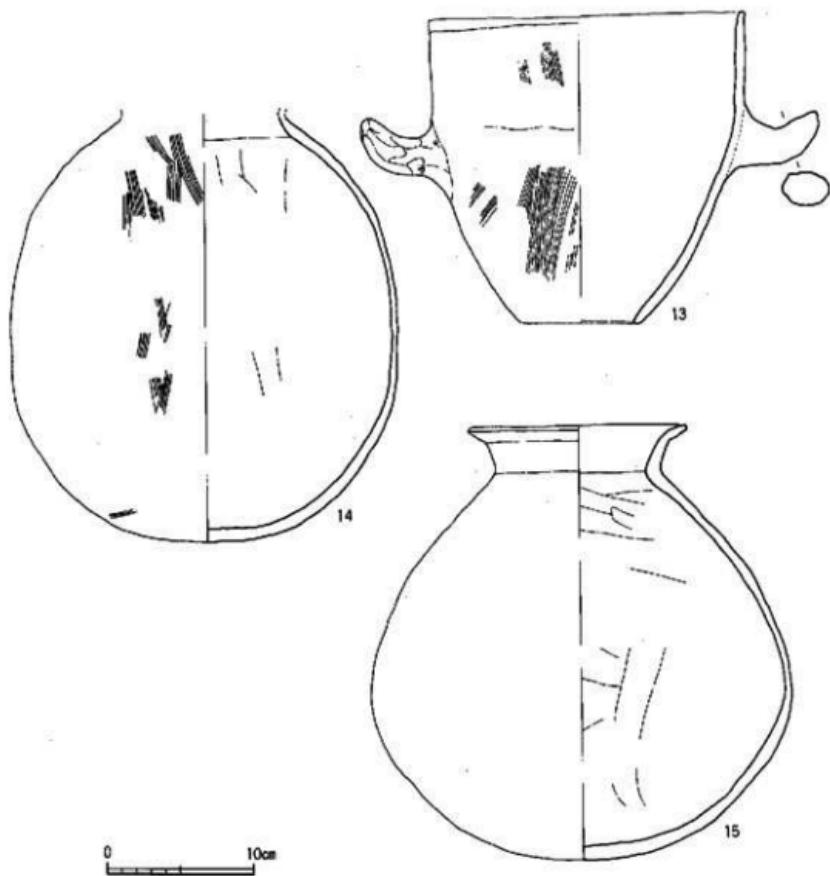


Fig. 7 S C01出土遺物実測図(2) (1/4)

S C02 (Fig. 4, PL. 3) 調査区西端部で出土した住居址で、殆ど未調査区へ広がり全体の様子ははっきりしない。S C65を切り、S E75から切られている。長辺5.7m、深さ0.2m前後である。床面は遺構の切り合いで乱れている。遺物は、土師器の壺、須恵器の壺身・蓋、壺などがある。その他、須恵器の製作手法をまねて作ったような胴部にタタキ痕のある上師質の壺片が出土している。須恵器の壺身の形態から6世紀後半～末の時期が考えられる。

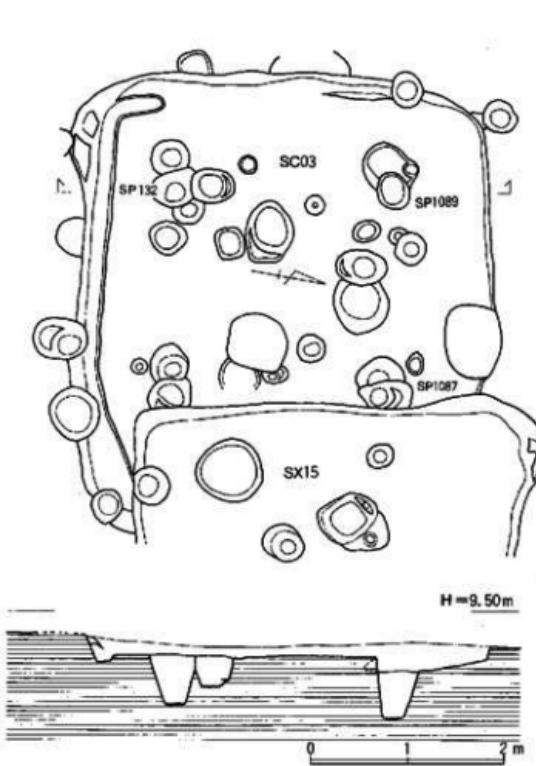


Fig. 8 SC03構造実測図 (1/60)

SC03 (Fig. 8, PL.

3) SC01の北側で出土した住居址である。中世の竪穴状遺構SX15によって東側の一部が切られている。やや長方形のプランを持ち、東西に長い。長辺4.8m、短辺4.3m、深さ0.3m前後を測る。床面の西側及び南側には壁溝が残る。主柱穴は4本で、径0.4~0.5m、深さは床面から0.5m前後である。各主柱間隔は2.2mを測り方形になる。各主柱穴の西隣りには切られた柱穴が存在し、建替が行なわれたことを示す。

遺物は、土師器の壺、高壺、須恵器の壺身、甕などが出土している。

須恵器の壺身は小山編年の須恵器Ⅲbに属するとみられ、6世紀後半と考られる。

SC04 (Fig. 4) 調査区中央部北側に位置し、削平によって一部しか残存していなかった。主柱は4本と考えられ、壁溝などは確認できなかった。遺物は、土師器の小形の甕、須恵器の壺、甕などが少量出土。混入した遺物に弥生土器片とハニワ片がある。6世紀末から7世紀初めにかけての時期であろう。

SC05 (Fig. 4, PL. 4) SC04南側に位置する残存状態の良くない住居址である。西側はSE23に切られているが、一辺4m程度の方形を呈するとみられる。主柱は4本である。

遺物は、弥生土器片の混入もあるが、須恵器の壺身、壺蓋、甕、土師器の甕、高壺、甕、手捏土器の細片が出土している。須恵器片は小山編年のⅢb~Ⅴにかけてのものと考えられ、6世紀後半以降の時期と考えられる。

図示した上跡器の焼86は復原口径14.2cm、器高7.0cmを測る。球形の体部から口縁にかけて、若干すぼまり端部近くで外反する。器厚は底部で1.1cmを測る厚手のものである。

S C 06 (Fig. 9, PL. 4)

調査区中央部やや北寄りで出土した長方形の住居址である。東西方向に長く、長辺4.0m、短辺2.7mを測る。壁の残りは良く無く、0.1m前後しか残存していなかった。主柱は2本で、柱の掘方は径0.4~0.5m、深さ0.7mである。主柱間の距離は1.8mである。遺物は、古墳時代の遺構と切り合いになっているので同時代の遺物も混入するが、主に弥生中期後半~末の甕、丹塗り土器などが出土している。住居址もこの時期と考えて差しつかえあるまい。

S C 07 (Fig. 12, PL. 5) S C 06の西隣りで出土したやや長方形の住居址である。主軸は南北方向をとり、長辺4.8m、短辺4.1m、深さ0.2mを測る。主柱は2本で、柱間は1.5mである。弥生中期末から後期前半にかけての甕、高壙、壺、筒形容器台などが出土している。遺物には丹塗り磨研を施されたものが多い。

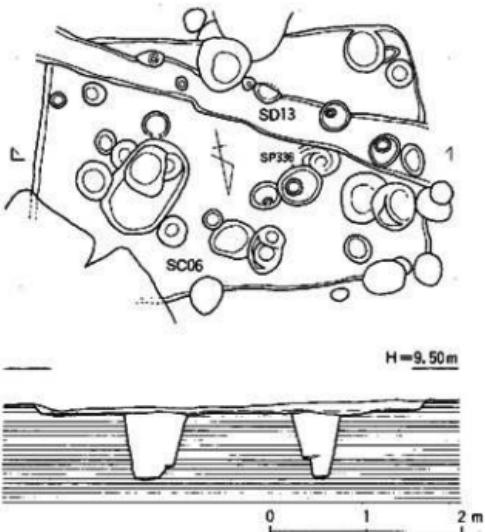


Fig. 9 S C 06遺構実測図 (1/60)

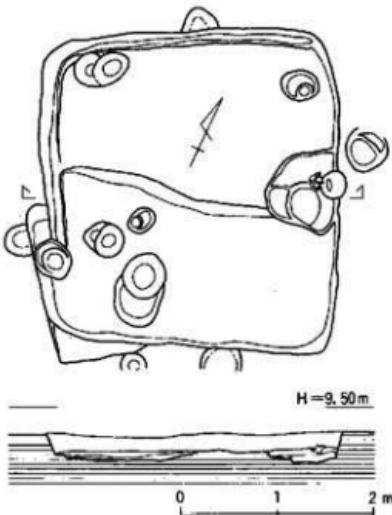


Fig. 10 S C 08遺構実測図 (1/60)

S C 08 (Fig.10・11, PL. 5) S C 07の西側に位置する小形の住居址である。主軸はやや西に振れ、長辺3.4m、短辺3.1m、深さ0.2m前後を測る。北側及び西側の床面には壁溝が巡る。東側には浅い土壤状の窪みがみられ、土師器の高壙が倒置した状態で出土した。壙部の下からは焼骨が少量出土している。その他、覆土から土師器の壺、須恵器の壙身、壺の破片などが出土している。

Fig.11の16は弥生時代の混入か。基部幅4.2cm、遺存長9.0cmを測る。端部は丸く、体部にかけては幅が変わらず直線的である。石材は安山岩を用いる。

S C 09 (Fig.13・14, PL. 6) 調査区北側で出土し、S C

Fig.11 S C 08出土遺物実測図 (1/3) 08の北隣りにあたる。南北4.5m、東西4.0mを測り、やや南北に長い方形を呈している。

東壁は擾乱によって失なわれている。主柱穴は中央部に4箇所確認された。

図示できた出上遺物は17、18の2点である。他に須恵器壺片、土師器壺片が出土した。17は口径11.7cm、器高3.9cmを測る。天井部は丸く、口縁部にかけてわずかな屈曲をもって下方に折れる。回転ヘラ削りは体部1/2未満の範囲である。18の体部は丸味を帶び、立ち上りは短く内傾する。体部外面の回転ヘラ削りの範囲は壙身同様1/2未満である。6世紀後半代のものか。

S C 10 (Fig.15・16, PL. 6) 調査区北側東寄りで出土した4本柱を持つ堅穴住居址である。東西は5.0m、南

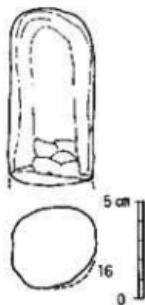


Fig.11 S C 08出土遺物実測図 (1/3) 08の北隣りにあたる。南北4.5m、東西4.0mを測り、やや南北に長い方形を呈している。

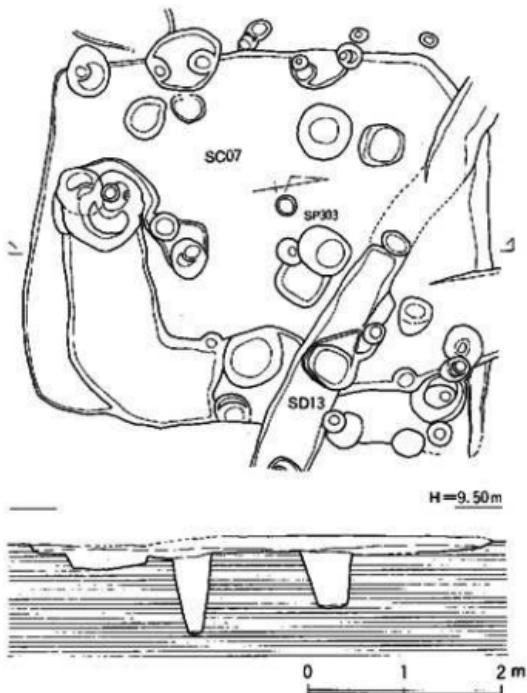


Fig.12 S C 07構造実測図 (1/60)

北は北側が擾乱で破壊されているのではっきりしないが、4.5m前後になるとみられる。槫高は残りの良い所で、0.2m前後である。西側及び南側の床面には壁溝が観察される。主柱穴は床面に4箇所確認され径0.4m弱である。深さは床面から0.4~0.5mを測る。遺物は、北側主柱穴脇で土師器の壺が、南側周壁部分で壺、小形の壺、手提土器が出土している。この南側から出土した土師器は残りが悪く、接合・固化ができなかった。その他、覆土中から土師器壺、高壺、壺、瓶、カマド片、須恵器の壺身・蓋、甕、提瓶などが出土している。須恵器の壺は須恵ⅢbかⅣまで含んでいる。6世紀後半代から末までの時期が考えられる。

Fig.16は、SC10から出土した石製品・土製品である。19は用途不明の土製品である。幅0.8cm、長さ4.2cmを測る。両端部は丸く仕上げ、断面形は球形を呈す。体部には刻み等も無く、若干の凹凸はあるものの直線的である。20の磨製石鎌は弥生時代の混入である。鎌身幅1.5cm、遺存長5.6cmを測る。鎌身の鈍は無く扁平である。節理のタテ方向の段が付く。関は明瞭で中茎を造り出す。21は手持ちの砥石である。長さ9.4cm、幅2.9cmを測り長方形を呈す。

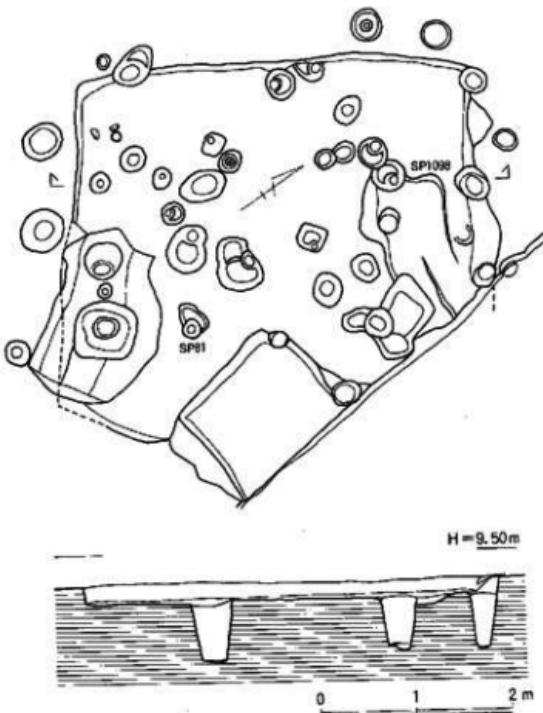


Fig.13 S C09造構実測図 (1/60)

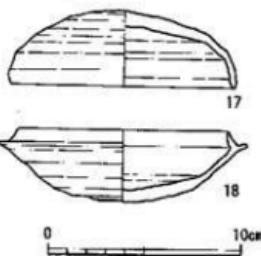


Fig.14 S C09出土遺物実測図 (1/3)

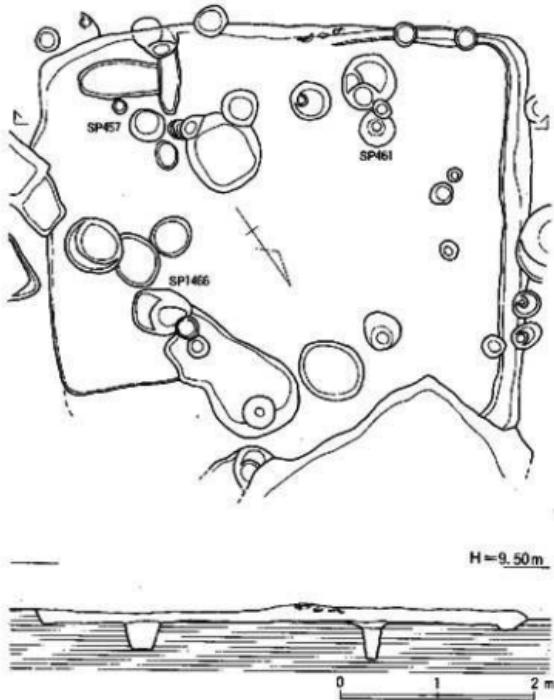


Fig.15 SC10遺構実測図 (1/60)

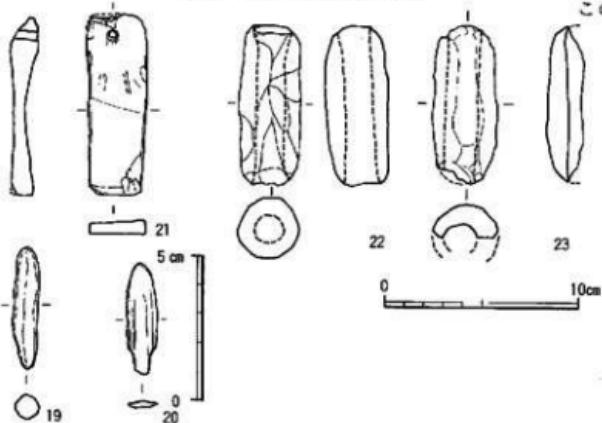


Fig.16 SC10出土遺物実測図 (1/2, 1/3)

片面は特に延びこまれ、中央部の瘤みが大きい。端部近くに径5mmの穿孔を1箇所有す。22、23は土錐である。長さはともに8.1cm、径3.2cmを測る。22は巻きこみによる粘土の重ねが認められる。外面には黒斑が一部認められる。

他に出土した遺物量はビニール中袋で9袋分である。このうち須恵器片は1袋にも満たない量である。

須恵器壺身の立ち上りは中位で屈曲し、端部は丸く収めたものである。6世紀後半代のものであろう。また、週る型式の混入も見られる。外面に波状文が施された甌の口縁部等である。この甌口縁の端部は若干

外反し、その内面は内傾した平坦面で、浅い沈窪が巡る。外面には波状文が施されている。

また、この甌の時期に伴うものか、滑石の細片2点が出土した。土師器は細片で、その時期を決め得るものはない。

SC 20 (Fig. 17, PL. 7) 調査区中央部やや東寄りに位置する堅穴住居址で、SC 21の一部を切っている。南北4.9m、東西4.5mを測る。壁高は0.2mである。主柱は4本で、柱穴の掘方は0.4~0.5m、深さ0.6mである。柱穴には柱痕が残っているものがあり、0.15m前後である。住居址内にはカマドや焼土などはみられなかつた。

遺物は、土器の甕、坑、須恵器の坏身、壺、甕などがある。須恵器の坏はⅡbに属し、6世紀前半の時期であろう。その他、内面が灰黒色に焼結した円筒埴輪片が出土している。焼けた円筒埴輪は、他の造構からも出土している。

SC 21 (Fig. 18, PL. 7) SC 20に切られて西側に位置する住居址である。南北に長い長方形を呈し、主軸は磁北に近い。南北4.2m、東西3.5mで、造構の残り具合は他の住居址に比べて良く、壁高は0.4mであった。中央部分はやや窪んで0.5mを測るが、これは貼床を取り除いてしまったためである。主柱穴は中央部に2箇所認められた。径0.3~0.4m、深さ0.4~0.5mである。柱痕は0.1~0.15mで、柱痕間の距離は1.7mである。覆土は黒色で、弥生中期後半から終末にかけての遺物が出土している。甕は逆「し」字状口縁を持つものと「く」の字状口縁を持つものがある。その他、器台や、大形の筒形器台、壺の破片なども出土している。甕や壺には丹塗りの施されたものが多く見られた。SC 21は調査区南側を南北から北東方向に伸びるSD 44と時期的に同じである。

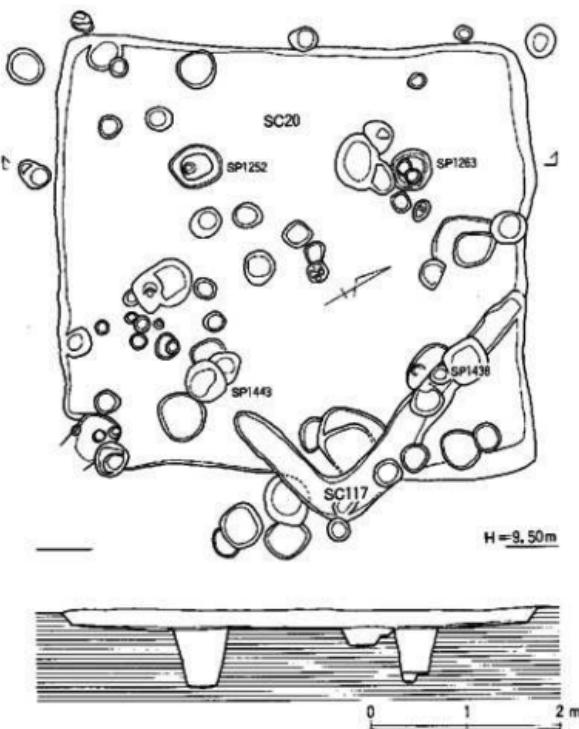


Fig. 17 SC 20 造構実測図 (1/60)

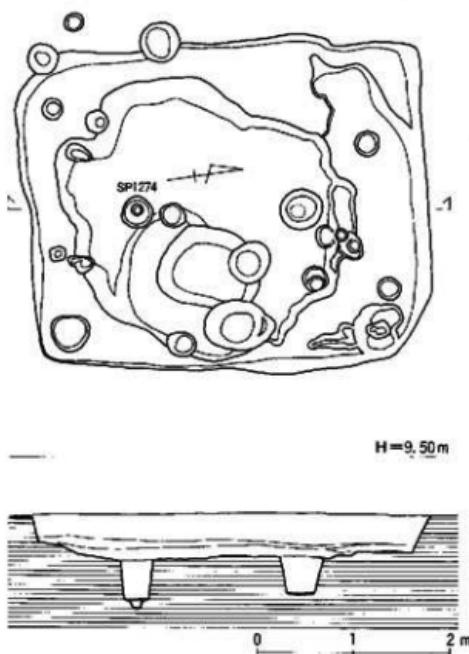


Fig.18 SC 21遺構実測図(1/60)

この住居址から炉やカマドなどは検出できなかったが、遺物が集中して出土する地点に大小の礫が散乱していた。

時間的制約の為、図化できた19点のみ掲載する。24は口径6.0cm、底径4.1cm、器高4.3cmを測る手捏土器である。口縁部は短く外反し、体部はわずかに弯曲する。底部は平底で、その中央部の器厚は薄くなる。内外面には指頭痕が残る。25の体部は横円形を呈し、最大径9.0cmを測る。内外面はナデ調整か。胎土は極めて精良で、色は赤褐色を呈す。26は復原口径13.7cm、器高5.9cmを測る碗である。丸底ぎみの底部から外側に開きながら体部は延び、口縁端部近くで外反する。全体的に厚手で、底部に向かって厚みを増す。底部中央での器厚は1.2cmを測る。外面の調整は器面が粗れ、調整が不明瞭であるが、底部に若干、ハケ目が残る。内面はナデ調整か。外底部は黒色を呈するが他は褐色である。胎土に細かい砂粒が多く含まれる。28は口径15.5cm、器高7.7cmを測る。ほぼ完形で遺存する。丸底の底部から弯曲しながら延びていく。口縁部は短く外反し、体部との境の内外面に、不明瞭な接線を有す。内外面の器面が粗れて、

SC 22 (Fig.19~22, PL. 8)

37~39) 調査区西側で出土した住居址で、SC 64とSC 80を切りSC 01とSC 37に切られている。主軸はほぼ磁北をとり、南北5.3m、東西5.2mの略正方形のプランを持つ。壁高は残りの良い所で0.4mである。横溝は北側及び東側を中心によく走る。南側は約1m内側を半分程巡っている。西側も内側に一部分浅い溝が検出できた。南側及び西側の溝は住居址の拡張に伴うものか、住居址内を区画するものか判断できなかった。また、この住居址は明確な主柱穴が確認できなかった。

遺物は、西側を中心に床面上からまとまって出土している。甕、高壺、壇、瓶などはほぼ完形に接合できる状態であった。特に高壺は一箇所に集中して出土している。

調整は不明である。

焼成は軟質。27は口
径13.0cm、器高6.2
cmを測る。丸底の底
部と体部との境が弱
く屈曲し、体部はほ
ぼ直線に外へ開く。
口縁部はわずかに外
反する。外面体部の
上位には斜め方向の
ハケ、下半には横方
向のハケ目を施す。
ハケ目は1cm単位4
本位の粗いものであ
る。内面は器面が剥
落し、調整不明であ
る。色は赤褐色を呈
し、胎土は緻密であ
る。

29~41の高坏は集
中して出土した。

30,32~34の坏部
は器厚が薄く、坏底
部が水平に近く延び
ていく特徴がある。

29は復原口径19.8cm、

器高12.3cmを測る。やや内弯する坏口縁部と底部との境には接合による突帯状の段を有し、底
部は直線的に水平に近く延びていく。脚部は直線的に大きく外方へ開きながら延びていく。脚
裾は基部から外側へ屈曲し、弯曲して接地する。30は完形品で、29に近似した器形である。口
径18.7cm、器高12.8cmを測る。31、32は器厚が薄く、坏底部から口縁部にかけて、29、30と異
なり内弯する。脚部は前者と同じである。31の口径は18.7cm、器高は9.2cmを測る。32は復原
口径19.6cm、器高13.6cmを測る。33の器厚は薄く、29に近似した器形を呈する。口径18.7cm、
坏部高5.9cmを測る。34の口縁端部はわずかに外反する。底部は中心に向かって傾き、

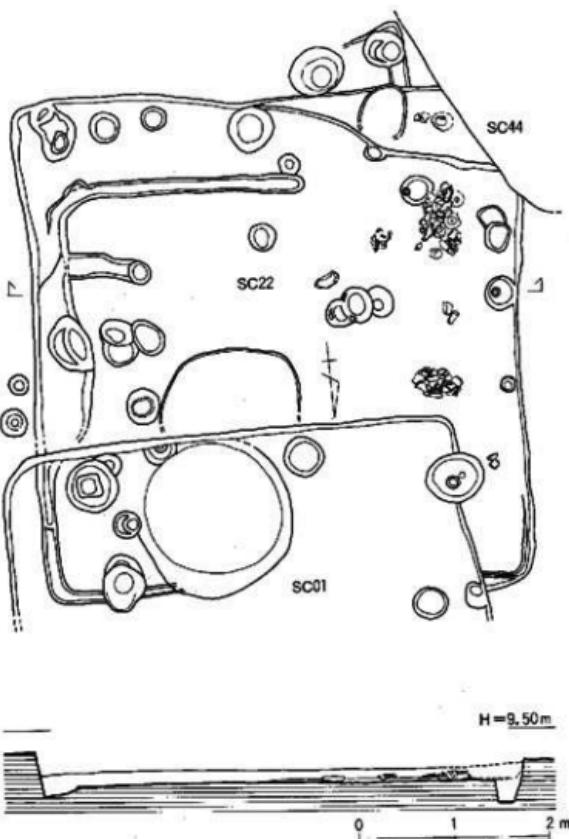


Fig.19 SC 22遺構実測図 (1/60)

31、32に近い器形である。口径17.8cm、坏部高6.1cmを測る。29~34は内外面ともに器面が粗れ、調整が不明である。

35~37、39、40は坏部が深く、器厚が厚い特徴を有する。脚部は広がらずエンタシス状になる。35の坏部口縁と底部との境は不明瞭で、底部が中心へ向かって傾く。従って、坏部の深さが増している。口縁部と底部との境は接合した突帯状の段を有す。脚部は内弯ぎみに下方へ延び、外方へ脚裾が折れる。この折れた脚部は、29~34のものに比べ短く、鈍角に曲がっていて着地する。口径16.3cm、器高13.1cmを測る。36も近似する器形を呈するが、口縁部は直接的に延びている。37の坏底部は緩やかな弯曲をもって立ち上り、口縁部との境には不明瞭ながら、突帯状の段を有し、直接的に延びた口縁部へ經ぐ。脚部はわずかな弯曲をもち、エンタシス状を呈す。脚裾は器厚を狭め、短く斜め下方へ折れ接地する。口径17.9cm、器高14.9cmを測る。38は31、32と近似した器形を呈す。39は口径20.1cm、器高16.8~17.7cmを測る大振りのものである。坏部の口縁と底部との境には段が付かず稜線のみである。脚部の折れた位置近くに穿孔を有す。色は赤褐色を呈し、焼成は硬緻である。40は丸底ぎみの底部から突帯状の段を介して、内弯する体部に延びていく。口縁端部は外弯する特徴を持つ。坏部の外底部には粗いハケ目が残る。41の脚部は外側へ大きく開いていくタイプで、基部の下位には穿孔を有す。以上の高坏の器形の異なりは色調、焼成の違いに対応している。

S C 25 (Fig. 4, PL. 9) 調査区中央部に位置し、S E 23, S K 24に切られている。南北4.5m、東西4.5mでやや歪つな形をした方形である。壁高は0.1m前後しか残存していない。主柱は4本で1本分はS E 23に切られて不明である。

遺物は、上師器甕、支脚、カマド片、須恵器の坏身・蓋、甕などが出土している。坏身は須恵器Ⅳ、蓋はやや古く須恵器Ⅲで、6世紀の終りから7世紀にかけてのものであろう。

S C 26 (Fig. 23, PL. 9) 調査区中央部で検出した住居址で、S C 32を切っている。切り合い及び削平が激しく、東側、北側の壁がはっきりしない。一部残存している所で測ると、東西3.7m、南北4.0mである。壁高は0.15m前後である。床面西側には雪溝が認められる。主柱は4本で、柱穴の掘方径は0.3~0.5mである。

遺物は、土師器、臺、塊、高坏、甕などがあり、須恵器は坏身・蓋、甕などが出土している。須恵器の坏身・蓋は古いものが多く、須恵器Ⅱ bに含まれるものである。6世紀前半代の時期が考えられる。

S C 27 (Fig. 4, PL. 9) 調査区中央部に位置するが、殆ど他の住居址に切られており、全体の様子は分らない。残存壁長は東西が2.0m、南北が3.2mである。壁高も僅かしか残っていない。主柱は4本であるとみられる。

遺物は、造構の残り具合から僅かしか出土しなかった。土師器の甕、塊、須恵器の甕片などがある。はっきりした時期は分らないが、大まかに6世紀代と考えておきたい。

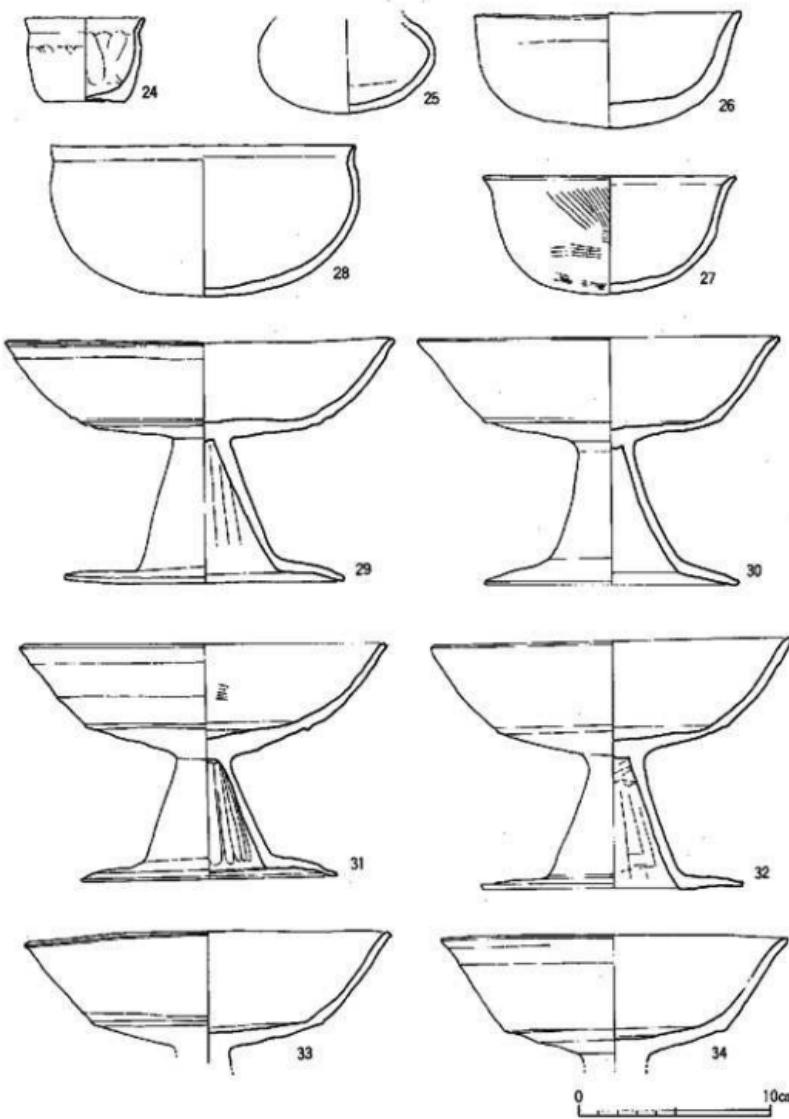
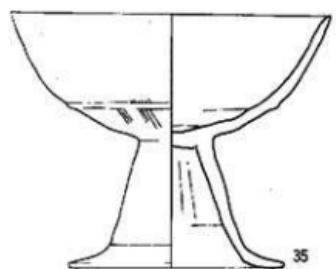
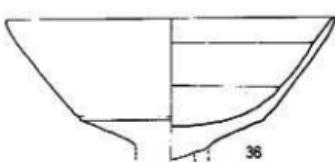


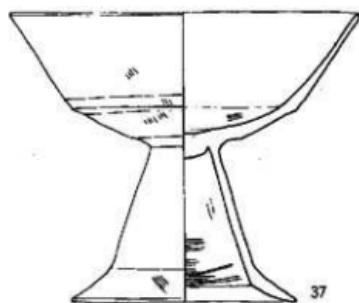
Fig.20 SC22出土遺物実測図(1) (1/3)



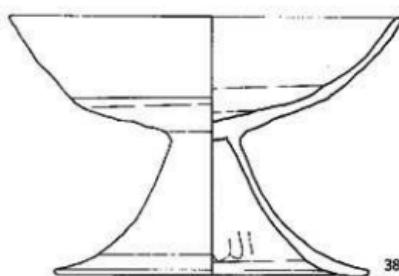
35



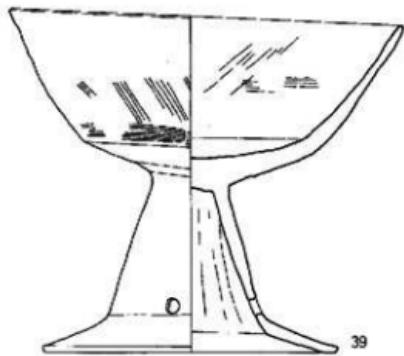
36



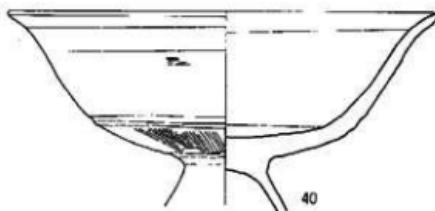
37



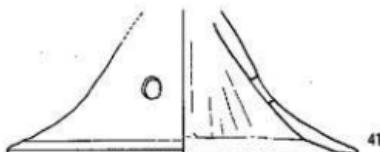
38



39



40



41

Fig.21 S C22出土遺物実測図(2) (1/3)

S C 28 (Fig. 4, PL. 10) 調査区中央部に位置し、最も切り合いの激しいところである。この付近は全体が黒色土で覆われ、プランが確認しにくかった。かなり掘り下げて確認したので、遺構の残り具合はあまり良くない。少くとも数軒分は切り合っている。S C 32・47からは切られている。プランは方形を呈し、東西は5.0mである。南北もほぼ同様の数値になるものとみられる。北側及び西側には壁溝が巡る。主柱は4本で、深い掘方になっている。

遺物は、土師器の壺、壇、瓶、カマド、須恵器の坏身、滑石製の臼玉などが出土している。須恵器の坏は、須恵II～IVを含み時期幅を持っている。切り合いが多く遺物が混同したのかも知れない。S C 28は6世紀の古い段階の住居址と考えている。

S C 29 (Fig. 4, PL. 10) 調査区中央部南寄りで検出した住居址で、S C 30によって切られている。東西は4.8m、南北ははっきりしないが同様の数値になるとみられる。壁高は0.1m前後残存している。主柱は4本である。

遺物は、土師器の壺、壇、須恵器の坏身・蓋、甌、壺などが出土している。須恵器坏身・蓋の形狀から6世紀後半代であろう。

S C 30 (Fig. 24・25, PL. 10) 調査区中央部南寄りに位置し、S C 29を切っている。プランは南北4.5m、東西4.5mのほぼ正方形を呈し、壁高は0.1m前後である。床面周囲には壁溝は認められなかった。主柱穴は床面中央部に4箇所検出された。掘方が深いので他の柱穴と区別が付く。柱穴掘方は0.3～0.45mで、深さは0.5m前後である。また、住居址内には大形の柱穴がみられるが、これはS B 90とS B 103が重複しているためである。

遺物は、住居址北壁にピット状の落ち込みがみられ、その中に倒置した土師器の高坏が出土

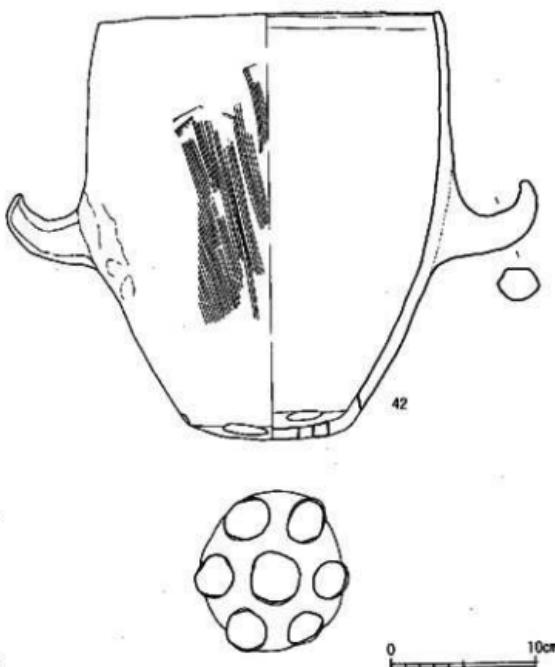


Fig. 22 S C 22出土遺物実測図(3) (1/4)

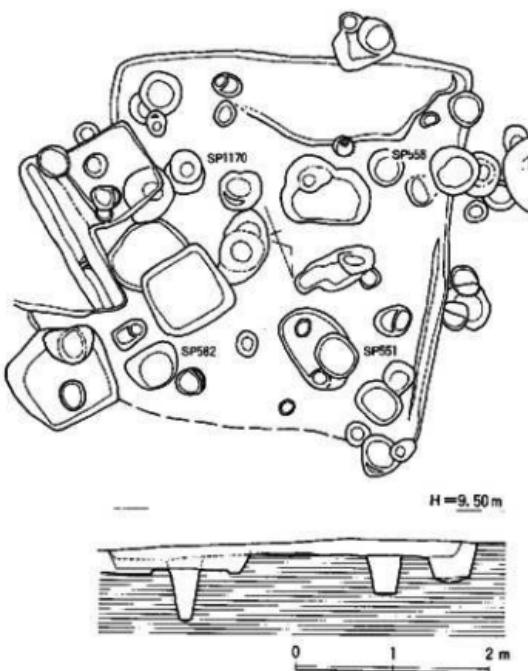


Fig.23 S C 26遺構実測図 (1/60)

している。また、北東隅にやや浮いた状態で宝珠つまみの付いた須恵器壺蓋が出土している。これは時期的に新しいものである。

出土遺物は土師器の壺片、支脚、須恵器の壺、壺片等がコンテナ1箱分出土した。土師器10に対し、須恵器1の割合である。須恵器は圓化した43が最も新しい器形を呈すが、他のⅢb期までおさまる。切り合いが著しい為、43はこの住居址を切る柱穴等から混入した遺物の可能性がある。

43は焼き壺み、口径10.0~10.4cmにわた

る。天井部までの高さは2.4cmを測る。天井部の中心に基部径1.4cm、高さ0.9cmのつまみが付く。つまみは半球形を呈し、下にはすばまらない。天井部は丸みを帯び、体部との境には明瞭な稜が付き、口縁部にかけて屈曲して外方へ延びる。反りは口縁端部より下方に出る。

S C 32 (Fig.26・27, PL. 9) 調査区中央部で出土した大形の住居址である。この付近に分布する住居址は特に切り合いが激しい。プランはやや不整方形を呈し、南北5.4m、東西5.8mを測る。壁は残りの良い所で0.3m前後である。床面には東側を除く他の壁に壁溝が巡る。床面北東隅には粘土塊が、東壁近くには焼土がやや浮いた状態で検出されている。遺物の分布は北側部分で土師器高壺が、南側壁溝で土師器壺がまとまって出土している。また滑石の破片が各所から出土している。主柱穴は4個あり、床面で検出された。掘方の径は0.4m前後、深さは0.5m前後である。

埋土からは多量の遺物が出土した。ビニール袋で34袋分の出土量である。その大半は土師器片で高壺、壺の取手、壺片等が出土した。高壺の脚部は厚手で、その基部はエンタシス状に寄

曲している。若干、
坏身、提瓶、壺片の
須恵器も出土した。
坏身の立ち上りは長
く直立ぎみで、その
端部は内傾した平坦
面を為し、沈線状の
段が巡る。高坏はス
カシ窓を刻む小片が
出土した。

その他、若干Ⅲ b
期の坏身片と考えら
れる細片が出土した
が、概ね古い型式の
ものが、土師器、須
恵器ともに認められ
る。

土器以外には滑石
片も出土した。Ⅱ期
の遺物に伴うものか。

固化できたものは
44、45の2点である。

44は須恵器の無蓋高坏片である。口径14.5cm、坏部高5.4cmを
測る。底部から体部にかけて弯曲しながら延び体部中位に上、
下の段に狭まれた文様帯を作る。文様帯には櫛齒7本による波
状文が施される。口縁部は直線的に外方へ延び、端部は丸く收
める。坏部の調整は内底部にナデが加えられる他はヨコナデで
ある。脚部には台形ないし長方形のスカシ窓が3方向に刻まれ
る。45は口径14.9cm、胴部最大径19.9cmを測る。口縁部は短く
外反し、体部は球形に近いカーブを描く。全体的に器壁は厚い。
外面には細かいハケ目がタテ方向に繰り返し施される。内面は
頸部下にタテ方向のナデ、体部中位にかけては横方向のナデが
施される。

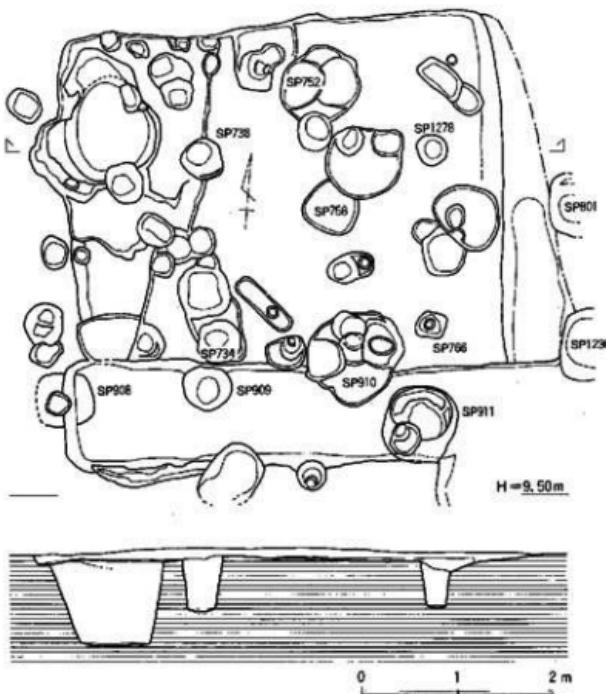


Fig.24 S C 30遺構実測図 (1/60)

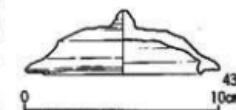


Fig.25 S C 30出土遺物
実測図 (1/3)

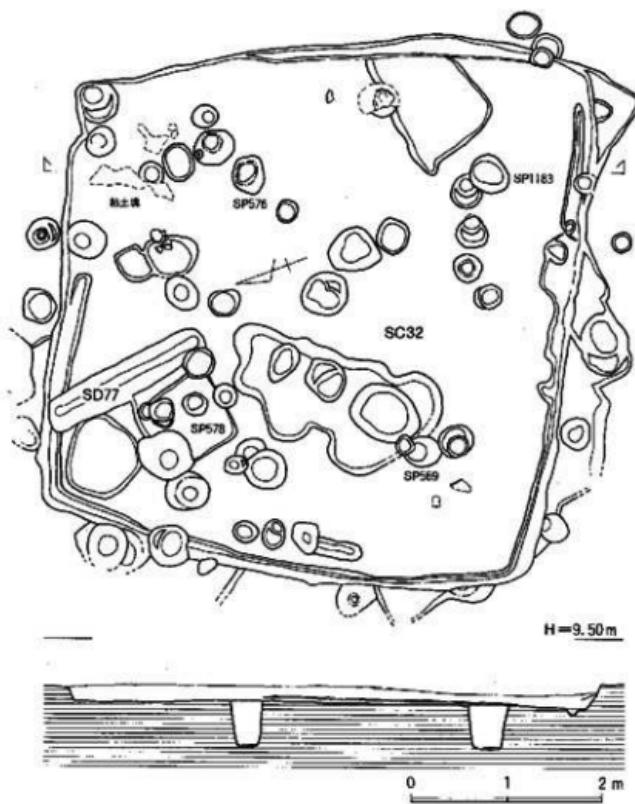


Fig.26 SC32遺構実測図 (1/60)

S C33 (Fig.28・29、PL.11) 調査区南側に位置する小型の堅穴遺構である。東西3.2m、南北3.4m、壁高0.2mを測る。東側を除く各壁には断片的に略溝状の浅い溝がみられる。主柱穴ははっきりせず、床面に数個の浅いビットが検出されたのみである。この遺構がはたして住居址なのか、住居址に付属する堅穴なのか検討を要するが、ここでは一応住居址として取り扱っておきたい。

遺物はビニール袋で4袋出土した。図示したものの他に土師器の高环片、壺片、須恵器のⅢb期の环身片が出た。46は口径18cm、器高6.6cmを測る。底部はやや扁平な丸底から体部

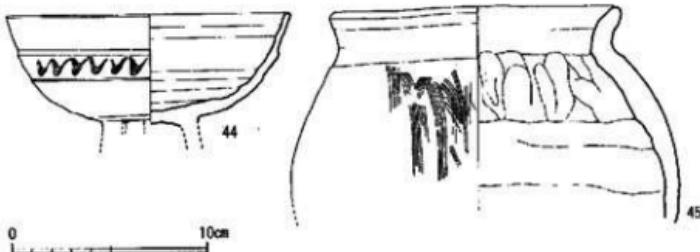


Fig.27 S C32出土遺物実測図 (1/3)

に弯曲しながら延びてゆき、口縁部付近で外反する。口縁端部は細まり丸く收める。内外面の調整は不明瞭であるが、ヨコナデと考えられる稜線が入る。全体的に器厚は薄い。

出土遺物が少ない為、確定的な時期を決め兼ねるが、一応、図化していない須恵器の坏身片から6世紀後半代を与えておく。

S C34 (Fig. 4・32, PL.11)

S C33の南側に位置する住居址である。東側は削平されてプランがはっきりしない。南側はS C36に切られ、さらに未調査区へ伸びている。東西幅は5 m強である。南北の長さも5 m前後であろう。壁高は0.1 m前後残存している。北側には隙溝がみられ、西側にも幅広の溝が巡る。東側はS D 67と個別の遺構番号を付けているが、S C34に伴う可能性がある。床面北側には隙溝と同様な細い溝で区画の溝を設ける。用途ははっきりしない。床面北西隅には花崗岩砾の台石が置かれている。主柱穴は床面中央部に4個確認

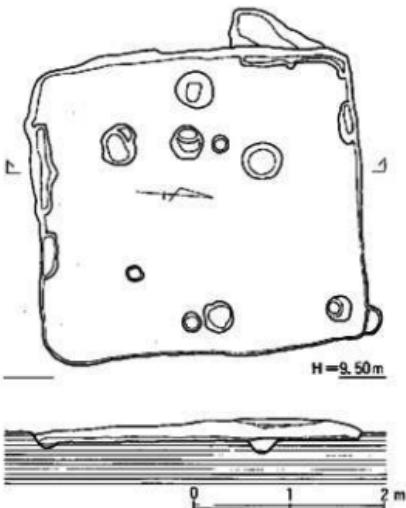


Fig.28 S C33遺構実測図 (1/60)

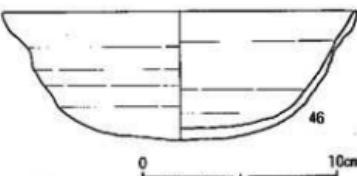


Fig.29 S C33出土遺物実測図 (1/3)

することができる。

図化できた遺物は47、48の2点である。ともに同じ主柱穴から出土した。47は口径13.1cm、器高4.5cmを測る。天井部の弯曲は緩やかで、体部にかけて内弯し、口縁部との境を沈線状に窪ませ、不明瞭な段をつくる。口縁部は下方ないしやや外側に開く。端部は内側の面に沈線状の段を持つ。48の立ち上りは外弯し、その端部は丸みを帯びる。

S C 35 (Fig. 4) 調査区南西隅で検出した遺構で、大部分は未調査区へ広がっており詳細は分らない。

出土遺物は弥生土器や土師器の細片の他、須恵器片が3点のみ出土した。この中の1点は口

縁と体部の境に沈線
を施し段をつくる古
い型式のものである。

図示した70 (Fig.
44) は受部径12.0cm、
立ち上り径9.9cm、
器高4.2cmを測る。
外面の回転ヘラ削り
の範囲は約 $\frac{1}{3}$ に及ぶ。
外底部にはヘラ記号
を有す。

S C 37 (Fig. 30 ·
31, PL. 12) 調査

区西側で検出した方
形プランの竪穴住居
址である。南北幅
5.4m、東西幅5.2m、
深さ0.4mを測る。

壁高は北側がよく
残っており、南側は
削平が激しい。床面
には全周にわたって
壁溝が巡っている。
主柱穴は床面に4箇
所認められる。主柱

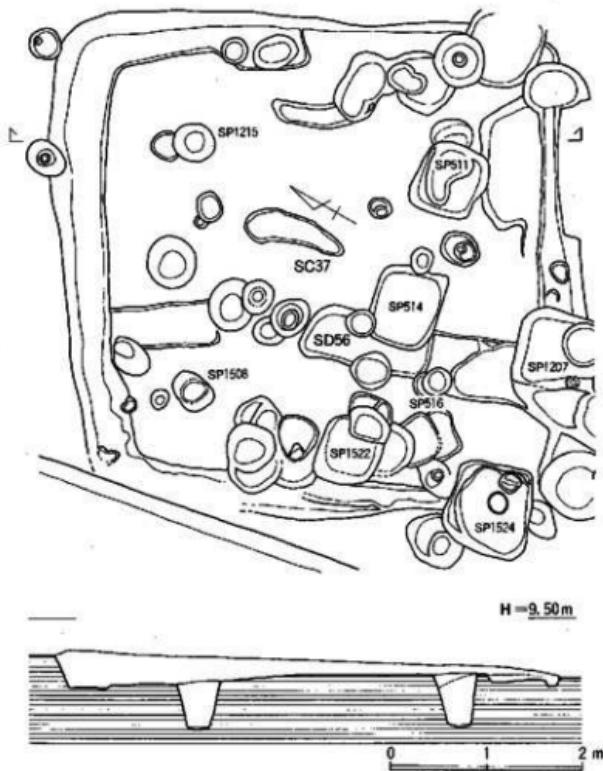


Fig.30 S C 37遺構実測図 (1/60)

穴の径は0.4m前後、深さは0.5mである。S C 37は遺構の切り合いが激しく、時期的に新しいS D 56・S B 91と重複する。

出土遺物量は多く、土師器の高坏、壺、瓶片、須恵器の坏身、無蓋高坏、壺片が出土した。須恵器と土師

器量の比率は1:10位である。この中の須恵器には坏身の立ち上り端部が内傾し、浅い沈線を有するもの、壺の口縁部に波状文が施されるもの等、古い様相を呈すものが含まれる。下限を示すものは圓化したもの他、ヘラ記号を刻む坏細片がある。尚、50は後世の混入である。

50は口径10.1cm、器高3.3cmを測る。天井部から口縁端部に至るまでなだらかな曲線を描く。天井部の中心には宝珠形のつまみが付く。51は受部径13.1cm、器高4.2cmを測る。立ち上りの中位に弱い屈曲を有す。外底部にはヘラ記号が刻まれている。52は壺の体部である。体部の中位に最大径があり、底部は平坦である。外面に灰釉が垂下する。外底部にヘラ記号が刻まれる。

S C 38 (Fig. 4, PL.12) 調査区南側に位置し、S C 39を切り、S C 59・60に切られる。南半部の壁は遺構の切り合いで分らない。東西幅は4.0m、壁の高さは僅かに残っているに過ぎない。床面北側には壁溝が巡る。主柱は

4本で、一穴を除き柱穴が確認できる。

遺物は、土師器の高坏、壺、境、須恵器の高坏、壺などが出土している。しかし、遺物量は少ない。6世紀後半に属するとみられる。

S C 39 (Fig. 32・33, PL.13) S C 38とS C 40に切られて検出された住居址である。東西5.2m、南北5.6mを測り、4本柱を持つ。主柱穴間は2.5m間隔である。壁溝は切り合ひ関係にない所は殆ど巡る。北側には同仕切様の小溝がみられる。また北側床面には焼土が丸く分布している箇所が見られた。

遺物は、土師器の壺や主柱穴から出土した境がある。

49 (Fig. 32) は主柱穴から出土した完形品である。口径14.1cm-14.9cm、器高5.4cmを測る。丸みを帯

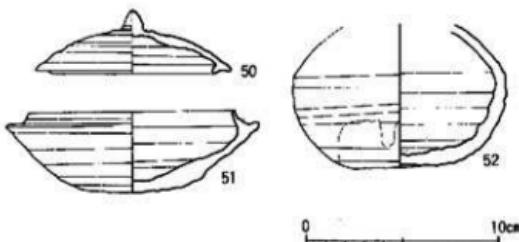


Fig. 31 S C 37出土遺物実測図 (1/3)

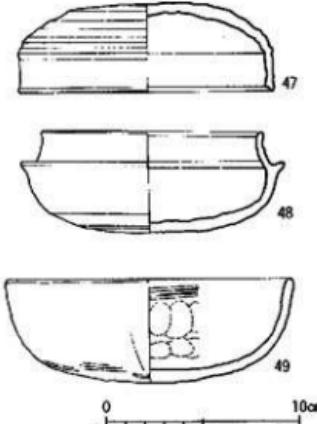


Fig. 32 S C 34-39出土遺物実測図 (1/3)

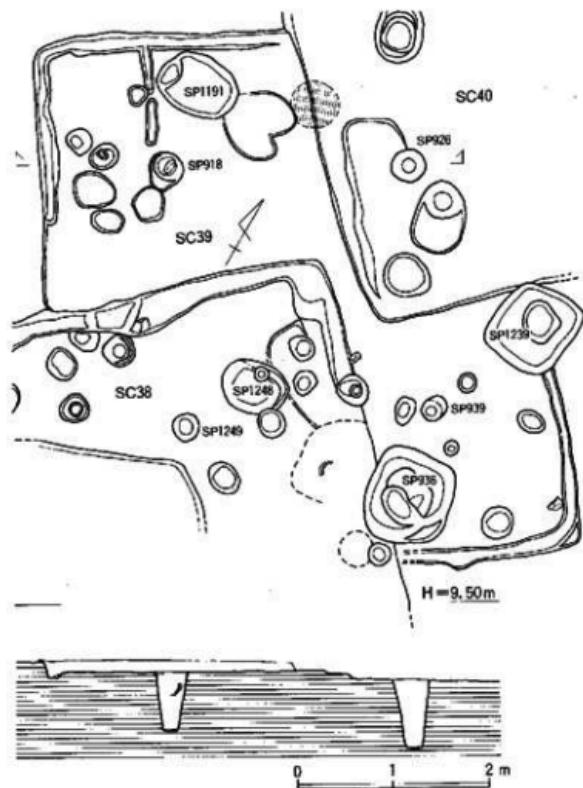


Fig.33 S C39遺構実測図 (1/60)

方は0.4~0.5mで、深さ0.7mである。床面北側には焼上塊の分布が認められた。

出土遺物は、土師器の甕、瓶、須恵器の壺身・蓋、壺、壺などがある。須恵器の壺身や蓋はⅢ b ~ Ⅳであり6世紀後半から終末にかけての時期である。

S C43 (Fig.4) 調査区南側で出土した遺構で、S C36、S C60に切られており全体の様子ははっきりしない。一辺4.8mを測り竪穴住居址の一部ではないかと考えられる。

出土遺物は多量で、コンテナ2箱分程になる。土師器の甕片、支脚の他に少量の須恵器が含まれる。この中の須恵器壺身はⅢ b 期までのものを含む。

図示した72 (Fig.44) は復原口径14.3cm、器高8.6cmを測る。壺部外底にはカキ目が施され、内底には青海波文のタタキ痕が残る。スカシ窓は3方向から刻む。

びた底部から内弯し口縁に立ち上る。口縁部はわずかに肥厚する。外面はヨコナデ、底部にカキ目状の痕跡を有す。内面は口縁をヘラミガキ、体部から底部にかけてナデ調整を施す。

S C 40 (Fig.34、PL.13) 調査区南側に位置し、S C 39、S C 45を切っている。長辺4.3m、短辺4.1mの方形プランを持ち、4本柱を有する。壁高0.15m前後残っており、床面に壁溝は巡らない。主柱穴は4個確認されたが、東側の主柱穴はS B 87及びS B 103の柱穴と重複している。主柱穴の掘

S C 45 (Fig.35 ~ 37, PL. 14) 調査区中央部南側に位置し、S C 40に切られる方形プランの住居址である。南北幅及び東西幅はともに4.4mを測るが、西側は少し幅が狭くなりやや歪つな形になる。壁高は0.15m前後残存している。床面の周縁には東壁以外壁溝が巡る。西側には間仕切状の細い溝が確認されている。主柱は4本で柱穴が床面上で確認できる。径0.4m前後で深さは0.4~0.5mを測る。住居址東壁付近には焼土、粘土、炭化物が分布しており、作り付けのカマドがあったと考えられる。本来カマドのあった位置はS B 87の柱穴で破壊されている。焼土は、住居址南東隅にも広がっている。

S C 45からは遺物がまとまって出土している。主に東側を中心須恵器壺身・蓋、土師器壺、塙などが分布する。主柱穴のひとつからは土師器の壺が出土している。

出土遺物は比較的多量である。土師器壺片は主にコンテナ2箱分になる。須恵器は少量であるが、細片は住居址出土遺物の中では古い様相を呈す。

國化したものは須恵器壺9点、土師器壺1点、壙3点である。53は口径14.2cm、器高4.2cmを測る。やや扁平ぎみの天井部から口縁部との境に沈線を施し、下方に折れる。口縁端部は内傾した平坦な面を有す。外面の回転ヘラ削りは約1/2以上に及ぶ。天井部内面にはナデが施される。54は口径14.3cm、器高5.0cmを測る。53に比べ器高が高く、天井部に丸みをおびる。天井部と口縁部の境には浅い沈線を施す。口縁端部は内傾し、鋭い棱線が巡る。外面の回転ヘラ削り調整は約1/2未満の範囲である。外側天井部にヘラ記号が刻まれている。55は口径12.8cm、器高

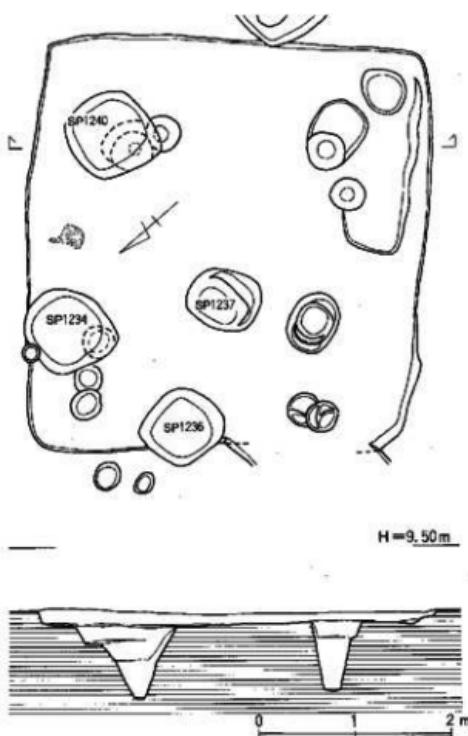


Fig.34 S C 40遺構実測図 (1/60)

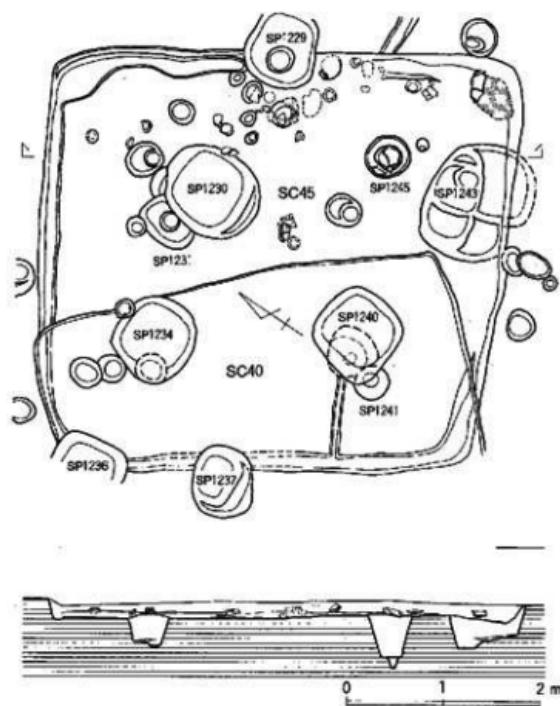


Fig. 35 SC45 遺構実測図 (1/60)

4.0cmを測る。天井部は平坦で、体部と口縁部の境に沈線を有し、直下に下る。口縁端部は沈線が巡り凹む。外面体部にはハケ目が若干認められる。内面天井部に同心円文のタタキ痕が残る。56は口径14.6cm、器高4.7cmを測る。体部と口縁部の境には沈線を施し、口縁部は外側に広がる。口縁端部は丸く、内面に沈線を巡らす。外面天井部にはヘラ記号が刻まれる。57は口径13.7cm、器高4.8cmを測る。赤褐色を呈した軟質の土師器である。体部と口縁部の境に沈線を巡らせ、わずかな段をつくる。口縁部は丸く收める。調整は器面が

粗れて不明である。58は復原口径14.5cm、器高4.9cmを測る。焼き重みが著しい。体部と天井部の境は凹縫状に成形し段をつくる。口縁端部には沈線が巡り凹む。外面の回転ヘラ削り調整は約1/2の範囲である。外面の口縁端部にとびカンナ状の刻みが一周する。内面天井部に同心円のタタキ痕が残る。59は口径14.3cm、器高4.8cmを測る。天井部は平坦ぎみなカーブを描き、体部と口縁部の境に沈線を施し、口縁部は外側に開く。口縁端部近くに細い沈線が巡る。60は口径15.2cm、器高5.0cmを測る。天井部は、他に比べ丸みを帯びる。体部と口縁部との境には明瞭な段をつくり、口縁部は直下に下り、端部近くで外反する。色調は断面が灰色を呈すが外面は褐色である。焼成は軟質である。61は受部径13.1cm、口径11.3cm、器高4.2cmを測る。立ち上りは直立近くにのび、端部近くの内面は凹縫状に窪み明瞭な段を有す。外面の回転ヘラ削りは体部半位である。62は胴部最大径11.7cmを測る。内外面の器面が粗れて調整は不明である。色調は赤褐色を呈す。63は口径22.3cmを測る土師器甕である。口縁端部は平坦面

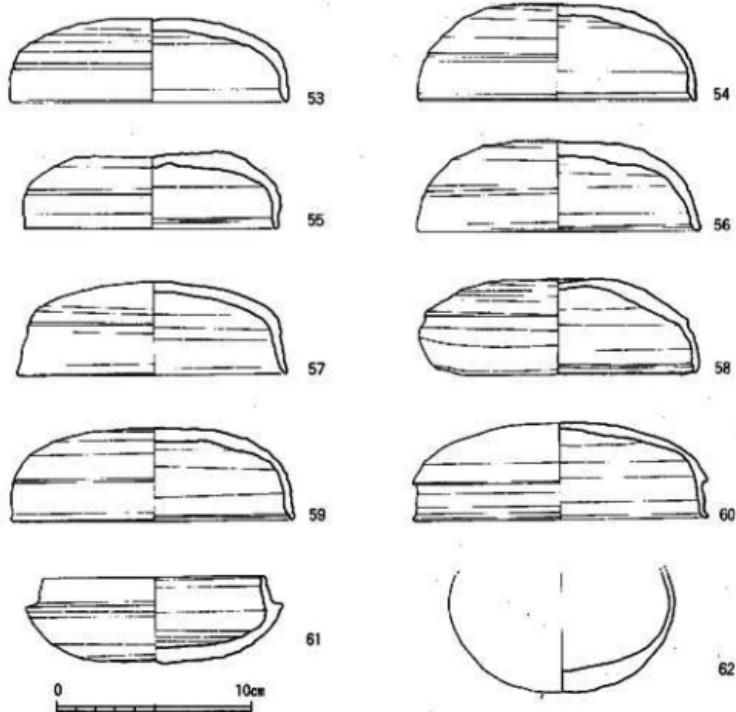


Fig.36 S C 45出土遺物実測図(1) (1/3)

をあし、やや外弯しながら頸部にのびていく。体部との境は不明瞭で、胴部の張りは小さい。口縁部は内外面ヨコ方向のナデ、体部外面はハケを施した後ナデ消す。内面の体部上位は下から上へハケ目を施した後ナデ調整を行う。64は土器師の壺の底部である。底部は平底を呈し、外面には不整方向からのハケ目を施す。内底部には指頭痕が残り、体部にかけては下から上へのナデが施される。65は口径13.4cm、器高34.0cmを測る長胴形の壺である。平坦に近い丸底から、内弯しながら胴部へ立ち上る。最大径は胴部の中位ないしやや下方にある。胴部上位は下位と同様のカーブを描き延びていくが、肩部がわずかに張る。口縁部は外反し、その端部は丸く取める。胴部下位は左上り斜め方向のハケ、上位はタテハケを施す。内面は胴部下位が下から上へのナデ、胴部上位にはハケ原体の小口と考えられる痕跡が残る。色は赤褐色～黄褐色を呈し、黒斑、ススが付く。

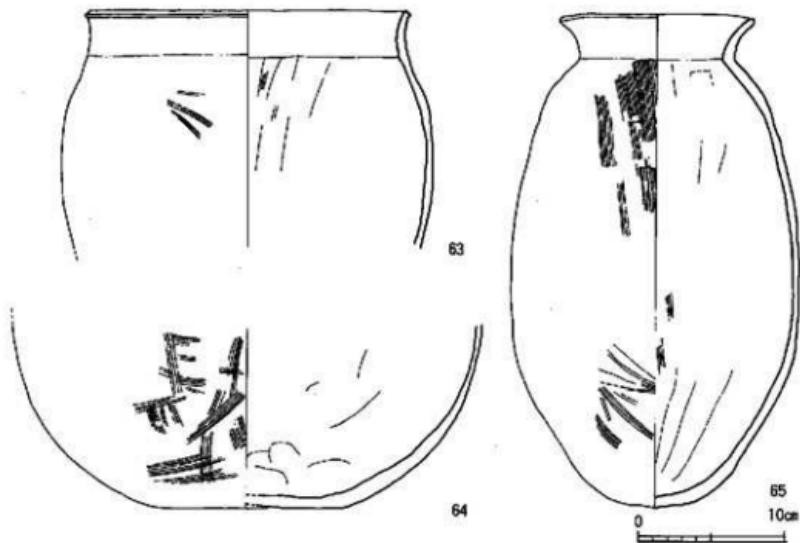


Fig.37 SC 45出土遺物実測図(2) (1/4)

SC 46 (Fig.38、PL.14) SC 45に切られて北側で検出された住居址である。遺構の残り具合は余り良くなく、壁溝だけでプランを確認している。東西幅4.9m、南北幅5.4mで、やや南北に長い方形になっている。主柱穴は4個で、東壁近くに焼土が分布している。遺物は少なく、土師器の壺、高壺、須恵器の壺身・蓋、高壺、甕などである。須恵器壺身はIVに属するものがあり、住居址に伴うものではなかろう。この住居址は他の遺構との重複が激しく、S B 102、S B 123を切り、SC 45、S B 87に切られている。また、床面内にSC 82の壁溝が見られるが、切り合いの接点がなく、どちらが切っているのかはっきりしなかった。

SC 47 (Fig.39・40) 調査区中央部で出土した。遺構の重複が激しい部分に位置する。SC 28・32・63を切り、壁溝SD 81を持つ住居址に切られている。Fig.39ではSC 32が切ったように図示しているが、SC 32の床面が深かったためと、SD 81を壁溝を持つ住居址によって切られており、西側壁がはっきりしなかったために誤認したものである。住居址は東西5.5m、南北5.6~6.0mで、やや歪つな方形を呈する。壁は僅かしか残っておらず、残りの良い所で0.1m強である。壁溝は北側を中心に巡っている。主柱は4本である。主柱穴は4個確認され、径0.3m前後、深さ0.7m前後である。東壁部分にはカマドの痕跡が認められ、粘土塊と焼土が広がっていた。焼上の上には土師器の高壺が倒置した状態で出土している。

埋土からは比較的多量の遺物が出土した。コンテナ 2 箱分になる。土師器の壺細片が大半で、須恵器は少量である。須恵器はⅢ 5 期以降のものが多い。須恵器壺片に木の葉をヘラ書きしたものもある。

66は受部径 13.6 cm、立ち上がり径 11.4 cm、器高 3.5 cm を測る。底部から体部にかけての弯曲が小さく、口径に対する器高も低い為に扁平感を受ける。立ち上りは高さ 1.0 cm の短かいもので、縁部近くで屈曲する。外面の回転ヘラ削りの範囲は体部に及ぶ。器厚が全体的に

厚い。色は外面灰色、内面暗灰色を呈す。胎土には比較的砂粒が少ない。焼成は良好堅緻である。67はカマドの支脚に用いられた土師器の高壺である。脚部は細く、開きが小さい。内面にはラセン状の削りが、わずかに認められる。壺身の底部は弯曲し、体部にかけて滑らかに移行する。口縁部との境には弱い屈曲をもって、器厚を細めながら立ち上る。内底部はナデ、体部はヨコナデ調整を施す。壺部の口径は 12.1 cm、器高 4.6 cm を測る。色調は器面が剥落し、淡黄灰色を露呈する。胎土に砂粒を少し含むが精良である。

S C 49 (Fig. 4) 調査区中央部に位置する。削平されており、また S C 47 に切られているので全体の様子ははっきりしない。遺物は土師器の壺、須恵器の壺身・蓋、壺などである。

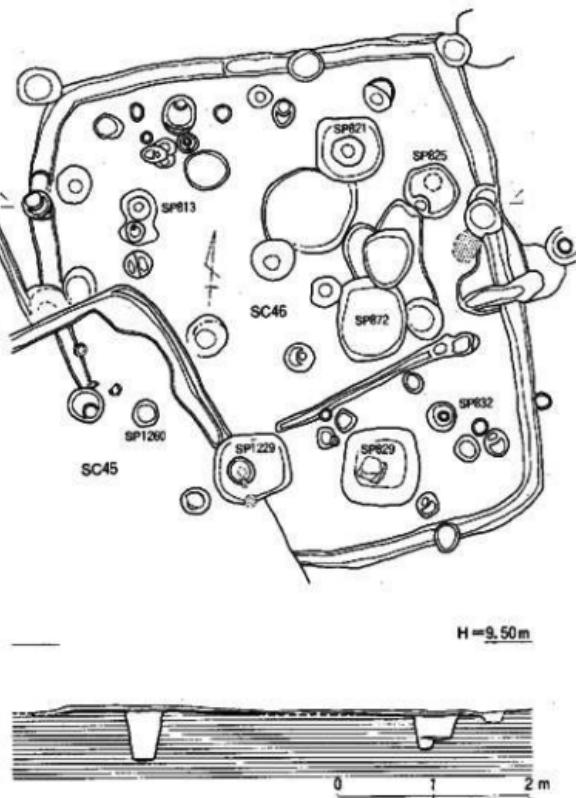


Fig. 38 S C 46 遺構実測図 (1/60)

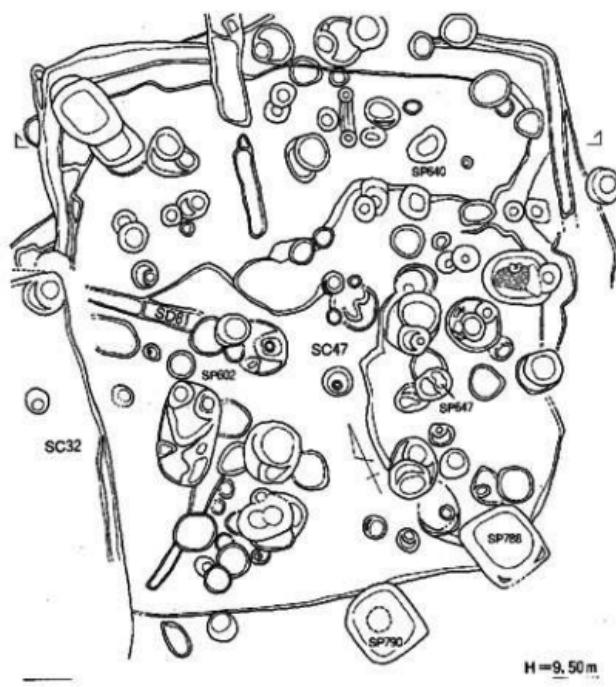


Fig.39 SC47遺構実測図(1/60)

物は、土師器の甕、須恵器の坏身・壺、壺、壺などが出土している。須恵器の坏は須恵IVである。6世紀終末の時期であろう。

S C 59 (Fig. 4, PL.12) 調査区南側に位置する。S C 36・43・60に切られ、S C 38を切っている。一部しか残っていないので全体の様子は分からぬ。古墳時代の住居址であるが、弥生中期末～後期初めの甕や器台などが混入していた。

S C 60 (Fig. 4, PL.12) 調査区南側に位置し、S C 43を切っている。もともと S D 44の上にのっていたが、S D 44の確認の際一部を飛ばしてしまった。遺物は、土師器片、須恵器坏

遺物の量は少なかったが、須恵器の坏身は口縁の立ち上がりが短く内傾していた。須恵器の段階で6世紀の終末に位置付けられる。

S C 58 (Fig. 41, PL.15)

S C 46の東側に位置する小形の堅穴である。長方形プランを有し、長辺3.4m、短辺2.9m、深さ0.2mを測る。壁溝は巡らず、主柱穴もはっきりしない。東壁近くに焼上が分布している。床面西壁で検出された大形の柱穴は S B 102のものである。遺

身などが出土している。坏身の立ち上りは短く内傾したもので須恵器に相当し、6世紀終末の時期が考えられる。

S C 63 (Fig. 4, PL.10) 調査区中央部に位置し、S C 47から切られている。北壁と東壁が残り、1辺5m弱の方形プランになるとみられる。主柱は4本である。遺物は少量で、土師器の瓦片、須恵器の坏蓋、瓦などである。6世紀中頃から後半にかけての住居址に切られているので、それよりもやや古くなると考えられる。

S C 64 (Fig. 42) 調査区西側で出土した。S C 01・22に切られているため東側の壁が不明である。南北幅は4.6mを測る。壁の高さは残りの良い部分で0.25m前後である。南側と西側の一部には壁溝がみられる。床面にははっきりした主柱穴が確認できなかった。

遺物出土量は少ない。土師器瓦の細片、瓶片の他、若干須恵器片を含む。この中の須恵器に、体部と口縁部の境に沈線を施す坏蓋片が含まれる。

74 (Fig. 44) は須恵器坏蓋である。天井部は丸みが小さく平坦に近い。体部と口縁部の境に段を有す。口縁部は直下に下り、その端部は浅く凹む内傾した面を呈す。外面の回転ヘラ削り調整の範囲は体部以上に及ぶ。口径12.2cm、器高5.1cmを測る。色調は青灰色を呈し、堅緻である。胎土の砂粒は比較的少ない。75は弥生土器の混入である。体部はソロバン玉状を呈し、外面はミガキと思われるが不明瞭である。内面には放射状にハケ目を施す。

S C 65 (Fig. 4) 調査区西側に位置し、S C 02・64から切られており、一部しか残存していないかった。床面には整溝が巡り、主柱は4本になるとみられる。東側の主柱穴2個は確認している。出土遺物は極少量で、弥生土器が混入していた。

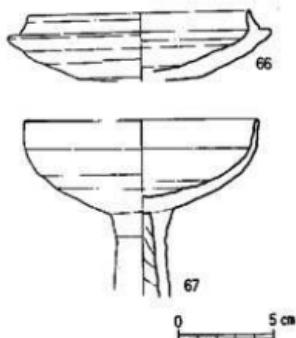


Fig. 40 S C 47出土遺物実測図 (1/3)

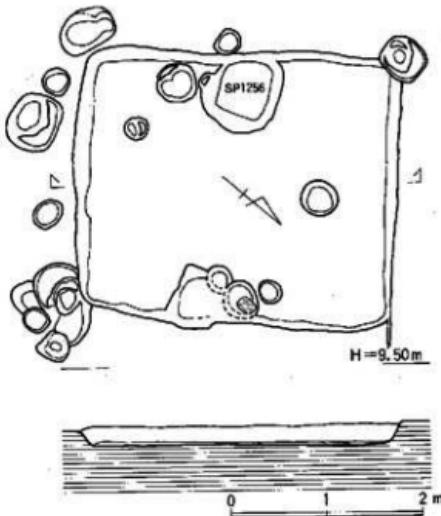


Fig. 41 S C 58遺構実測図 (1/60)

S C69 (Fig. 4) 調査区西端部南寄りに位置する。かなり削平されているのと、西側は未調査区へ延びているのと全体の様子ははっきりしない。主柱は4本と考えられ、東側の主柱穴間隔から1辺5m強の堅穴住居址が推定できる。遺物は少なく、土師器壺や須恵器の坏身、甕などが出土している。須恵器坏身はⅣ期に属するものである。

S C71 (Fig. 4) S C69の近くで出土したもので、一部しか残存していない。遺物は少なく、土師器の甕、須恵器の坏蓋が出土している。坏蓋は須恵器の古い方である。弥生土器も混入した状態で出土している。主柱は、確認された柱穴から4本と考えられる。

S C79 (Fig. 4) 調査区中央部に位置する。S C32に切られて全体のプランは分からぬ。西側の壁は、一部残っており、一辺4.7mを測る。主柱は4本で主柱穴は床面に1個と残りはS C32の床面で3個確認できる。遺物は上師器の破片が極少量出土したのみである。

S C80 (Fig. 4) S C79の西側で検出された。他の遺構との切り合いが激しく、北側壁の一部と主柱穴4個を確認したにとどまる。

S D31はこの住居に伴うものであろう。遺物の量は少なく、北側壁の近くに土師器壺が潰れた状態で出土した。

S C82 (Fig. 4)

S C46の調査の際、床面で細かい溝を検出したがS C46北側で検出した細い溝と方向や形状が類似していることから、削平された堅穴住居址の壁溝であると判断した。その後、主柱穴も確認できたので住居址として取り扱った。S C46との切り合いははっきりしないが、遺構の残り具合からS C46の方が新し

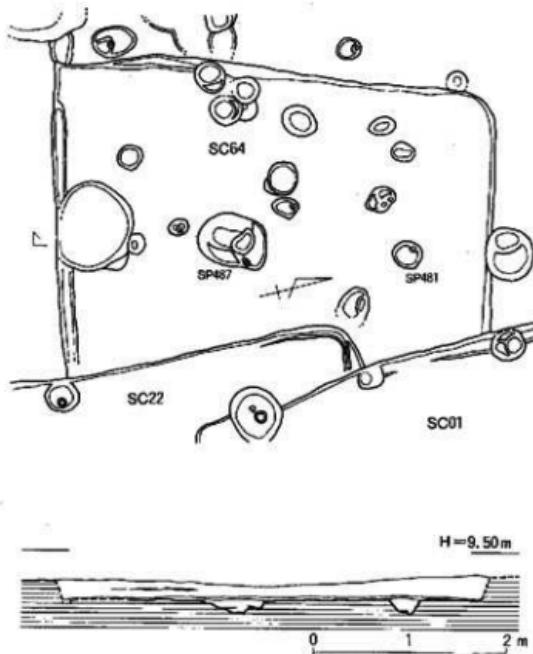


Fig.42 S C64構造実測図 (1/60)

いと考えられる。

S C 88 (Fig. 4・44) 調査区西側南寄りで検出した。南側と北側は擾乱で破壊され、東壁と西壁が部分的にしか残存していない。東西幅は4.0mでやや小型の住居址である。壁高の高さは0.1~0.15mである。主柱は4本で、床面西側にやや浮いた状態で焼土が分布している。焼土の南側に須恵器3個体と甌の取手が出土した。

図示した遺物以外の出土量は極めて少なく土師器壺細片のみである。76は焼き歪みが著しい。体部は本来丸みをもつもので、口縁部との境に弱い屈曲をもつ。外面の回転ヘラ削りは約未溝である。77は口径13.4cm、器高4.2cmを測る。天井部は丸みをもち、口縁部は若干、外反する。外面の回転ヘラ削りは体部約未溝の範囲に及ぶ。外面天井部にはヘラ記号を刻む。78は受部径14.2cm、立ち上り径11.6cm、器高4.2cmを測る。底部から体部にかけての弯曲は小さいが立ち上がりは比較的長い。外面の回転ヘラ削りの範囲は約未溝に及ぶ。外底部にヘラ記号を刻む。色調は灰色を呈し軟質である。胎土の砂粒は比較的少ない。79は土師器壺の取手である断面形は上面が平坦で下半が弧状となる。

S C 109 (Fig. 4、PL.15) 調査区東端部に位置し、半分以上は未調査区へ広がる。全体的に削平を受けており、豊溝のみしか残存していない。方形プランで南北幅5.0mを測る。主柱は4本で、西側2個の柱穴は確認できる。遺物は少量で、須恵器Ⅲに属する壺蓋、壺、土師器壺片などが出土地している。6世紀中頃の時期であろう。

S C 116 (Fig. 4) S C 05東側に位置する。削平されて残りが悪く全体のプランが描めない。遺物は少量で、土師器の壺、須恵器の壺蓋片が出土している。

S C 117 (Fig. 4、PL.7) S C 20の東壁を切った状態で検出したが、一部のみ確認しただけで全体の様子は分らない。土師器の破片が少量出土している。

S C 121 (Fig. 4・44、PL.16) 調査区北側に位置する。弥生時代の大形掘立柱建物 (S B 57) の延長を確認するため設けた北側拡張区で出土した。殆ど豊溝しか残っておらず、東西幅4.7mを測る。北側は段落で確認できない。主柱は4本で、南側の主柱穴2個が確認できる。

出土遺物量は少量である。この中にはS C 22出土の土師器と同時期の高壺片、直口壺片が出土した。80は口径13.2cm、復原した器高は5.8cmを測る。丸底の底部から体部はやや上方に立ち上り、口縁部は外反する。内外面の調整は器面が粗れて不明である。81は土師器の高壺で、口径17.6~18.2cm、壺部高6.4cmを測る。底部と体部の屈曲は不明瞭である。口縁端部付近は外反している。82は口径18.0cmを測る。胴部内面はナデ調整を施す。

S C 122 (Fig. 4、PL.16) S C 121の西隣りで出土した住居址で、残りが悪く、東側及び南側豊溝の一部が残存していたに過ぎない。S C 121と同タイプになると想われる。

S C 125 (Fig. 4) S C 37に切られた西側に位置する。一部しか確認していないので全体のプランは不明である。土師器の壺、焼、須恵器の壺片などが出土している。

住居址出土石製品 (Fig.43)

竪穴住居跡からは、製品以外の滑石片を含め、多くの滑石製造物が出土した。その大半は須恵器で言う小田幅年のⅡ期遺構に伴ったものと考えられる。

92以外の83~99は滑石製臼玉である。83はSC06、84・85はSC10、86はSC28、87はSC30、88~91はSC32、93・94はSC37、95・96はSC47、97・98はSC58、99はSC64から出土した。径4.5mmから6mmで、最大の96は9.5mmを測る。厚さは2~4mmを測る。92は碧玉製の管玉片である。径7mmを測る。100・101はSC22から出土した。滑石製で、厚さ2.5~3mm、各1箇所に径1~1.5mmの孔を穿つ。100は側縁の大半を破損するが一部、弧状に成形した面が認められる。101は側縁を方形に折り取った面が認められる。両面に擦り切りの線刻がある。102はSC40から出土した。軸長2.6cmの隅丸方形に側縁を作り出す。側縁は滑らかに仕上げている。中央に径1.5mmの孔を穿つ。厚さ4mmを測る。滑石製。103は住居址検出時に出土したものので、住居址を確定できない。長径4.6cm、短径3.5cmを測る楕円形に側縁を成形する。断面形は中央が肥厚し、側縁は平坦面を呈す。径6mmの孔が側縁寄りに両面から穿たれている。石材は滑石である。104・105は滑石製軽鍤車である。104は径3.75cm、厚さ0.7cmを測る。中心に両面から径8.5mmの孔を穿つ。孔の周囲は同心円状に段がつく。断面形は片面が幅広の台形状を呈す。105は径4.0cm、厚さ1.2cmを測る。断面形は側縁が弯曲した台形状を呈す。側縁の上、下端部には稜が走り中央に窪む。中心に径9mmの孔が穿たれている。両面から穿孔されたものが旗跡が明瞭ではない。

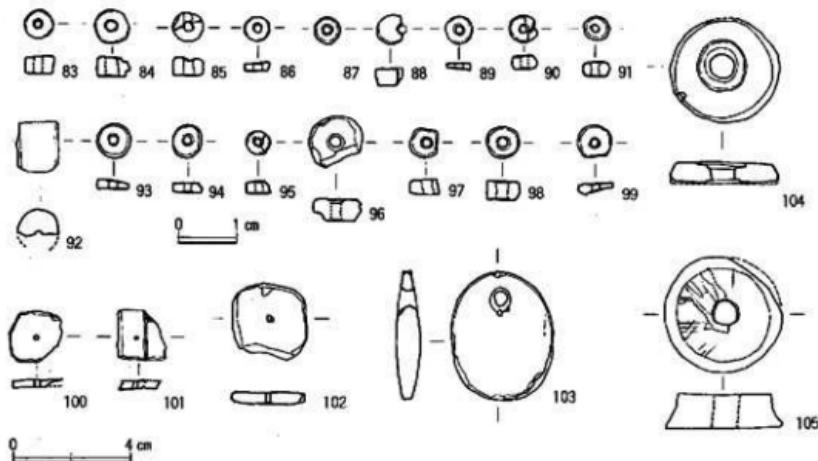


Fig.43 住居址出土遺物実測図(1) (1/1, 100~105は1/2)

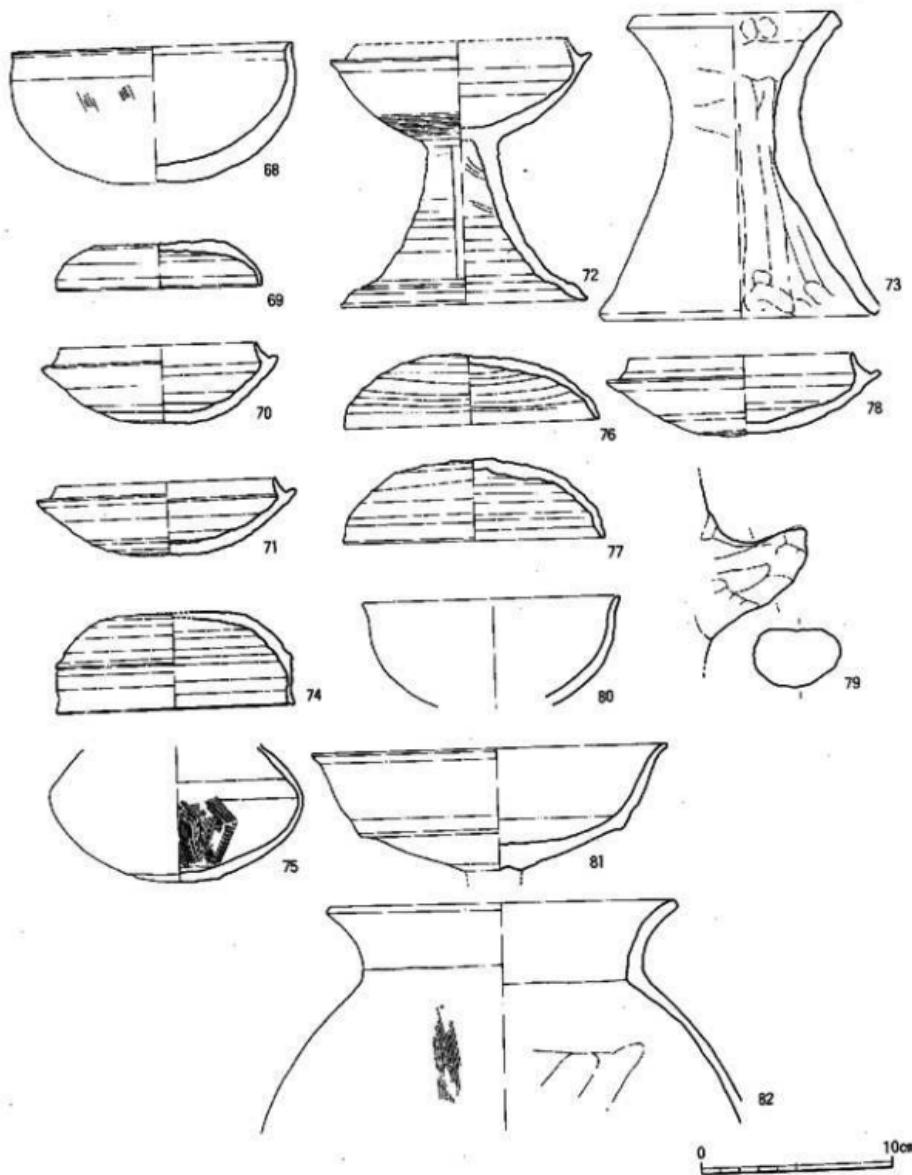


Fig.44 住居址出土遺物實測圖(2) (1/3)

柱穴出土遺物 (Fig.45・46、PL.38・39)

多数の柱穴が検出され、埋土中からは細片のみならず、器形全体を知り得る大きさのものまで含む。大多数の柱穴が検出された住居址に伴うものと考えられるが、切り合いで多く住居址を確定できない。しかし、概ね住居址が宮まれた時期は判断できようか。

116~121は須恵器の坏片である。118は復原口径12.0cmを測る。口徑に対し器高の低い扁平な器形である。天井部はわずかに丸みを帯び、弱い屈曲で口縁部へ下る。外面天井部にはヘラ記号を刻む。119は118と同じ柱穴から出土した。口径13.7cm、器高4.0cmを測る。底部から体部にかけて滑らかに弯曲し、外面の回転ヘラ削りは後を為さない。120は復原口径12.2cm、器高4.4cmを測る。体部と口縁部の境には明瞭な稜を有した段がつき、口縁端部は浅く凹み内傾する。内面天井部の中心には不整方向のナデを施す。121は受部径15.2cm、立ち上り径13.0cmを測る。底部は平坦に近いが、体部にかけて弯曲が大きい。立ち上り端部は浅く凹み内傾する。外面の体部方に及ぶ範囲に回転ヘラ削り調整が施される。内面は回転ナデ調整で、不整方向のナデは施されない。122は上鍤である。長さ7.9cm、径3.3cm、孔径1.6cmを測る。側縁の幅が変わらない円筒形を呈す。胎土に石英砂粒を多く含む。123・124は同じ柱穴から出土した。123の小型丸底壺は口径7.2cm、器高8.6cmを測る。体部外面は粗いタテハケ、内面はナデ、口縁部内外面はヨコ方向のナデ調整を施す。124は口径14.2cm、器高10.7~11.4cmの土師器高坏である。坏部は底部から口縁部にかけて滑らかに弯曲して移行する。脚部は裾にかけて外側へ大きく開いていくが、その屈曲は稜を為さない。坏部内外面ナデ、脚部外面にはナデ上げた痕跡が残る。125の土師器高坏は口径14.7cm、器高11.6cmを測る。坏部の口縁が外反し、内外面に弱い稜を作る。脚部は外方へ大きく開き、靴の屈曲は不明瞭である。坏部内外面ナデ、脚部の調整は不明。脚部内面に粘土紐の痕跡が認められる。胎土は124・125ともに精良である。126は復原口径14~14.6cm、胴部最大径19.6cmを測る。胴部は卵形を呈し、頭部にかけてすぼまり、窪かく外弯する口縁部がつく。口縁部は内外面ヨコ方向のナデ、胴部外面は粗い縦~斜位のハケ調整を施す。内面は頭部下位に指ナデ痕が残り、遡存する胴部内面には横位のヘラ削りが認められる。127はS C 10の主柱穴横の柱穴に埋置されていた。口縁の一部を欠くが完形品である。平底に近い弯曲の小さな底部から胴部にかけてほとんど張らずに移行する。胴部上位がやや内傾し頭部にとりつく。口縁部はわずかに外弯する。口縁部内外面ヨコ方向のナデ、胴部外面は縦ハケ、底部近くで横位のハケ調整を施す。胴部内面は斜位の下から上へのヘラ削り、内底部には指頭痕が残る。復原口径21.0cm、器高22.0cmを測る。胎土は砂粒を多く含み色調は褐色~暗褐色を呈する。128の須恵器坏身は受部径14.2cm、立ち上り径11.8cm、器高3.7cmを測る。底部は平坦で、体部は弯曲が小さく直線的に外方へ延びる。立ち上りは短く、受部からわずかに下方に出る程度である。色調は灰色を呈し軟質である。蓋として逆転する時期か。住居址出土遺物の中では新しい型式と考えられ、下限を示すものであろう。129は受部径13.8cm、立ち上り

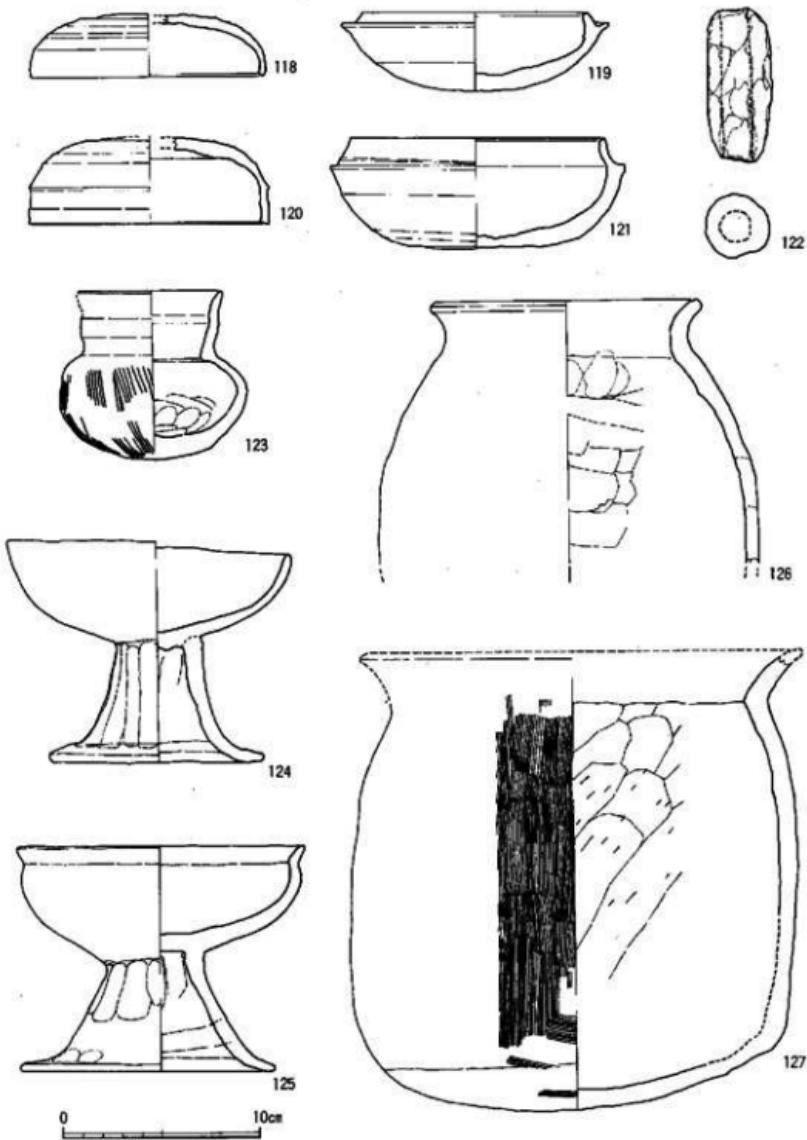


Fig.45 柱穴出土遺物実測図(1) (1/3)

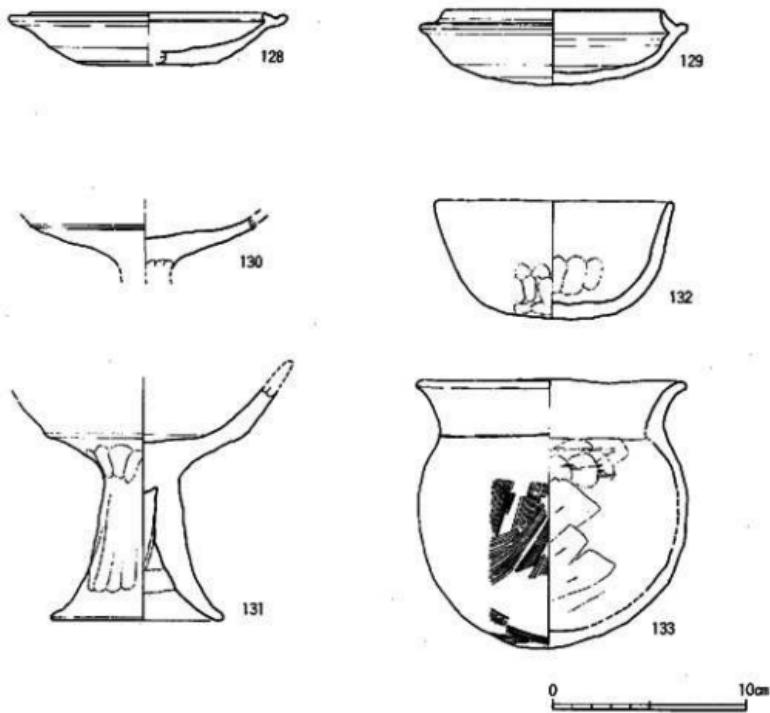


Fig.46 柱穴出土遺物実測図2) (1/3)

径13.8cm、器高3.8cmを測る。底部は丸みをおび、体部にかけてはやや屈曲し、上方に延びる。立ち上りは比較的短く、中位でゆるやかな屈曲をもって移行する。外面の回転ヘラ削りは体部の $\frac{1}{2}$ の範囲に及ぶ。130～133は同じ柱穴から出土した。130は坏部の底部から口縁部にかけて弱い段を有す。131の坏部も130同様に坏部の底部からの屈折には突帯状の弱い段を有す。脚部の基部は広がらず裾部に滑らかに移行する。器草も裾部に向かって厚みを減らす。脚部の内外面はナデ調整を施す。132は弥生土器の混入である。133はほぼ完形品である。口径14.0cm、器高13.9cm、胴部最大径13.7cmを測る。体部は球形を呈し、頸部は内外面ともにその屈曲は比較的明瞭である。口縁部は若干外寄しながら延びてゆき、口径は胴部最大径とはほぼ変わらない大きさである。外面は細かいタテ方向のハケ調整を施す。内面は頸部下に指押えの痕跡を残し、以下、斜位のヘラ削りを下から上へ施している。色は明褐色を呈し、胎土は比較的密である。以上の遺物から5世紀初頭～6世紀末までの時期幅が認められる。

2 土壌

土壌（SK）として取り扱った竪穴状遺構は20基、用途不明遺構（SX）としたものは9基ある。SXも竪穴状になっており、ここでは一括して報告する。ただし、形状はかなり異ったものがある。

S K12 (Fig. 4, PL.27)

調査区北側に位置し、2.5m四方の浅い竪穴である。遺物は少なく、土師器壺、須恵器の壺片、弥生土器などが出土している。

S X14 (Fig.47, PL.35)

調査区西側の北寄りで出土した略方形を呈する竪穴である。南北2.45m、東西2.1mで、北側

の深さは0.3mである。遺物は白磁碗、龍泉窯系の青磁碗（青文）、瓦質の擂鉢、糸切り底に板目圧痕の見られる土師壺・皿などが出土している。12世紀後半—13世紀の時期であろう。

S K15 (Fig.48~50, PL.35) S X14に切られて南側に位置する中世の竪穴遺構である。南北4.0m、東西3.2mでやや長方形を呈し、深さは0.4mである。出土遺物は、白磁碗、龍泉窯系の青磁碗、褐釉陶器、瓦器碗、糸切り底の土師器壺・皿、滑石製品、混入した古墳時代の土師

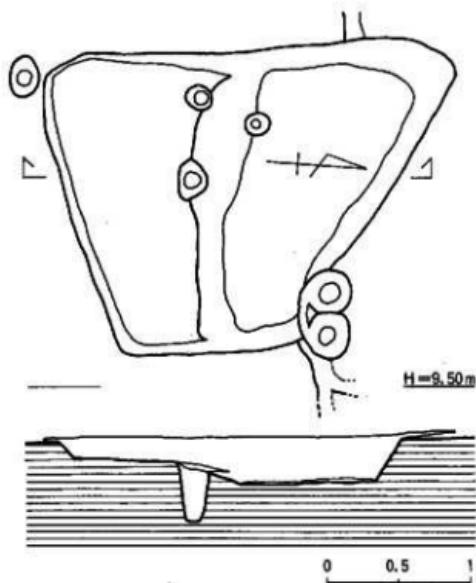


Fig.47 SX14 遺構実測図 (1/40)

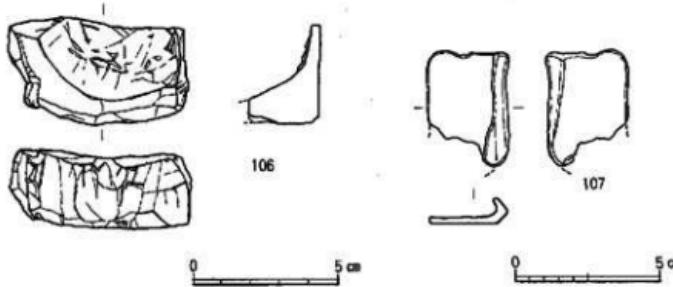


Fig.48 SX15出土石製品実測図 (1/2)

Fig.49 SX15出土青銅製鋤先実測図 (1/2)

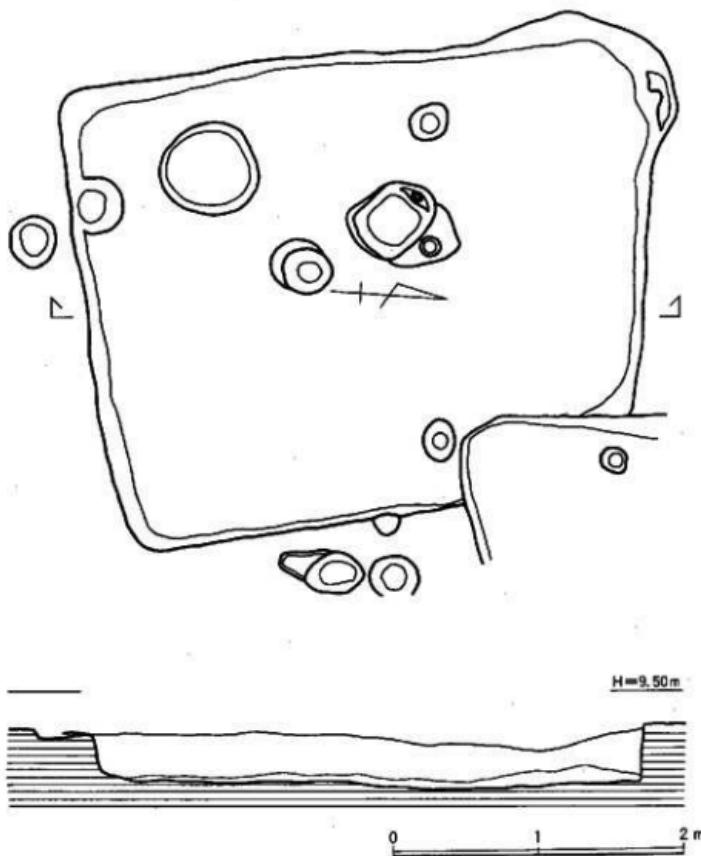


Fig.50 S X15遺構実測図 (1/40)

器・須恵器などがある。また、弥生時代に属すると考えられる青銅製鋤先も出土している。106は滑石製容器である。遺存する周縁部に突起が1箇所削り出されている。上面は平坦、平滑に仕上げ、側縁は削り痕が明瞭に残る。内面は円形プランで中心部に向かって深く削り出す。底部は側縁に比べ薄く仕上げている。107は青銅製鋤先である。先端部の大半を欠損している為、全体の器形は不明である。幅2.8cm、高さは遺存する部位まで4.0cm、厚みは2mm位である。

S K17 (Fig.51, PL.27)

S C 08の南側に位置する。南北3.2m、東西2.7m、深さ0.15mを測る不整形の竪穴である。遺物は土師器の甕、壺、須恵器の壺蓋、平行タタキを施す亮片などである。壺蓋は須恵器に属し、6世紀後半の時期であろう。

S K24 (Fig.53)

調査区中央部に位置しS C 06の南側にあたる。一辺2.0m前後の略方形を呈し、深さは0.3mである。中世の土壤で、白磁碗・皿、龍泉窯系の青磁碗（蓮弁）、糸切り底の上師皿と混入した古墳時代の遺物が出土している。14世紀前半代に属すると考えられる。

S K51 (Fig. 4)

調査区北西部に位置し、機械によって大部分が失なわれているので全体の様子は分らないが、竪穴住居址の一部である可能性が高い。遺物は白磁碗、須恵器壺身・蓋、甕、土師器の甕などがある。白磁碗は重複する中世のビットから混入したものである。6世紀終末に属する遺物が多い。

S K53 (Fig. 4) S C 07の西側にある長径1.2mの楕円形状を呈する浅い土壤である。古墳時代の遺物が少量出土している。

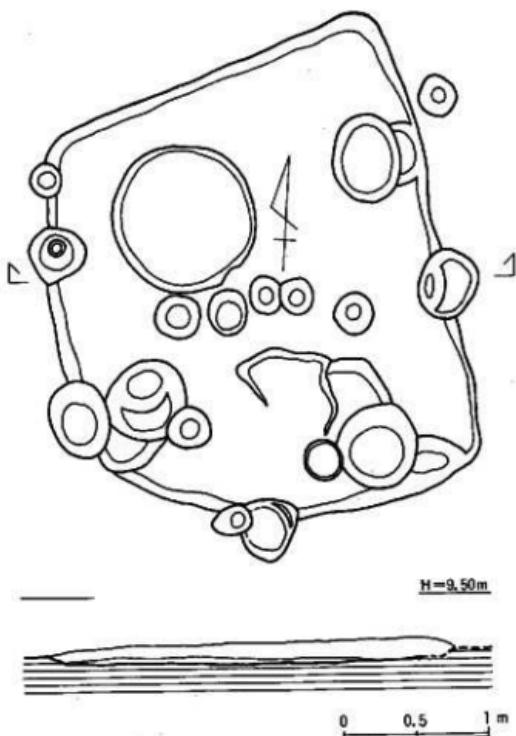


Fig.51 SK17遺構実測図 (1/40)

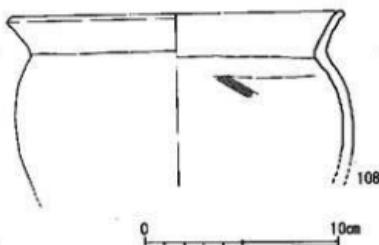


Fig.52 S X55出土遺物実測図 (1/3)

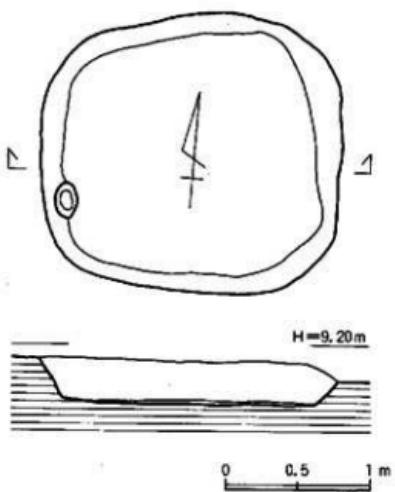


Fig.53 SK 24造構実測図 (1/40)

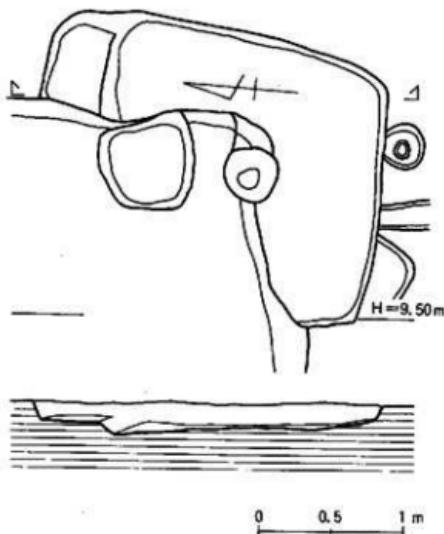


Fig.56 SK 96造構実測図 (1/40)

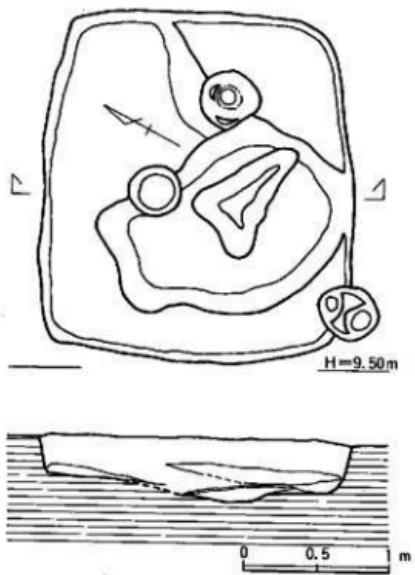


Fig.54 SK 76造構実測図 (1/40)

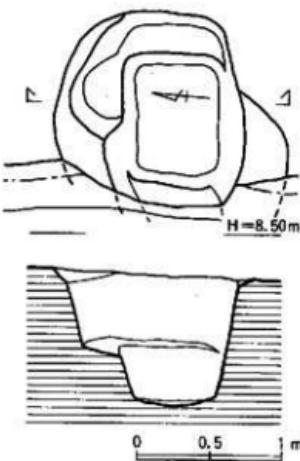
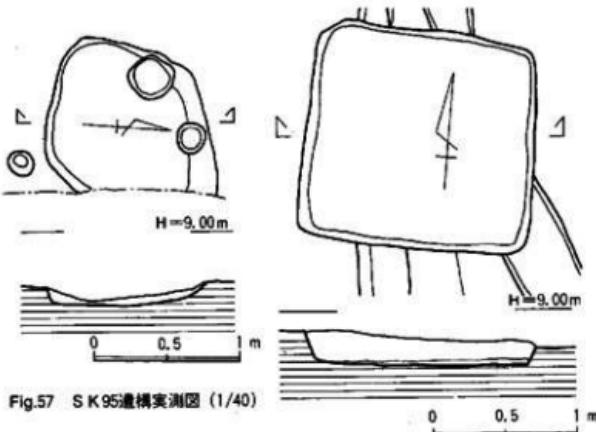


Fig.55 SK 94造構実測図 (1/40)

S X54 (Fig. 4)

S C 05の東側に位置する不定形の落ち込みである。S C 116の一部であるかも知れない。白磁碗、須恵器の壺身、土師器壺、弥生土器などが出土している。白磁碗と弥生土器は混入品であろう。



S X55 (Fig. 4・52)

S X15の北側で検出された不定形の深い落ち込みである。土師器の壺、須恵器壺と弥生土器片が出土している。108 (Fig. 52) は口径16.2cmを測る。体部の最大径は胴部の上位にある。内外面の調整は不明であるが、内面頸部の近くにハケ目が若干残る。

S X61 (Fig. 4) 調査区西端部に位置し、S C 37に切られている。西側を拡張した際 S C 125が確認され、S X61はその一部であることが判明した。出土遺物は、須恵Ⅱに属する壺身、同じくⅣに属する壺身、須恵器の壺、土師器の壺、高壺、瓶などがある。

S K68 (Fig. 4) S C 34の北側に位置する。半分は擾乱で破壊されているので全体のプランははっきりしない。深い土壤である。遺物は平行タタキの須恵器壺片と土師器の壺、壺などがある。遺物の量は全体的に少ない。

S K74 (Fig. 4) S X55の下部から出土した長方形の土壤である。主軸は東西方向をとり長さ2.3m、幅1.2m、深さ0.45mを測る。遺物量は全体に少ないが、弥生時代に属する壺が出土地である。

S K76 (Fig. 54, PL. 2) S C 01の床面下から検出された土壤である。長さ2.4m、幅2.1mを測り、深さは最も深い所で0.4mである。遺物は須恵器片と土師器壺片が微量混入するが、多くは弥生時代の壺形土器である。弥生中期後半～末に属する壺と想われる。

S X78 (Fig. 26, PL. 9) S C 32の床面で出土した不定形の落ち込みである。住居址の上部から掘り込まれていたかどうか確認できなかった。須恵Ⅲに属する高壺、同じくⅣに属する壺、土師器の壺、瓶の取手などが出土している。

S K94 (Fig. 55) 調査区東側南寄りに位置し、S D 96の溝底で出土した土壤である。方形を呈し一边が1.3m前後を測る。東側は2段の掘方になっている。遺物は白磁碗、糸切り底の

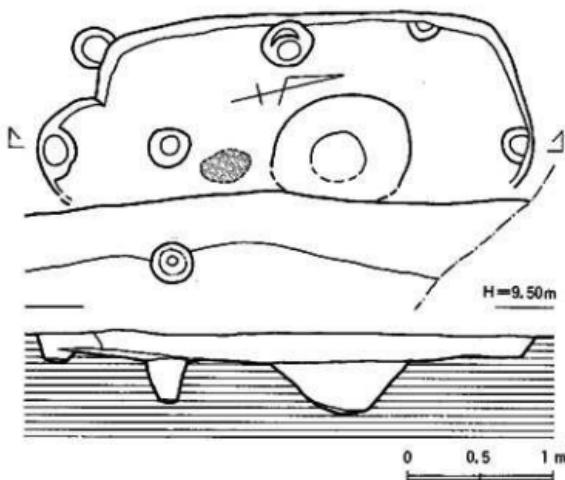


Fig.59 SK113遺構実測図 (1/40)

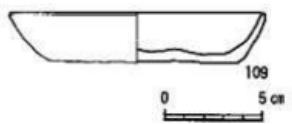


Fig.60 SK119出土遺物実測図 (1/3)

土壤内からは円筒埴輪のみが出土している。一個体分とみられ、残りが悪く部分的にしか接合できない。円形透しを持ち、突帯は幅が広く低くなっている。

S K 98 (Fig.56, PL.28) 調査区東北部に位置し、

北側の大部分を擾乱で破壊されている。長さ2.4m、幅は2.0m前後になるとみられる。深さは0.2mである。白磁碗、青磁片、瓦器碗片、土師皿などが出土している。13世紀の遺構である。

S K 99 (Fig.58) 98の南側に位置する方形の土壤である。東西1.6m、南北1.5m、深さ0.2mである。白磁、土師皿が出土し、古墳時代の須恵器や土師器も混入していた。

S X 105 (Fig.4) S D 44の上にのっていた不定形の落ち込みである。須恵器壺、高壺、土師器の壺が出土している。弥生土器の壺も混入していた。

S X 106 (Fig.4) S X 105と同様 S D 44にのっていた不定形の落ち込みである。須恵器壺(IV)、土師器壺、弥生時代の壺が出土している。

S X 108 (Fig.4) S X 106の西側に位置する不定形の落ち込みである。土師器片しか出上していないが、堅穴住居址の一部である。S D 107も同一堅穴住居址の壁溝と考えられる。

S K 113 (Fig.59, PL.28) 調査区北東隅に位置し、東側を S D 96から切られている。長さ3.0m、深さ0.2mである。床面中央部に径0.9mの大きなピットがあり、その南側に焼土が広がっている。遺物は、須恵IVに属する壺身、土師器の壺、混入と考えられる弥生時代の壺や壺片

土師壺・皿などがある。また、須恵器の壺、高壺、壺、土師器の壺、甌の取手など古墳時代に属する遺物が出土している。覆土の色あい、白磁の出土から中世の土壤と考えられる。

S K 95 (Fig.57, PL.26) 調査区南東隅で検出した楕円形の土壤である。一部分が未調査区へ伸びているので長径は分らないが短径は1.15mである。壙底は皿状に浅く窪む。

などが出土している。

S K119 (Fig. 4、PL.24)

調査区北端部西側に位置する。S K120の上に作られた梢円形の土壙である。遺物は白磁碗、瓦質の擂鉢、糸切り底の土壙壊・皿、土鍋、カマドの破片などである。

93 (Fig.60) の外底部は糸切りで、板目が明瞭に残る。

3 井戸址

S K23 (Fig.61、PL.21)

調査区中央部に位置し S K24 の東側にあたる。井戸の掘方は南北3.0m、東西2.6mの略方形に近い形を呈している。井筒には桶が使用され、6段分が残存していた。本来はさらに数段積まれていたものと推察される。井筒を埋める掘方は0.8mで、最上の井筒径は0.7mである。桶には幅10cm前後の板材が使用され、2本のタガで縫め付けられている。最下段の桶の径は0.5mで上段に行くに従って径が大きくなっている。桶の組み合わせ方は覆口式で、桶の大きさも下端が大きく上端が細くなっている。井戸の最下には玉砂利が敷かれていた。遺物は井戸中位で検出した多数のイシガメの甲羅と、最下で出土した

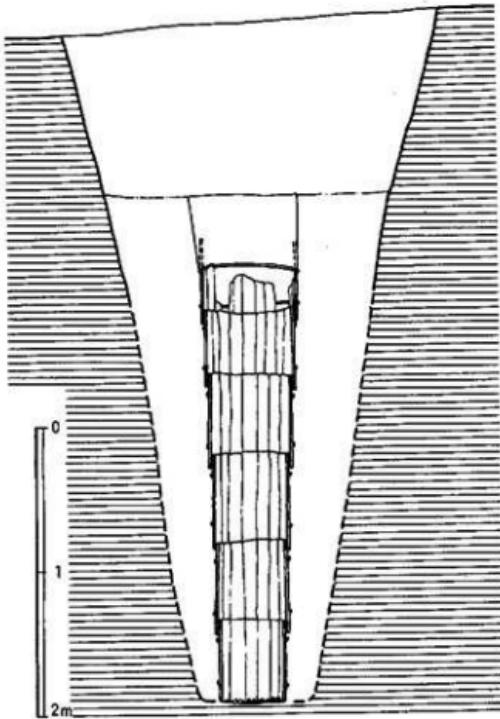
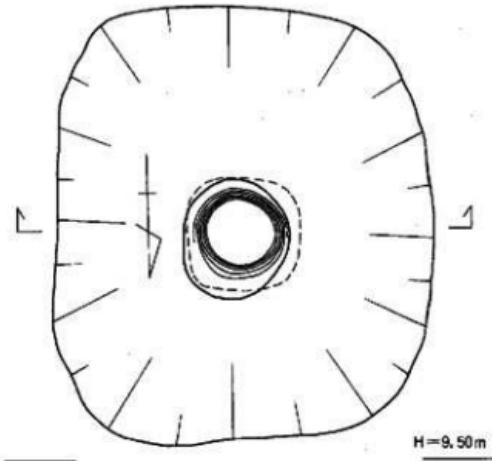


Fig.61 S E23構造実測図 (1/40)

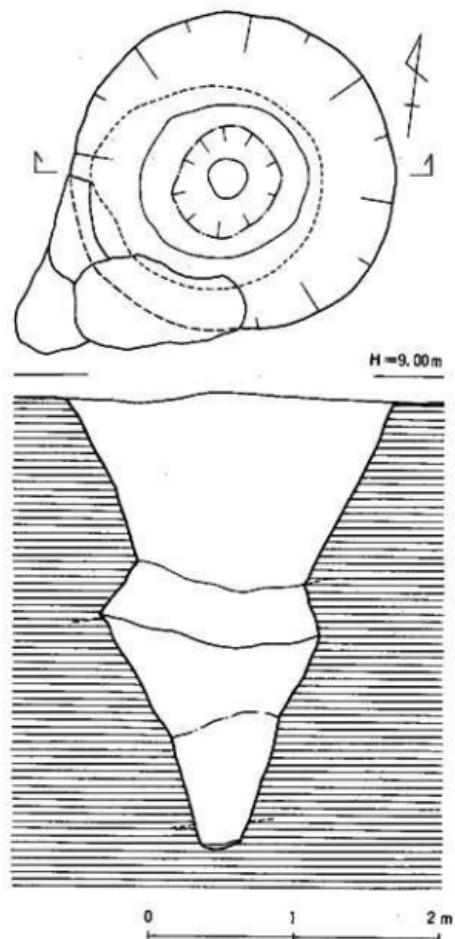


Fig.62 S E101遺構実測図 (1/40)

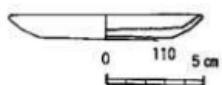


Fig.63 S E101出土遺物実測図 (1/3)

龍泉窯系の双魚文が浮彫になつた青磁皿がある。14世紀の井戸址と考えられる。井戸址の北側には中世の柱穴群が多くみられた。

S E101 (Fig.62・63、PL.23)

調査区中央部東寄りに位置し、S C20の北側にあたる。素掘りの井戸址で、掘方径は確認面で2.0m前後である。断面は緩やかに盛りながら下降し、途中で抉れて井戸底に至る。井戸底は凝灰質の火山灰層まで到達していた。出土遺物は余り多くなく、土師皿が出土している。

110 (Fig.62) は口径9.2cm、底径6.4cm、器高1.2cmを測る。底部は上げ底ぎみで、体部はわずかに内寄してのびていく。内外面の調整不明。

4 溝

溝は全部で25条出土している。次年度報告する S D44・89以外について概要を述べたい。

S D11 (Fig.4、PL.29)

調査区北側で検出された溝で北西から南東に伸びている。幅は1.0m前後である。出土遺物は須恵Ⅲb～IVの壺身、高壺、壺、竈、土師器の壺、カマド、埴輪などがある。

113 (Fig.65) は須恵器長頸

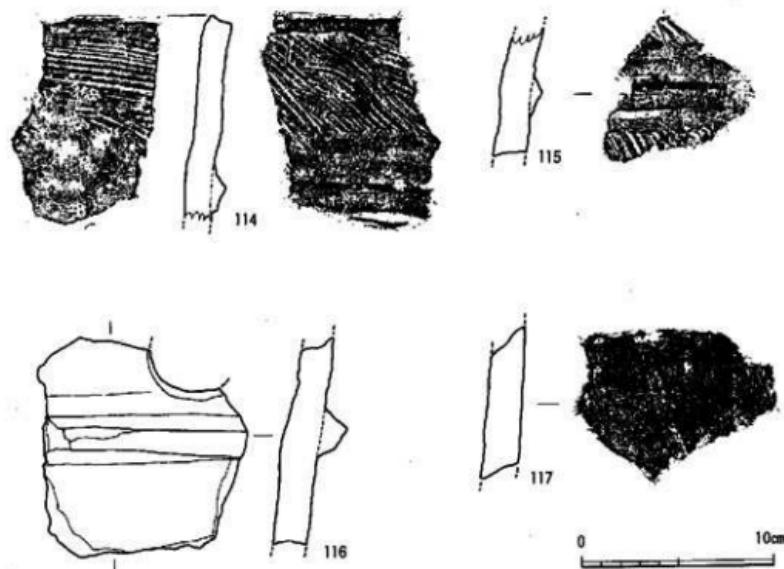


Fig.64 S D11出土遺物実測図(1) (1/3)

壺の完形品である。口径7.95cm、器高21.1cm、胴部最大径15.3cmを測る。胴部はソロバン玉状の器形を呈す。胴部中位に2本の沈線に狭まれ、櫛歯刺突文を施す。頸部は直線的に延び、端部付近で細まる。外底部にはラ記号を刻む。また、外面には灰釉がかかる。114~117 (Fig.64) は円筒埴輪片である。総て内面が2次火熱を受け融解している。再利用の可能性もある。

S D 96 (Fig. 4, PL.34) 調査区東側を南北に走る幅1.8m前後、深さ0.3~0.4mの中世に属する溝である。

古墳時代の遺物が多く混入するが、玉縁白磁片、龍泉窯系青磁片も比較的多く出土した。

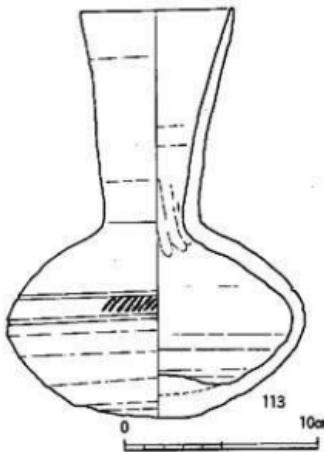


Fig.65 S D11出土遺物実測図2 (1/3)

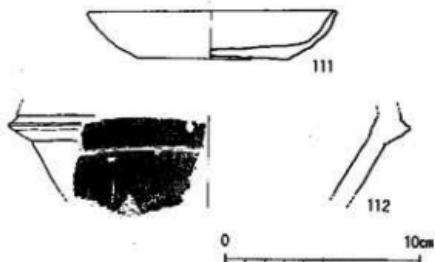


Fig. 66 S D 96出土遺物実測図 (1/3)

111は口径12.8cm、底径7.8cm、器高2.6cmを測る。底部はやや上げ底で、体部は内湾しながら延びる。外底部は糸切りである。112は滑石製石鍋片である。鍋の先端で復原径20.4cmを測る。内面は平滑に仕上げ、削り痕をほとんど残さない。外面にはスヌが付着する。図示していないが他に黄褐色の水注破片等も出土している。

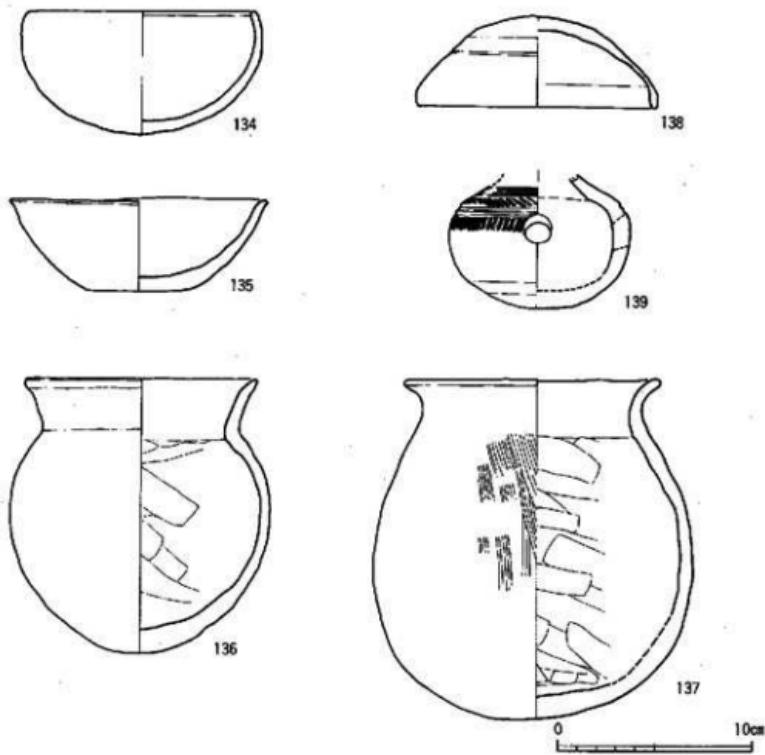


Fig. 67 遺構検出時出土遺物実測図 (1/3)

S D 13・16・56・70・85 (Fig. 4) 古墳時代に属する溝で、S D 13は調査区北側で検出された。東西方向から南東へ折れ曲がり伸びている。幅0.6m、深さ0.2m前後で、南に伸びるに従って幅が狭くなり、浅くなる。須恵器の坏身(IV)・蓋、壺などが出土している。6世紀の終り頃の時期であろう。S D 16は7世紀初め頃の南北溝である。幅0.9mで、S C 03の北側に伸びている。S C 56と70は一連の溝である。調査区西側を南北に走り、幅は0.6mである。遺物は須恵器坏身・蓋、壺、壺、壺などがある。坏身の形状から7世紀初めの時期であろう。

S D 62・92 (Fig. 4) 古墳時代終末期に属するとみられる溝である。東西及び南北方向に伸びている。今回は報告していないが、S B 87・90・91などの大形掘立柱建物と関連する溝であろう。幅0.2~0.5mで、底の部分しか残存していない。

S D 93・97・100・112・114・115 (Fig. 4) 奈良時代を中心に一部平安時代までの遺物を含む浅い溝である。S D 93以外は全て北西から南東方向に伸びている。

S D 67・77・81・107・110・111・118・124 (Fig. 4) 全て細くて浅い溝で、殆どが竪穴住居址の壁溝になるものである。遺物は少なく、辛うじて古墳時代と判断できる。

5 遺構検出時出土遺物

ここで扱う遺物は、発掘調査の遺構プラン検出作業中に削られて出土した遺物である。出土場所の記載を行なったが、遺構を確定できない為、一応、一括して説明する。

134は口径11.6cm、器高6.3cmを測る土師器塊である。内外面の器面が粗れて調整は不明である。135は口径13.0cm、器高6.8cm、底径5.3cmを測る土師器塊である。底部は平底で、体部はわずかに弯曲する。外面ナデ調整か。136は口径11.8cm、器高14.2cm、胴部最大径13.2cmを測る。外面および口縁部内面はナデ調整、胴部内面は斜位の下から上へのヘラ削りとナデ調整が施されている。色調は明褐色で焼成は弱い。胎土は比較的精良である。138は口径10.4cm器高4.7cmを測る。天井部は丸く山形を呈す。口縁部は緩やかな屈曲をもって下方へ下がる。口縁端部は丸く収める。外面の回転ヘラ削りの範囲は体部のみ未溝である。また、天井部には静止ヘラ削りを施した可能性がある。内面の天井部には不整方向のナデを施す。色は灰色を呈し焼成は堅敏である。胎土は比較的精良である。139は須恵器、壺の体部である。胴部最大径9.2cmを測る。胴部上位に上、下2列の櫛歯刺突文を施す。上、下の文様間には2条の沈線を横位に巡らす。頸部との接合部付近までカギ目が残る。外底部は静止ヘラ削りを加えている可能性がある。焼成は堅敏で、胎土は精良である。137は口径13.0cm、器高17.6cm、胴部最大径16.4cmを測る。体部は緩やかに弯曲しながら上方に延びていくが、その最大径は中位よりやや下方にある。体部と口縁の境は不明瞭で口縁部は外弯しながら延びていく。口縁部内外面はヨコナデ、胴部外側はタテ方向のハケ、内面は斜位のヘラ削り後、軽いナデを施す。色調は明褐色を呈し、焼成は弱い。

IV おわりに

第23次調査では、遺構の分布密度が高く、切り合いで激しかった。基盤の褐色ロームや遺構覆土の黒色上は、乾燥すると色が褪せたり、クラックが生じたりして何度も水を打っても切り合ひの識別が困難な所があった。できるだけ出土遺物も検討しながら掘り下げを行った。

検出遺構は、弥生時代から中世にわたって存在している。弥生時代では、竪穴住居址、掘立柱建物、土壙、大溝（環濠）などがある。環濠からの出土遺物量は厖大で、短期間での整理は困難であった。弥生時代関係の報告は、竪穴住居址と土壤の一帯に限らざるを得なかった。梁行5間（7.3m）、桁行7間（10.2m）以上の大形の掘立柱建物や、大溝（環濠）から出土した中細銅戈の鋳型などについては、次年度に報告する予定である。

占墳時代の遺構は、50軒を超える竪穴住居址、土壤、溝などである。最も古い住居址は、5世紀前半から中頃にかけて登場する。S C 22・32・64・121がこの時期のものである。5世紀後半から終り頃にかけては、S C 28・45・46などがある。6世紀代にはいると住居址の数が増え、前半代に属するものが、S C 01・20・26・34・35・125などである。中頃の時期では、S C 08・36・37・39・43・47・71・109の住居址があげられる。6世紀の後半に属するものは、S C 02・03・05・09・10・29・30・33・38・40・59・88で、終末の時期に属する住居址は、S C 49・58・60・69である。終末になると数がかなり減少していく。7世紀代に入ると竪穴住居址は急に減少する。S C 04・25が7世紀初めに相当するものであろうか。その他、遺物が少ながったり、遺構の残り具合が悪くて時期をはっきり決め難いものも存在するが、多くは6世紀代に含まれそうである。

7世紀代になると、竪穴住居址にかわって、掘立柱建物が登場していく。この掘立柱建物については次年度に報告する予定であるが、概要を示すと、梁行3間（4.8m）、桁行4間（6.3m）の縦柱の建物が、3棟桁を備えて一直線に配列されている。3棟とも同一規模で、それぞれ棟が接しているところから、桁をつなげたひとつの建物（倉庫）ではないかと考えられる。3棟をつなげた延長は23mになる。また、同時期の溝が、東西（S D 62）及び南北（S D 89・92）に配列されている。南北に伸びる溝は規模が大きく、区画溝と考えられる。掘立柱建物の端から溝までの距離は15mである。

7世紀代は建物の重複がなく終焉を迎えている。8世紀から9世紀にかけての遺構は、細い溝が数条確認できるのみである。中世になると、また集落が營なまれ、井戸址や土壤、ピットなどが検出できる。井戸址の中でも桶組の井戸は桶が6段も残り立派なものであった。

なお、第23次調査で重要な遺構が出土したので、担当部局と保存協議を行ない、建物で破壊されない南半部を埋め戻し保存することになった。調査終了後、埋戻し作業を行なった。

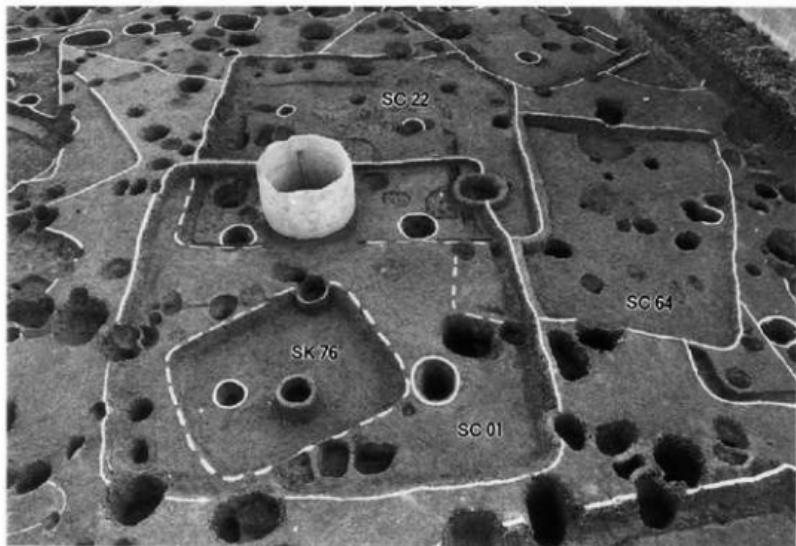
P L A T E S



▲(1) 調査区西半部全景（南から）

▼(2) 調査区西半部全景（東から）





▲(1) S C 01・S K 76出土状況（北から）

▼(2) S C 01遺物出土状況（東から）

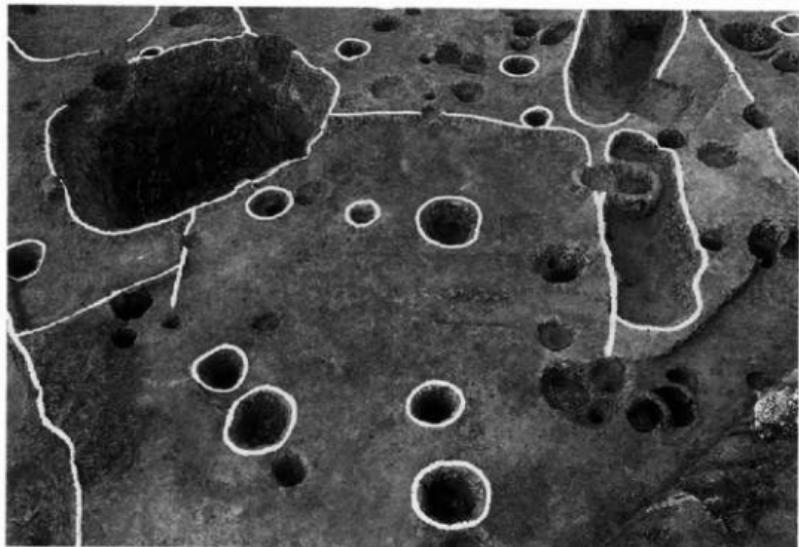




▲(1) SC02出土状況（東から）

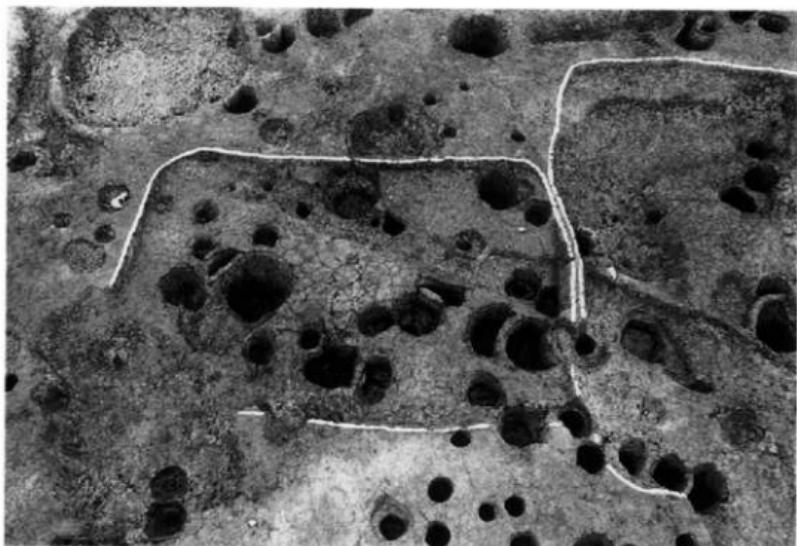
▼(2) SC03出土状況（東から）

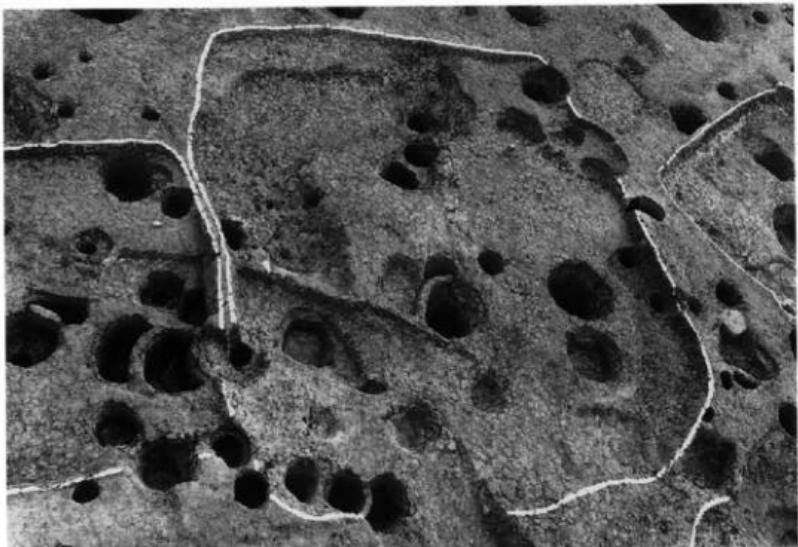




▲(1) SC05出土状況（南から）

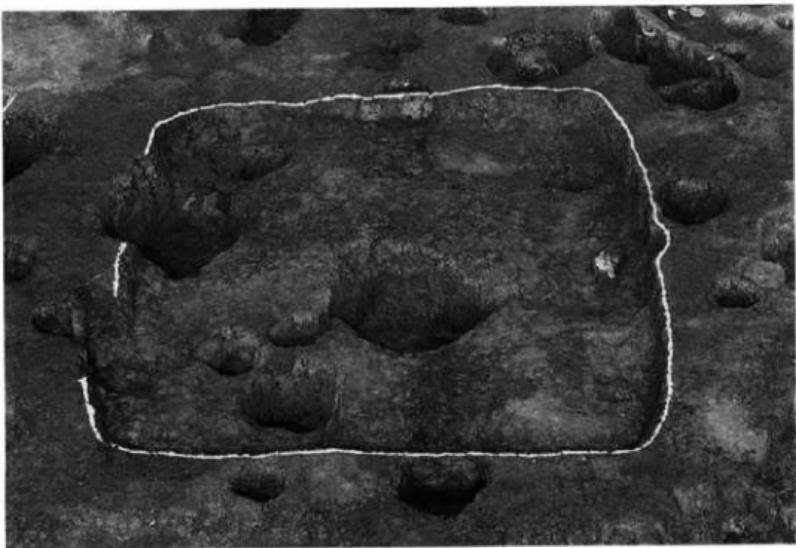
▼(2) SC06出土状況（北から）





▲(1) SC07出土状況（北から）

▼(2) SC08出土状況（南から）

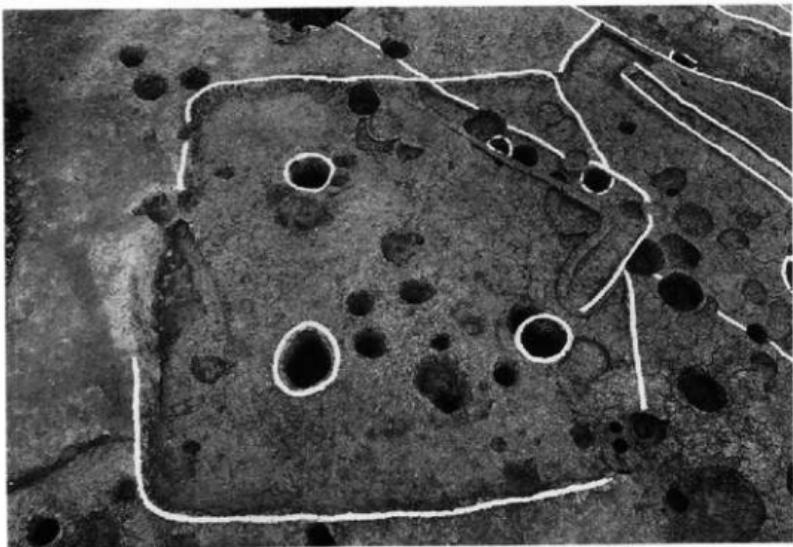




▲(1) SC09出土状況（東から）

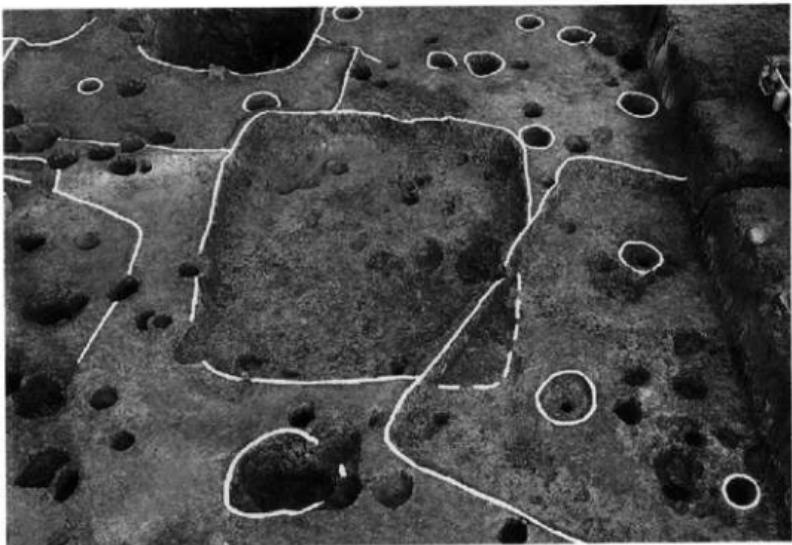
▼(2) SC10出土状況（西から）





▲(1) SC20出土状況（南から）

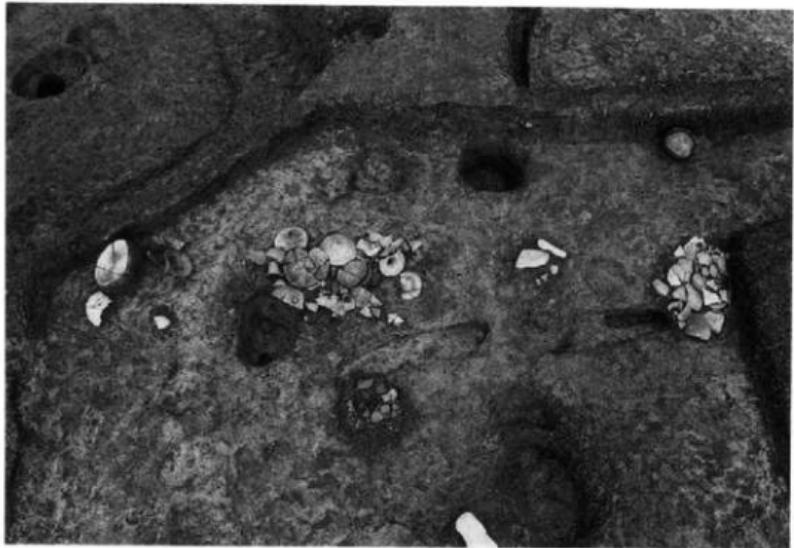
▼(2) SC21出土状況（南から）

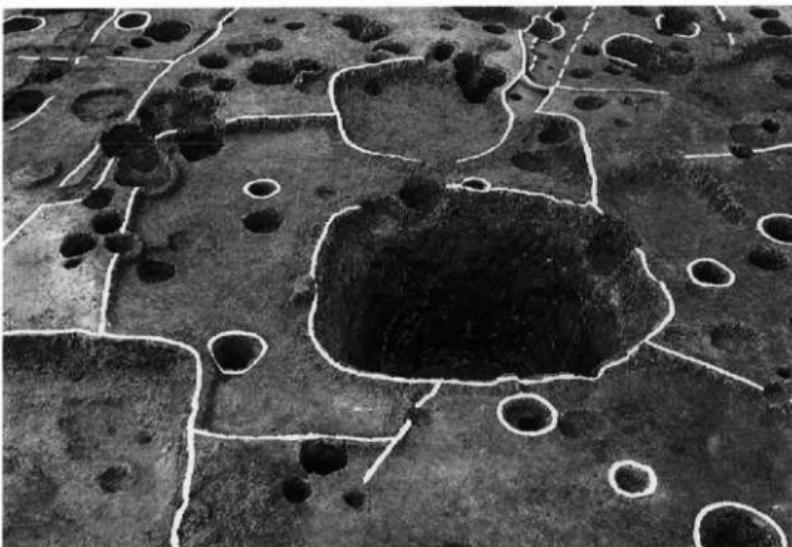




▲(1) SC 22出土状況（北から）

▼(2) SC 22遺物出土状況（東から）





▲(1) S C25出土状況（東から）

▼(2) S C26-27-32出土状況（西から）

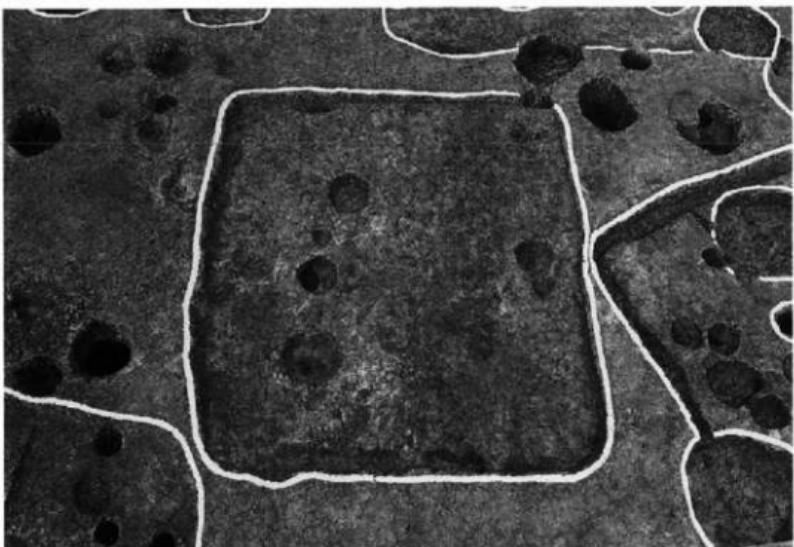




▲(1) S C 28-47-63出土状況（東から）

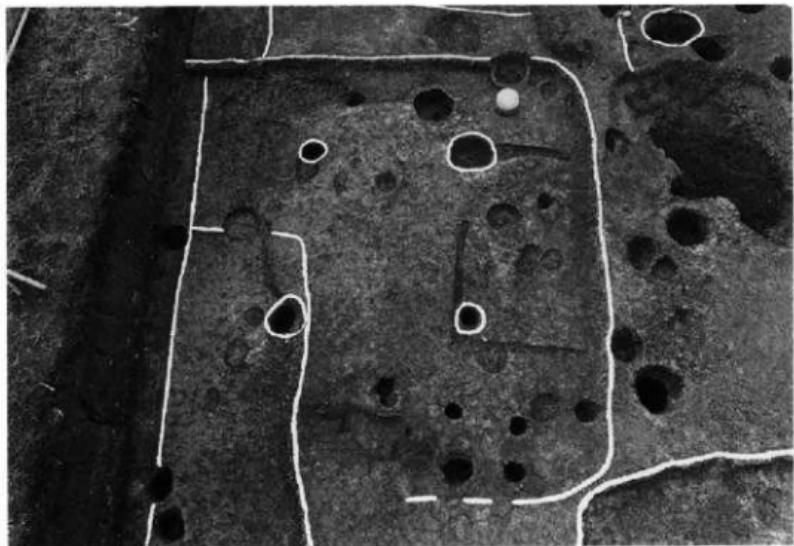
▼(2) S C 29-30出土状況（南から）





▲(1) SC33出土状況（南から）

▼(2) SC34出土状況（東から）

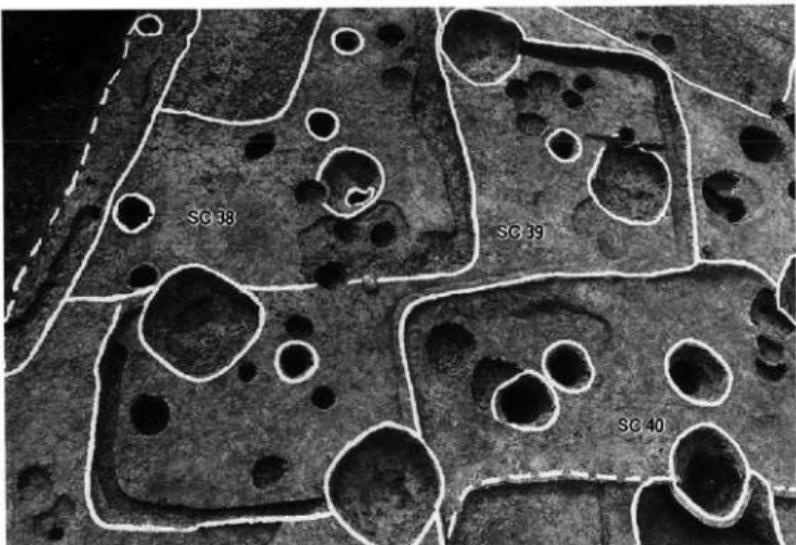




▲(1) SC 37出土状況（東から）

▼(2) SC 38・59・60出土状況（東から）

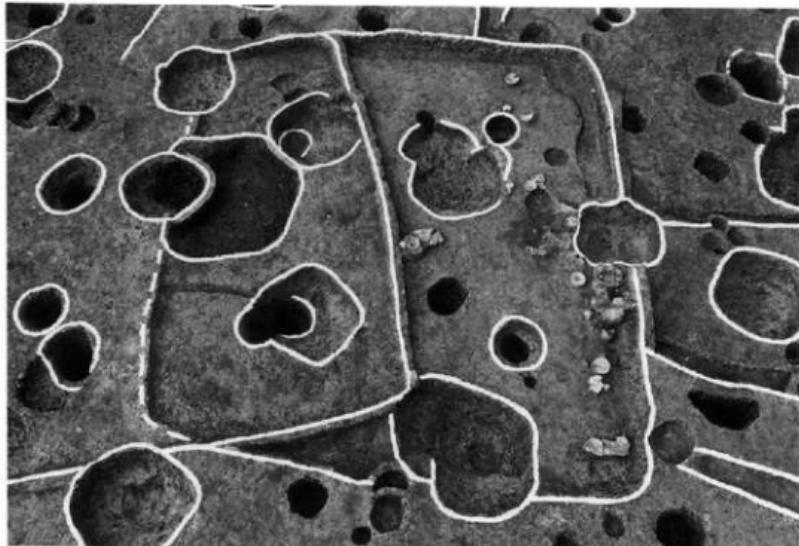




▲(1) SC 39出土状況（東から）

▼(2) SC 40出土状況（南から）

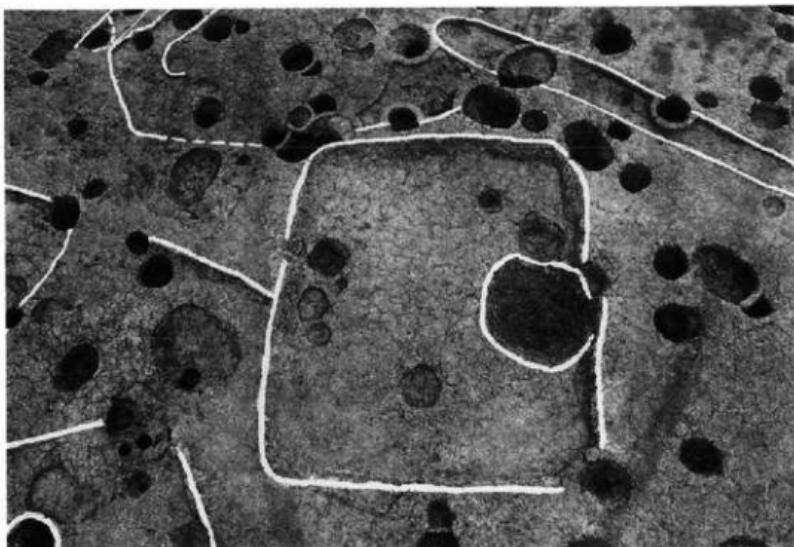




▲(1) SC 45出土状況（南から）

▼(2) SC 46出土状況（南から）





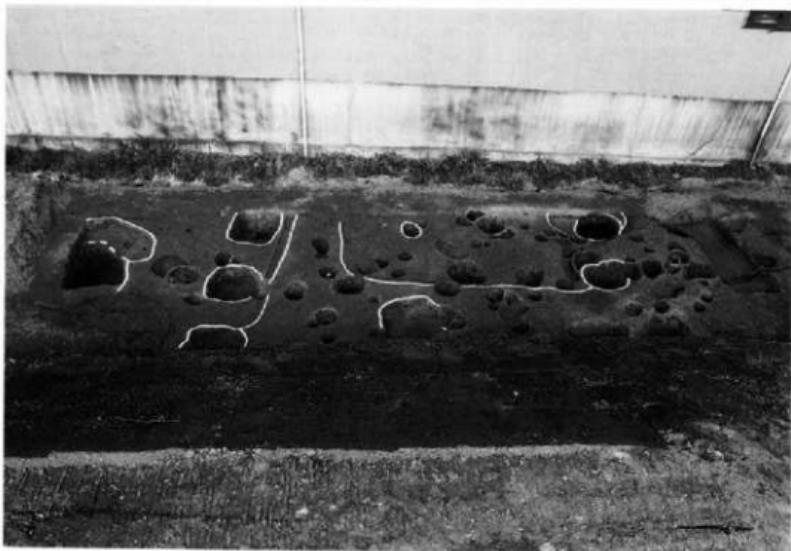
▲(1) SC58出土状況（北から）

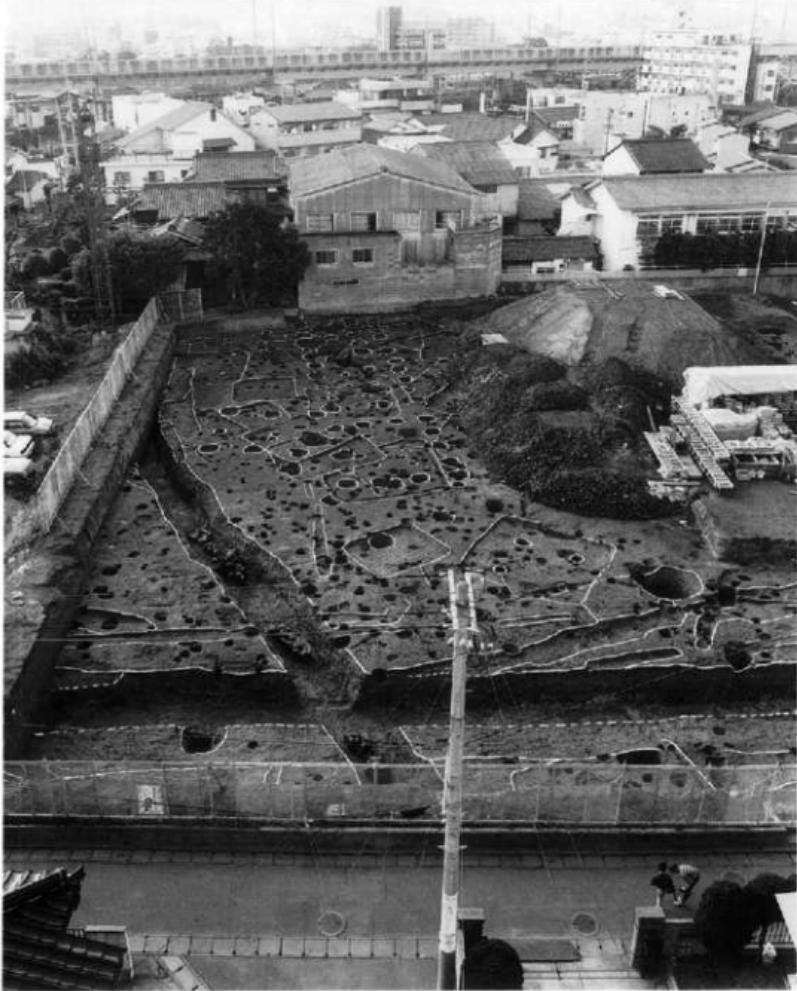
▼(2) SC109出土状況（西から）





▲(1) S B57出土状況（南から） ▼(2) 北側拡張部分 S B57、S C121・122、S K119・120（南から）



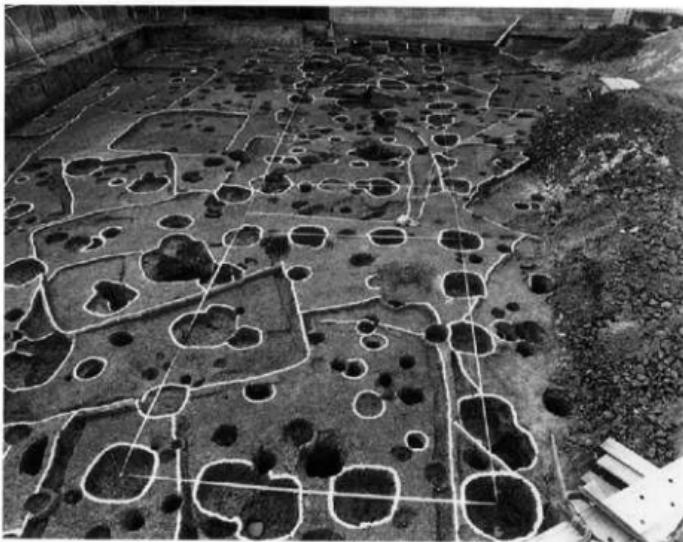


調査区南半部全景（東から）



▲(1) 調査区全景（南から）

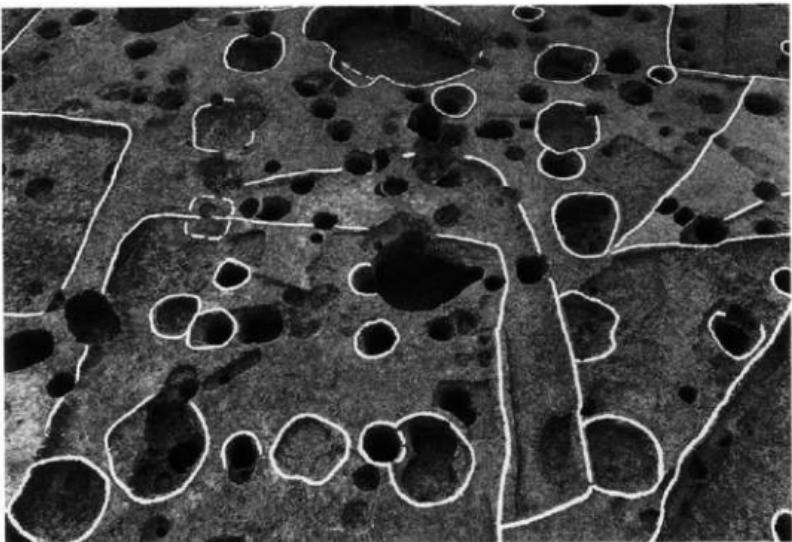
▼(2) S B87-90-91全景（東から）

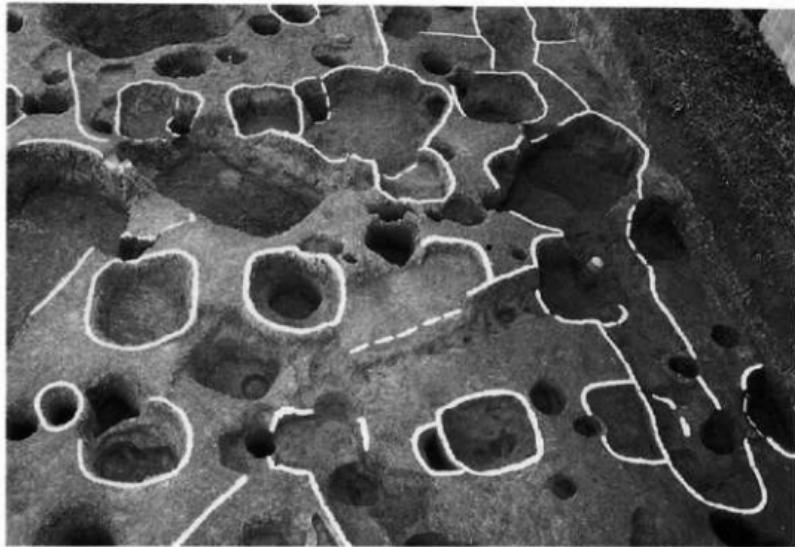




▲(1) SB87出土状況（南から）

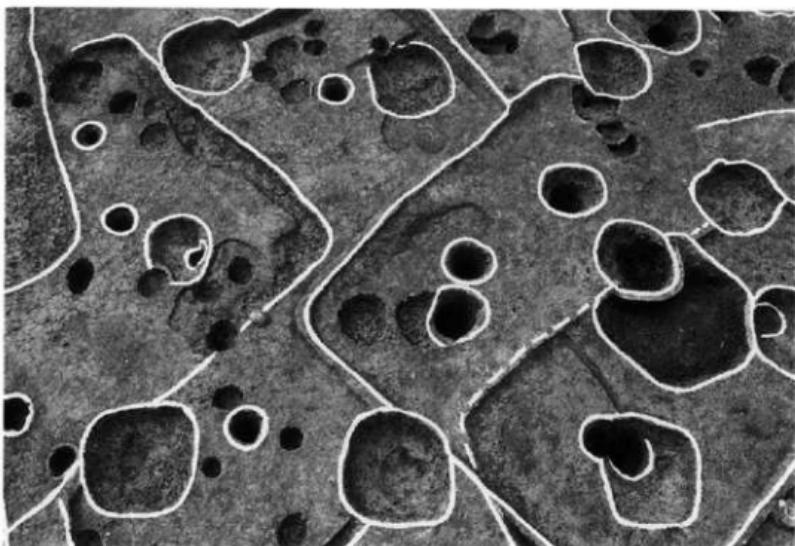
▼(2) SB90出土状況（東から）





▲(1) SB 91出土状況（北から）

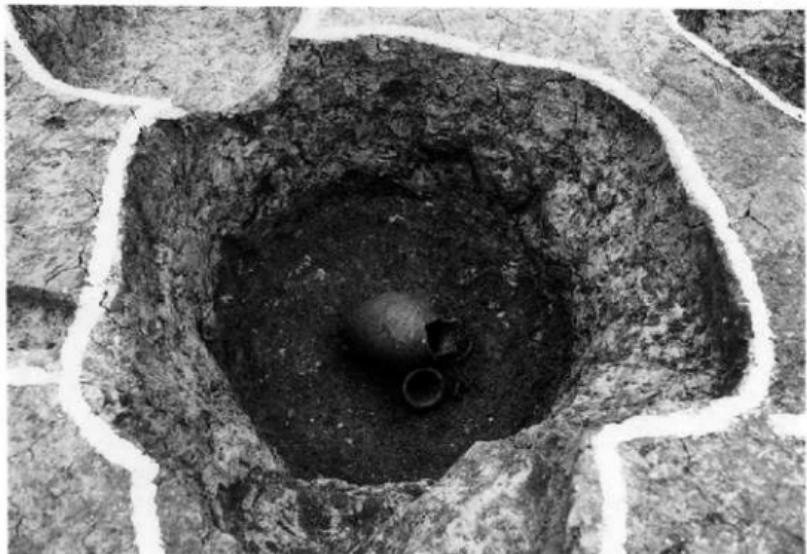
▼(2) SB 103出土状況（東から）





▲(1) S E 23出土状況（東から） ▼(2) S C 23井筒出土状況（東から）





▲(1) SE 83出土状況（西から） ▼(2) SE 83完掘状況（西から）

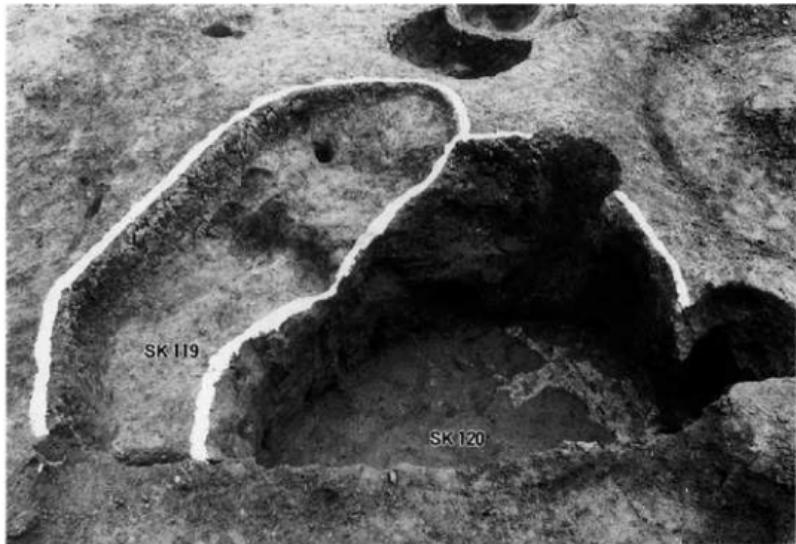




▲(1) SE 101出土状況（南から）

▼(2) SK19出土状況（南から）





▲(1) SK 119-120出土状況（西から）

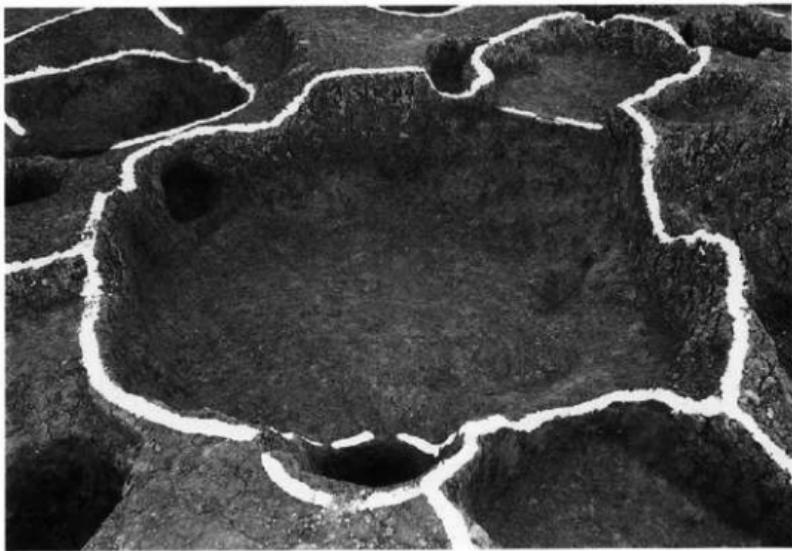
▼(2) SK 126出土状況（西から）





▲(1) SK 66出土状況（南から）

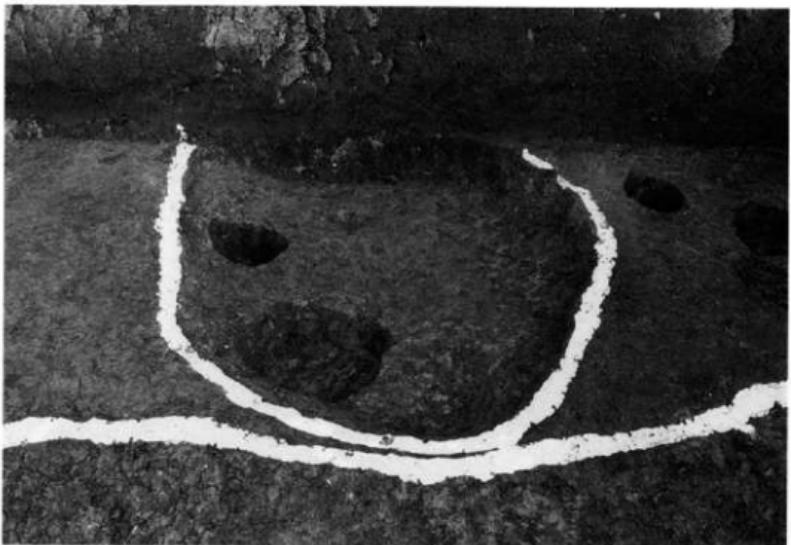
▼(2) SK 72出土状況（東から）

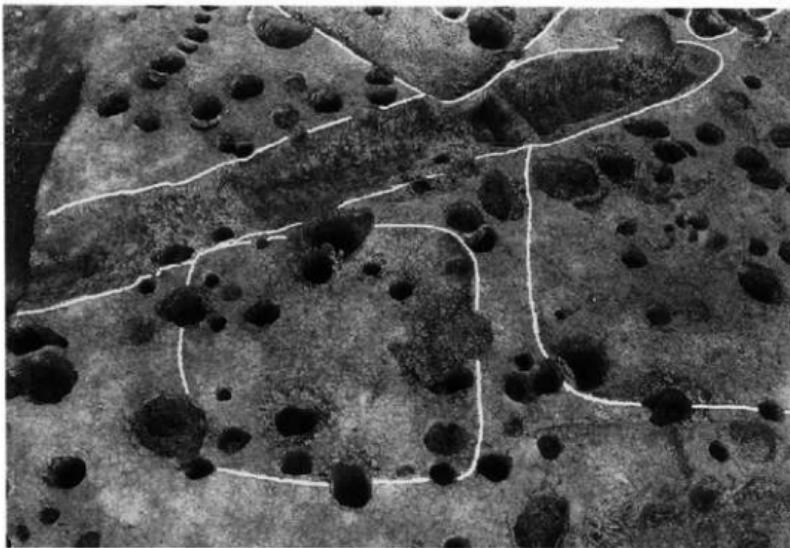




▲(1) SK 73出土状況（北から）

▼(2) SK 95出土状況（西から）

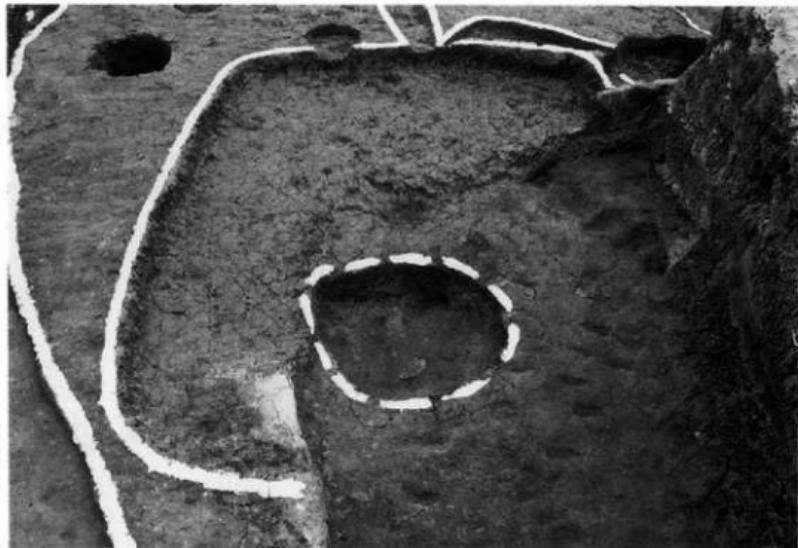




▲(1) SK12出土状況（西から）

▼(2) SK17出土状況（北から）





▲(1) SK98出土状況（北から）

▼(2) SK113出土状況(北から)





▲(1) SD11出土状況（北から）

▼(2) SD44土層堆積状況（東から）





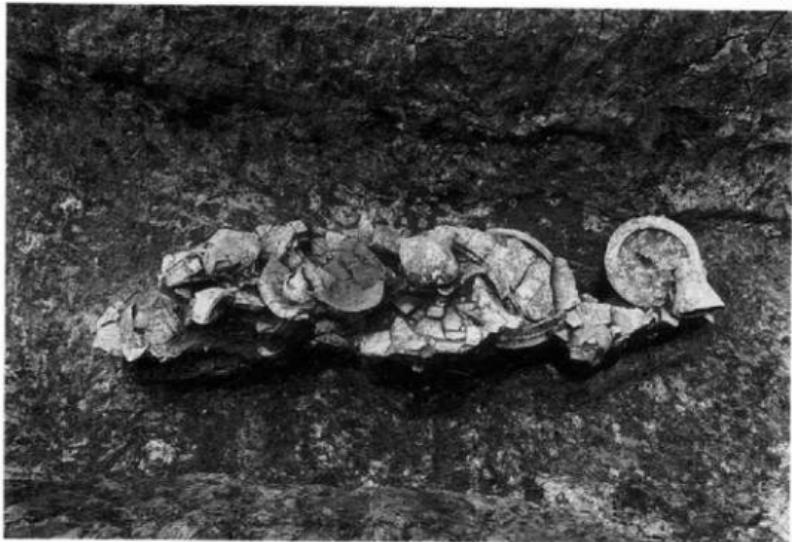
SD 44遺物出土状況（西から）



▲(1) SD44遺物出土状況（西から）

▼(2) SD44遺物出土状況（東から）

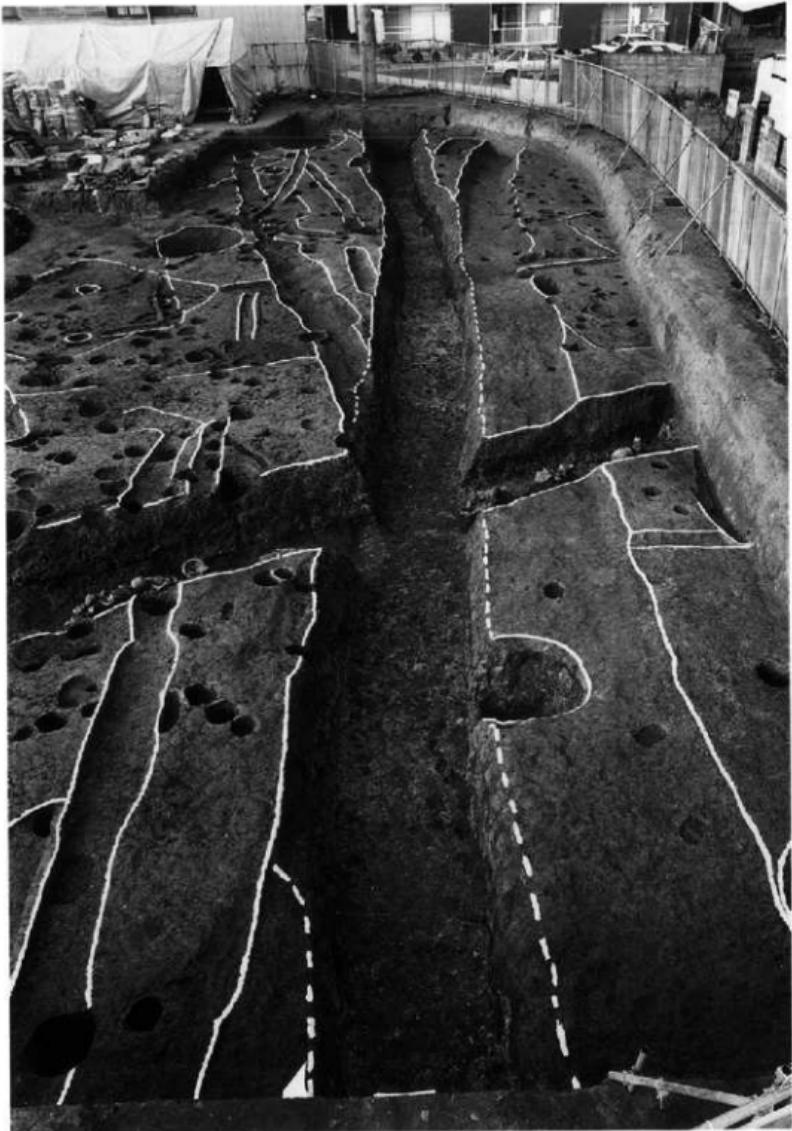




▲(1) S D 44遺物出土状況（南から）

▼(2) S D 44遺物出土状況（西から）





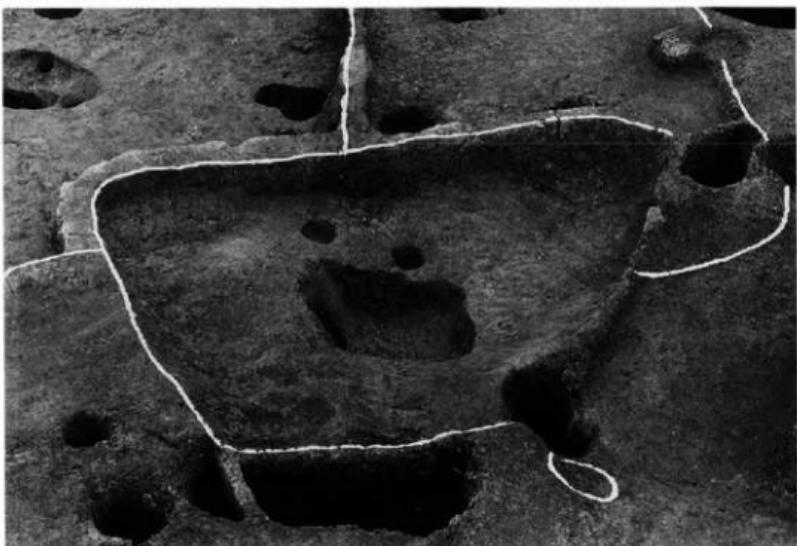
S D89出土状況（南から）



▲(1) S D 89・92・96出土状況（南から）

▼(2) S D 89土層堆積状況（北から）

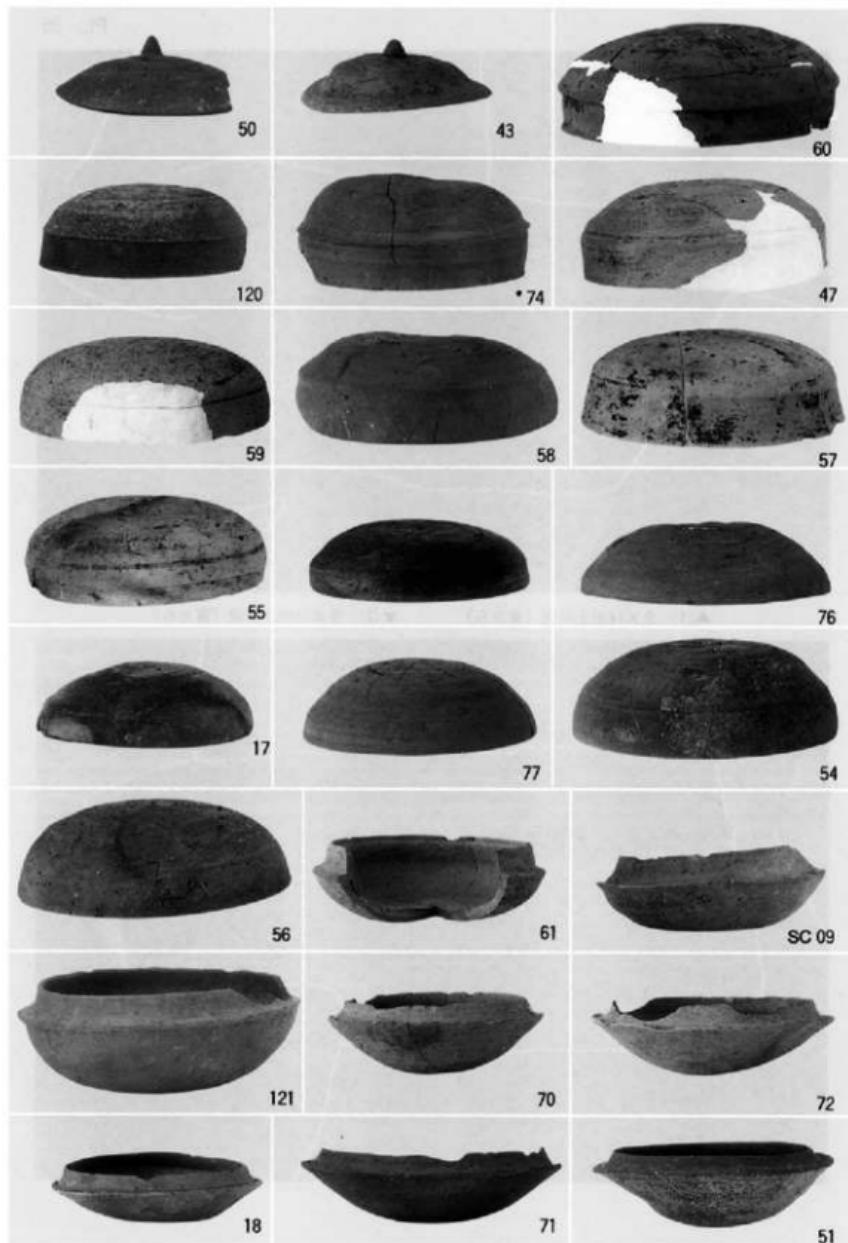




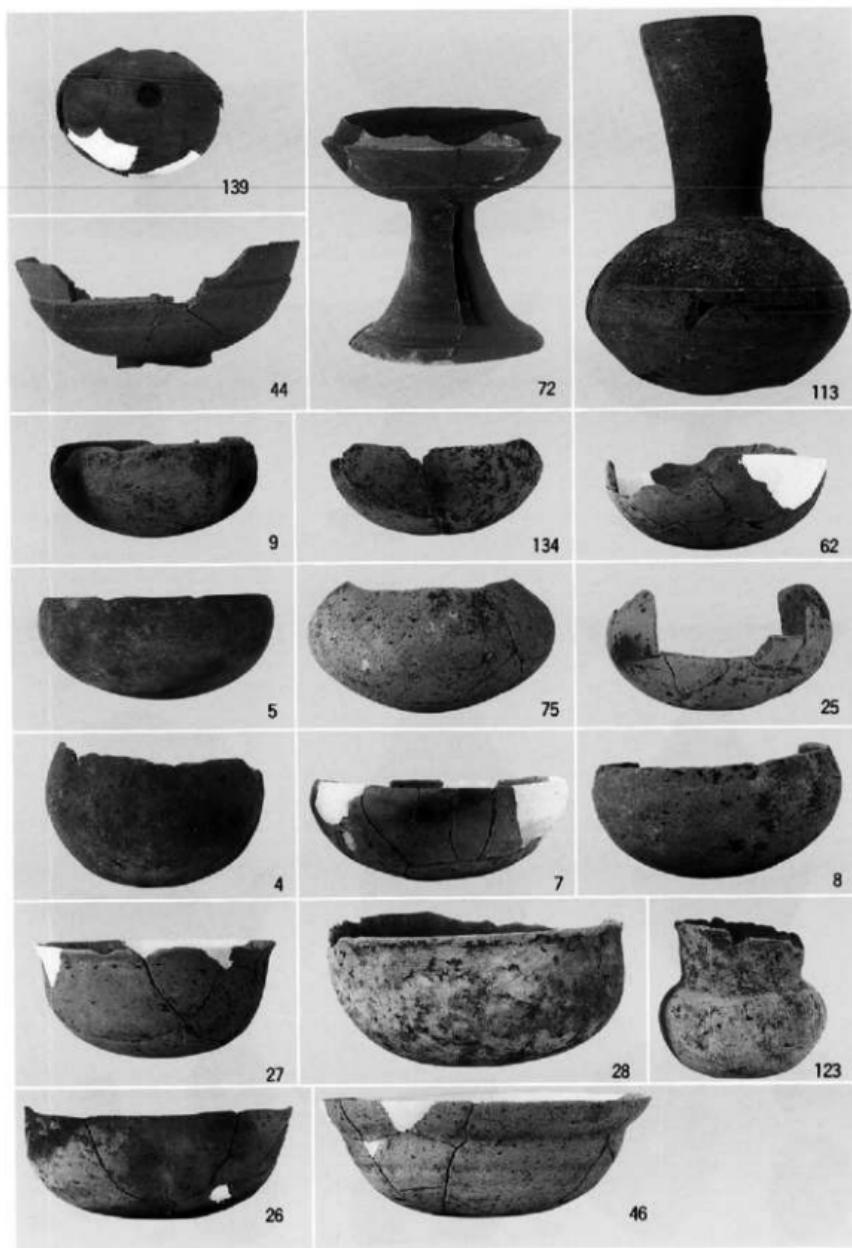
▲(1) S X14出土状況（東から）

▼(2) S X15出土状況（東から）

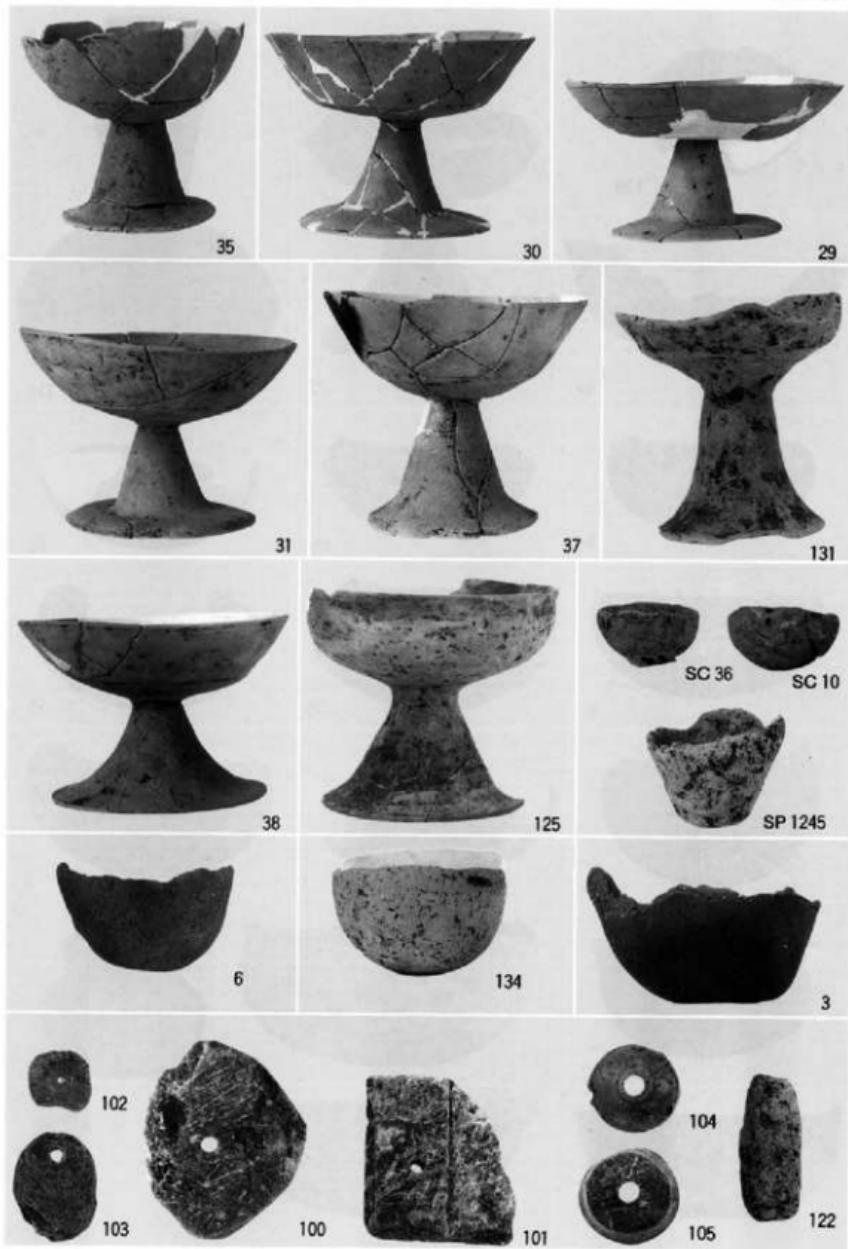




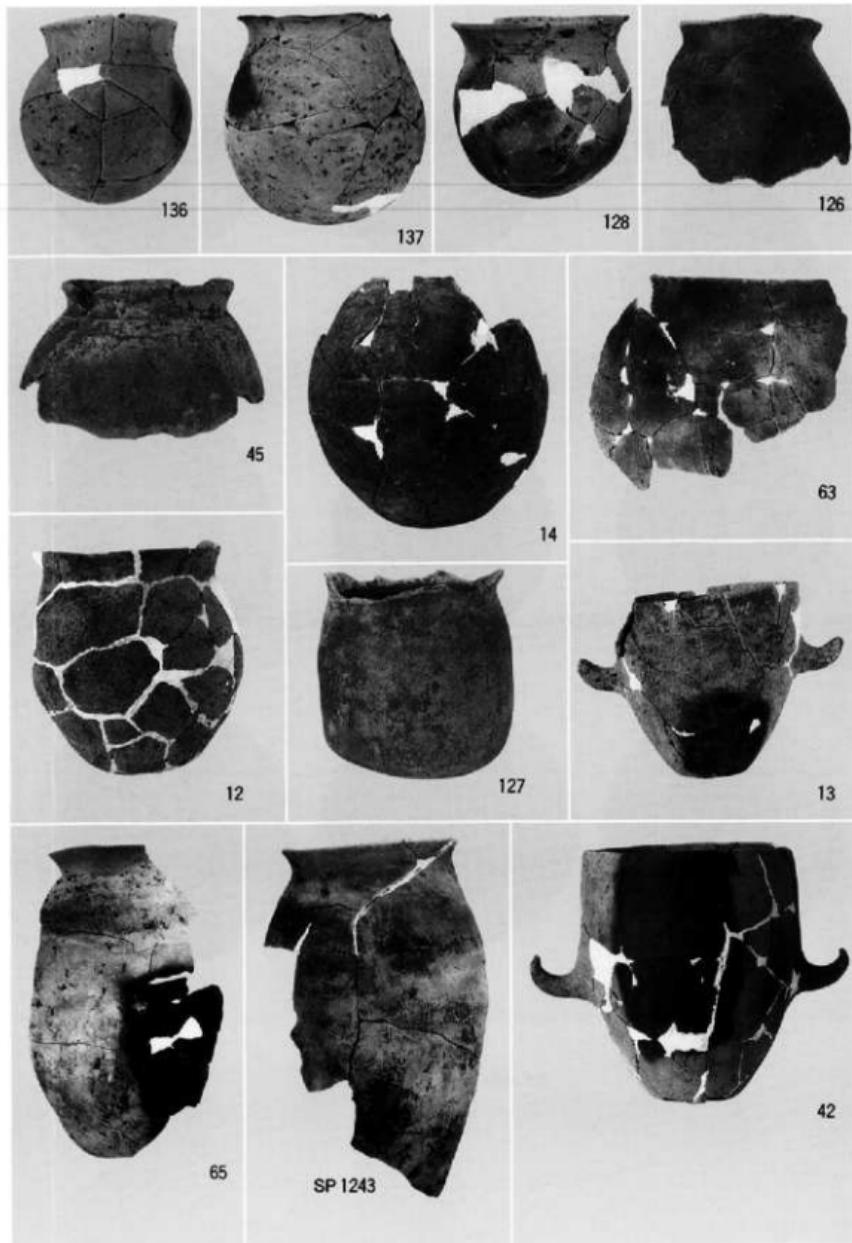
出土遺物 (1) 須恵器

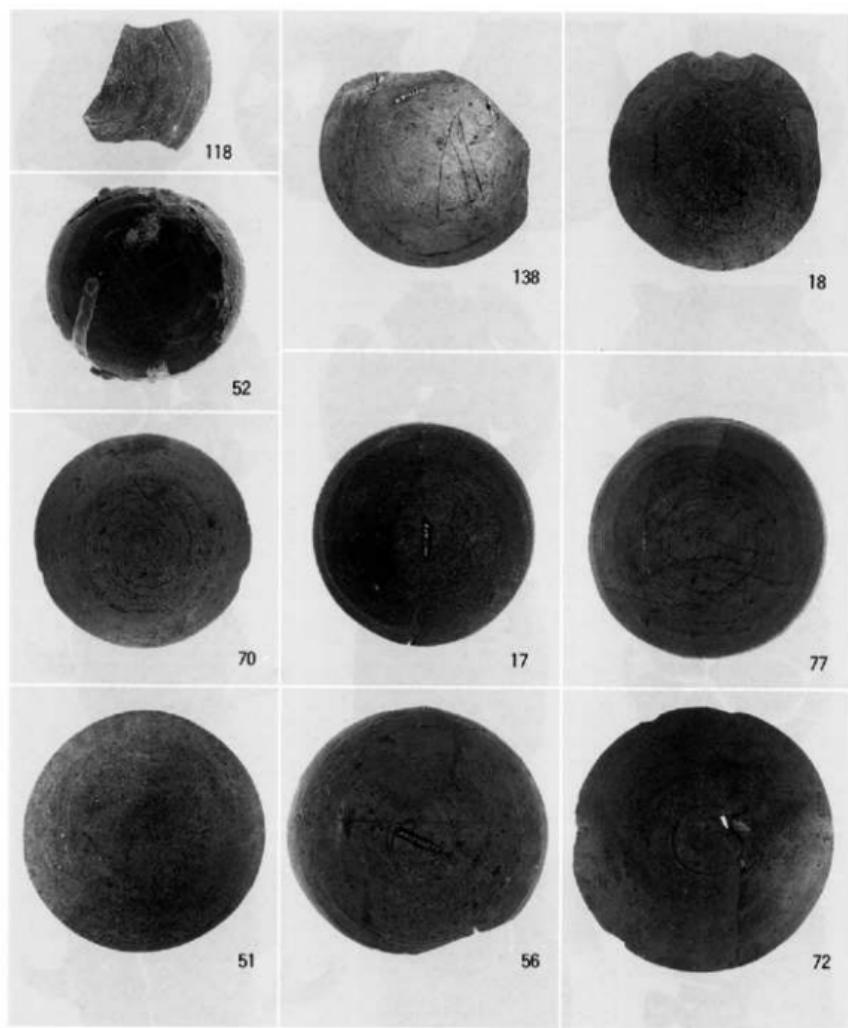


出土遺物 (2) 須恵器・土師器



出土遺物 (3) 土師器・手捏土器・石製品





出土遺物 (5) 須恵器 (ヘラ記号)

那珂遺跡4

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第254集

平成3（1991）年3月15日

発行 福岡市教育委員会
福岡市中央区大通一丁目8-1
(092)711-4667

印刷 同盟印刷株式会社
福岡市博多区博多駅南六丁目6-1
(092)431-4061

